

黒い仮面のレユニオン構成員＝黒い沈黙説(学会追放)

イカ墨リゾット

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

今日もフィクサー稼業に精を出すローラン君。長年の労働からか、不幸にも黒塗りの源石結晶が手の甲から露出してしまふ。必死の弁明をするローラン君に対して、龍門の秩序を司る組織、近衛局が言い渡したローラン君の処遇とは……

## 目次

人生は苦難の連続だよな。お前もそう思うだろ？	1
深呼吸して、そう、落ち着いて。……ホラ、違って見えるだろう？俺にはどうしようも無く汚く見えるぞ。君はどうだ？	8
ヤバくなると何かブワツと来るよな。分かるだろ？	14
底無しの恐怖に打ち震え……え？言ってみたくならない？	19
腐れ縁は断ち切れないから腐れ縁なんだ。縁って言っているのか？	23
あまり良い思い出じや無いのに、懐かしいと思うのは何でだろうな？	28
特色フィクサー	34
幹部って言っても、何すれば良いのかな？	39
閑話休題 シエスタに来たローラン君	43
ささやかな報復	47
最近のガキってのは凄いな？	56
財布を潰して皮を削ぐ	60
道化の奥底	67
ローランとW	75
久しぶりに友だちと会うと、色々複雑な気分になるよな？	85
沈黙は破れない	90
負け犬	95
秘密	102
独り狼と銀狼	107
青の便利屋	116
コーヒーって飲みまくと、歯が黄色くなるらしいぞ？	128

締め付けられる真綿	136
何処の都市にも黒いモノが渦巻いてるらしいぞ？	144
これっでもう作戦失敗だよな？	152
やり直したいコトってあるよな？	162
死にかけメンタル	168
深海からの手	176
戻れない？	183
前を向ける人と、できない人たち	191

人生は苦難の連続だよな。お前もそう思うだろう？

俺の名前はローラン。此処、龍門でフィクサーをやっている。

え？フィクサーが何なのか知らないって？そうだな。まあ、簡単に説明すればそれ相応の報酬さえ払えば、基本的にどんな依頼でも受ける便利屋みたいなもんさ。それこそ、雑務から遺跡探索、子守から殺しまで何でもだ。……いや、流石に龍門に来てからはそう言うグレーナ依頼はやってない。本当だぞ？

これでも少し前まではかなりヤンチャしていたけど、今では日々の生活費を稼ぐのに精一杯なんだ。1番の理由としては仕事が少なからだな。まず龍門には俺たちフィクサーが少ないんだよ。何でだと思おう？

お、御名答。その通り『ペンギン急便』さ。確か……エンペラーとか言うペンギンが経営してる運送会社でな。要するにトランスポーターだよ。何処よりも早く届けるってのが売りのところなんだ。俺も何回かお世話になってるしな。

けど実態は……トランスポーターの皮被った便利屋なんだよなあ。まだ要人の護送とか、武器の輸送だったら分かるんだけど、この辺のマフィアとドンパチやったりカーチェイスを繰り返るのは幾ら何でもおかしいだろ。トランスポーターってのは銃を乱射したり剣の雨を降らせるモンだったのか？受ける依頼が過激過ぎるだろ。しかも近衛局からも依頼が来るんだと。

荒事関係の依頼の殆どを持っていつちやうから、腕に自信があった奴の殆どは龍門から出ていったんだ。アイツらの後始末をして稼ごうと思っても、大抵の場合、あそこの社長のペンギンが金払って直しちゃうんだよなあ。

俺も一応事務所を経営してるんだけど、1日に良くて2、3人つてところなんだ。だから龍門中を練り歩いて、いつつも依頼を探してるんだ。ゴミ拾いとか下水道掃除とか、買い物の代理とかな。お陰で今では大抵の事なら難無くこなせるよ。喜んでいいんだか悪いんだか……。

これでも前まではそこそこ有名だったし、依頼も結構舞い込んで来たんだぜ？まあ、戻るつもりは無いけどな。滅茶苦茶疲れるしな。それに今の生活は確かに苦しいが、あの時に比べればすごい気楽だし、やり甲斐があるんだよ。

いつそ俺もトランスポーターに転職しようかな？免許って何処で取れたっけな。

「あれ？おじさんじゃん！こんな朝早くから大変そうだね。」

「そう思うんだったら少しは依頼を残しておいてくれよ……。あと俺は20代後半だ。まだおじさんじゃない。」

どうやら昨夜この辺でマフィアの抗争があったみたいで、珍しく近衛局から依頼が届いたんだよな。内容は破片やら血痕とかの処理だけど、近衛局からの依頼だから結構良い報酬なんだ。だからこんな早朝から張り切ってる訳だが、これまた珍しい事に、こんな時間にあのアップルパイ狂に絡まれた。

「にしても珍しいな？お前がこんな時間に起きてるなんてな、エキシア。」

「昨日は有給取ってガンショップに行ってたんだよ。あの守護銃を改造する時間が堪らないんだよ。」

「じゃあいつもより早めに寝てたんだな。」

「あはは。……実は3時のおやつにと思つて、アップルパイとお酒を飲んでたんだけど、そのまま酔っ払って寝落ちしちゃって。」

「昼間っから飲酒してたのかよこの頭アップルパイ……。」

コイツはエクシア。この辺じゃ珍しい部類に入るサンクタの少女だ。とにかく天真爛漫で明るくて、異常なまでにアップルパイに執着する変な奴だ。

一部のサンクタは守護銃つてのを持っていて、何でも構造が複雑過ぎてサンクタにしか扱えないんだとか。利点としてはクロスボウよ

りも弾速が速くて連射が効くところだが、音が一々でかいし、何より金が掛かる。

まず弾が馬鹿にならない値段だし、定期的にメンテナンスもしなくちゃいけない。そしてそこに維持費も入って来るんだ。サンクタじゃない俺としては、何故そんなモンを使ってるのか不思議でならないんだよな。

そしてさっきの銃を乱射するトランスポーターの正体はコイツだ。銃口から金をばら撒いてるのと変わらないって理解してんのか？

「今さらつと酷いこと言ったよね!? 私のガラスのハートにヒビが入っちゃったよ! そう言う訳だからランチ奢って!」

「こっちは日銭稼ぐのに精一杯なんだよ。頼むからどっか行ってくれよ……。」

「釣れないなあ。そんなんじや彼女出来ないよ!」

「うるせえ!!」

にひひと笑うアイツを追っ払う。此処に置いておけば気が散るし、何かとんでもないトラブルを運んで来るに違いない。

……いや、まあ俺だって彼女が欲しいと思う事はあるし、勿論世の中の一般的な、男性諸君と同じ様な思考回路は持っている。別に枯れている訳ではない。だが、俺みたいな奴の過去を知った上で受け入れてくれる人は、この世に一体何人いるんだろうな？

兎に角、考えたってしょうがない事だ。今は依頼に集中しよう。

周囲に散乱していた瓦礫やら瓶の破片やらを片付け終えて、血痕の処理に取り掛かる。流石にクロスボウの矢とかは回収して行ったらしい。

血液つてのは温度が上がると逆に固まりやすくなるが、見た感じはもう完全に乾いてしまっているの、そこまで気にする必要は無いだろう。昔知り合った同業者に教えて貰った薬品を、持ってきた布に染み渡らせてから血痕を拭い取る。見る見る取れて行くもんだから、つい楽しくなってさっきよりも手を動かすペースが上がった。

この薬品の調合方法を教えてくれたあのフィクサーは今、どうしているんだろうな。あの格好からして、恐らく殺しがメインだったんだ

ろうな。まだテラ中を飛び回ってるかもしれないし、何処かの戦場でくたばってるかもしれない。結構馬が合ったんだけどな。確か青の……青の、何だっけな？まあ、いいか。

そんな事を考えている内に、粗方の処理が終わった。後はゴミ袋に纏めた物を出しに行つて、その途中で近衛局に寄るだけだ。これで二千龍門弊……一応元は取れてるけど、だとしても少ないな。いつもの依頼に比べりや全然マシだけどな。

「すみません。依頼の方が終わりましたので、報酬を貰いに来ました。」

「ああ、ローランさんですね。分かりました。少々お待ち下さい。」  
今は近衛局に来ている。相変わらず統一された内装でピシツとしていて、俺みたいなのがいるのは場違いだと思わされる。

本来なら依頼を遂行したら必ず確認を取つて貰うのだが、その辺は信用されてるらしい。だったらもつと良い依頼を持ってきて欲しいものだが、幾ら信頼があつても所詮は底辺フィクサー。実力が足りないかと判断されても仕方がない。

「はい。お持ちしましたよ。」

「ええ、ありがとうございます。」

そして俺は今回の報酬を受け取ろうと、手袋を外し………視界がブレた。

一瞬何が起きたのか分からなかったが、たつぷり10秒経過したところで、ようやく俺が取り押さえられているのだと理解出来た。

周囲を見渡す。制服に身を包んだ近衛局兵士が3人、俺を押さえ込んでいる。床に強く打ち付けられたからか、鉄の味がした。少し離れた所で兵士の1人が無線機を取り出している。

さつきまで愛想笑いを浮かべていた事務員はカウンターの向こう側で立ち上がり、まるでゴミでも見るかのような視線を向けてくる。

何で俺はこんな目に遭つてるんだ？少なくともやましい事はして



いない。そんな事を考えていると、ふと、視界の端に自分の右手が映った。

「フイクサー稼業を始めてから使い込んできた、数少ない信頼出来る物の内の1つだ。随分と汚してきたが、シミも傷も無い、強いて言えば綺麗な、なんて事無い普通の手だ。」

そう思っていた。

手の甲の辺りに、黒い、艶のある物体が付着していた。というか生えていた。

俺はアダクリスでもないし、ましてやヴィーヴルでもない。だからこれは鱗とか、甲殻なんかじゃない。じゃあ何なんだ？いつから生えてた？

いつもだつたらすぐに解る事だが、この時だけは頭が働くのを放棄して来た。早く動き出せと強く念じる。で、分かった。

押さえ付けられる。怯える様な目。差別する様な視線。いつの間にか生えていた黒い物体。

ああ、鉱石病か。

自身の破滅する様子が、頭にすんなりと入って来た。

必要最低限の物だけをリュックに詰めて、俺は今、テラの広大な大地を彷徨っていた。

あの後、薄暗い部屋にぶち込まれたかと思ったら、大体8時間ぐら

い放置された。イライラしながら待っていると近衛局の奴が入って来て、一発殴られた後にとんでも無い事を言われた。

お前は感染者だから本来なら独房送りだが、今までの龍門への貢献度から見て特別に自由にしてやる。荷物を纏めて今日中に出て行け、だつてさ。

思わず掴み掛かった。出て行けだと？ふざけるな。俺が今までどんなにこの都市の為になる事をして来たと思ってるんだ？そもそも鉱石病は他人に感染する物ではないというのは知ってる筈だ。これからどうしていけばいい？

そんな事を言っていたら滅茶苦茶に殴られた。我ながら情けないと思うよ。

お前の様な人間がいるだけで龍門の風紀が乱れるから、だとさ。じゃあスラムのヤツらはどうなるんだよ？アイツらは何で追い出されないんだよ。……龍門市民だからだつてさ。龍門に来てもう数年になるって言うのに、俺は市民ですらなかつたのか？

事務所の前まで連れて行かれて、荷物を纏めろと言われた。1番大きいリュックに食料と着替え(と言ってもスーツしかない)、ありつたけの金と身分証明証を詰めた財布と護身用の大きな特殊警棒……に偽装させた剣を詰め込んで、コーヒーと昨日買っておいたハムハムパンパンのサンドイッチを食べて事務所を出た。この味とはもう会えなくなると思うと、寂しいものである。

この事務所だつてそうだ。此処での苦楽を共にして来た俺の仕事場兼家だし、過去に一度だけ、俺の元に来たフィクサー見習い……ちよつと違うが、まあ似た様な物だろう。……を受け入れた事のある思い出の場所だ。

暫くの間感慨に浸っていたら、近衛局のヤツらに強引に車に押し込まれ、検問前まで連行、検問から蹴り出されて、外で都市に入れるのを待っているヤツらに珍しげな視線を向けられて、現在に至る。

思い返してみれば、随分と落ちぶれたものだ。過去の実績も、今となつては俺を縛り付けるだけの鎖でしかない。

感染者になつた俺には、受け入れてくれる場所も、その権利を手

入れる為の金も無い。鉱石病には感染しないように、十分に注意を払っていたんだけどなあ。

いっそ、天災にでも巻き込まれて死んでしまおうか。そんな考えが頭を過ぎる。もし地獄が本当に存在するのなら、今頃俺が葬って来たヤツらが俺を待ち侘びているのだろう。そろそろ行っても良いのかも知れない。

生きる気力なんか、龍門に来る前に随分と擦り減って、だんだん戻ってきて、そして一気に削られた。今となっては自分の命なんて、どうでもいいときえ思えてしまう。

どうせ死ぬんだ。最後までいい思いっきり楽しんでみようか。そんな考えをすぐに打ち捨てる。そんな事したら、アイツらと一緒になっってしまう。それだけはゴメンだ。俺はあんなクソ野郎どもとは違う。

目的が欲しい。生きる目的が、死ぬ目的が。仲間が欲しい。俺を導いてくれる誰かが、俺と一緒に歩んでくれる誰かが。

遠くに、白い装束に簡素な仮面を被った、一団が見えた。

深呼吸して、そう、落ち着いて。……ホラ、違って見えるだろう？俺にはどうしようも無く汚く見えるぞ。君はどうだ？

今いる場所に、これから行く先に、そして辿り着く場所に、誰かがいると安心出来る。それが自分と同じ境遇、又は同じ目的を抱えてるってなると、随分と気楽になれるってもんだ。

ん？ああ、俺だよ。ローランだ。……こんな見た目じゃ分かんないか。

俺が見つけたあの白装束の集団は、『レユニオン・ムーブメント』って言う感染者の自由を取り戻す為に戦っている組織の、その一部隊だったらしい。……知らなかったな。それも、結構な規模があるみたいだ。

全員が感染者で構成されていて、種族はサルカズにウルサス、フェリンにリーベリと様々だ。正直言って驚いたな。だって普通だったらサルカズは魔族だとか言われる、所謂差別の筆頭なんだが、その差別が全く無かったんだよ。互いに気を配り合って、励ましあって、支え合っていた。そこに種族の垣根なんか無かったのさ。

……一度鉱石病に感染しなきゃ、こうはならないんだろうなあ。つくづく、悲しいモンだよ。俺が言えた事じゃ無いけどな。

最初は勿論武器を構えられて警戒されたが、俺が感染者だと分かる、まるで家族に接してるみたいに暖かく迎えてくれたよ。……あんまこう言うのには慣れて無いんだ。顔が赤くなつてもしよすがないさ。

その後にアイツらの組織の方針を聞いて、まあ、悪いモンじゃ無かったからな。それに行く宛も無かったし。俺も参加したんだ、レユニオンに。

そしたら今着てる、アイツらと一緒に白装束と仮面、武器を渡されたんだ。

スーツを綺麗に畳んでリュックに入れてから、パーカーとシャツが

合体したみたいなの制服を着て、チエストリグを着ける。結構大きめだな？

改めて周囲を見渡す。ピッタリなヤツもいれば、ぶかぶかなヤツもいる。どうやら全部一緒のサイズでしか支給されないらしい。定期的に体を鍛えておいてよかったよ。

武器は粗末な作りの、それこそ大量生産品ですよと言わんばかりの鈍だった。鏢が無く、握る部分に布が巻いてある。なんとも危ない獲物だ。

だからこれはもしもの時の為の予備として受け取って、俺はみんなに持って来ていた剣を見せて、ついでにある程度なら戦えますよアピールもしておいた。どうやら戦えるヤツは大歓迎らしい。

そして仮面を渡されたんだ。アイツらはコレしかなかったんだと言っていたが、一体どう言う嫌がらせなんだろうな？

それは何処にでも売っていきそうな、シンプルでチープな、無機質で、何処か不気味さを感じさせる仮面だった。アイツらが被っているのと同じ物だ。

ただ1つ決定的な違いがある。……俺の仮面は黒かった。

俺がかつて被っていた『仮面』とそっくりの色、形だ。唯一違う点と言えば、2つの穴がぽっかりと、目の部分で開いている事だろうか。

俺は戸惑った。またコレを被るのかと。

あの仮面を着けている間は、自分の世界が広がっていて、誰にも邪魔されなかったんだよ。

飛んで来た瓦礫から、矢から、刃から、憎しみから、恨みから、……血から、現実から、あらゆるモノから守ってくれた。

着けている間は、俺が俺じゃ無くなる。全くの他人になれる。顔を隠せる、視線を隠せる、思考を隠せる。昔の俺にとっての必需品だったな。それ故に、外さなかった。外せなかった。

誰も知らなかった、知られなかったあの時の俺の顔。自分でもどんな顔をしていたのかは分からない。まあ、どうせ碌でも無い顔だったんだろうな。

仮面を顔に近づける。勿論あの時の仮面じゃない。それでも、思う

所がある。

俺はまた、ただ人を殺して、拷問して、破壊して、騙して、依頼を遂行する、まだ落ちぶれていなかった時の『フィクサー』になっちまうのかな？

ただ自分をひた隠して、忘れさせて、騙し続ける、あの機械みたいな、俺に？

いや、違う。今の俺は目標を持っている。仲間がいる。これだけ有れば、十分に違うじゃないか。だから違うんだ。

俺は仮面を、被った。

……ああ、懐かしいよクソつたれ。

あの後、夕食になった。……お世辞にも美味しいとは言えなかったけどな。

そこで俺の身の上話をしてみたんだが、みんなコレを聞いて同情してくれるんだ。何とも言えない感覚にモヤモヤしたけど、悪くはなかったかな。

そこで誰かが愚痴を言い始めたんだ。いや、恨みに近かったかな？非感染者の、感染者に対する扱いについて語っていた。

こうして考えてみると、結構無慈悲で、理不尽で、不条理なモンなんだな。この世は。

ただ病気になった。別に空気感染する訳でも無い。みんなも気を付けよう。それだけでいい筈だ。

……今更後悔してももう遅いな。過ぎた事なんだ。こう言うのか

らは逃げずに、受け入れる努力をした方が何倍も良い。俺が過去から学んだ事だ。

みんなが自分の夢を、希望を、後悔を、罪を話して、それをお互いに慰め合って、支え合う。仲間ってのはこんなモノだったっけ？あー、やっぱり分からないなあ。

全員が全員、この世の最底辺を見て来たって顔をしてるんだよな。入り口ですら無いと思うんだけどな、それは。

まあ、アイツらも、俺も、程度は違えど叩きのめされた弱者って事さ。こーしてみんなで集まれば、ほら、もう怖く無いだろう？

どうせ破滅する運命なら、それを知っていると云うのなら、1人で逝くよりも大勢の方が、苦しいけど、悔しいけど、怖いけど、まだマシなんだ。あの孤独に比べれば。

ああ、仲間ってこう言う事か。

地平線の向こうから顔を出した光が、俺の瞳に突き刺さる。こうして拝んで見るのも久しぶりだな。

辺り一面、草木も生えない、その代わりに黒い結晶が連なっている、不毛の大地に今日もテラの風は吹く。全身で浴びているだけで、気分が清々しくなってくる。まるで仮初の希望が見えて来た時の様な、そんな空っぽな気分だ。正直言って、滅茶苦茶気持ち良いよ。最高だね。

あの後支給された毛布に包まって寝た俺は、いつもの習慣で染み付いた時間に起きていた。今、こうして崖からテラを眺めている。

遙か向こう側に移動都市が見える。この雄大な風景に混ざり込む異物は酷く邪魔くさい。いつそピンポイントで天災にでも巻き込まれたりしないかな？

みんなは鉱石病は悪だって言ってるけど、それは間違いだと思うん

だ。

俺達はどうやって此処まで発展する事が出来たんだろうな？どんな分野に於いても、根本にあるのは決まって源石だ。俺達は、源石無しじゃあ此処まで来れなかったのさ。

だったら何かしらの代償が有ったとしても、何もおかしくは無いだろ？そう言う事だよ。切つても断ち切れない、そんな関係。良い事だと思っぜ。

俺は別に鉱石病を恨んじやいない。それはお門違いってヤツだ。対策を怠った、俺が悪いんだからな？

俺は恨んで、いや、怒っているのは今の感染者に対する扱いさ。感染したら人外扱い、異物扱い。相変わらず、世知辛いモンだな？

……おっと、どうやら結構、思考の世界に浸かってたみたいだな？詩人な気分ってこう言うのを言うんだろうなあ。……フツ。

部隊の隊長から今日の活動について話される。ウルサス帝国付近の、とある山間部にある村での感染者の支援だとき。……大丈夫なのか？

ウルサス帝国って言ったら、感染者への当たりがトップクラスに強い国だ。恐らくその村には感染者ばかり集められているんだろうけど、当然ウルサス帝国軍の見張りが巡回してるんだってさ。

うわあ……、ウルサス人にはあんまり良い思い出無いんだよなあ。数ある種族でもトップクラスの怪力を誇るウルサス。屈強な男どもは兎も角、女子供でもりんごを握り潰せるなんてザラにある種族だ。

滅茶苦茶力が強い。それだけだ。それだけで十分な脅威になる。今までのフィクサー生活で、イツらの怪力で無惨な肉塊と化したヤツを何人も見てる。ホント、攻撃を避けても生きた気がしないんだよなあ。

味方にいれば頼もしいけど、敵に回った時は目も当てられない惨状が繰り広げられるんだ。何てったってサルカズよりも強いんだからな。カ比ベは挑まない方が賢明だぞって、身を持って教えてくれたアイツらには頭が上がないよ。



さて、何人死ぬんだろうな？俺はそんな理由で死ぬつもりなんて全く無いけど、久しぶりだしな、勘が鈍ってなければいいんだけど。でもさ、前を歩くアイツらが死んだらって考えてみても、何とも思えないんだよな。ただ生命活動を停止させただけ。他人と言っても過言じゃないヤツの死なんて、如何悲しんだらいいんだろうな？教えて欲しいモンだよ。

ホント、変わってないよ。忘れてたってだけだ。頭でも強く打ち付けられれば忘れるかな？

ヤバくなると何かブワツと来るよな。分かるだろ？

大自然を歩くって言われれば聞こえが良いけど、寒いのは苦手だよ。

所々黒い岩が出てるけど、それでも辺り一面真っ白だ。絶景と言えば絶景だけど、それは紙媒体や画面越しに見ているから言えると思うんだよな。いざその場に行ってみると、何らかの別の事に思考を奪われる。寒くてさつきから小刻みに震えてばっかりだ。

と、部隊の進行ルートに不満を漏らすレユニオン兵士、それが俺、ローランだ。

部隊長からウルサス帝国付近の感染者の救済に行くぞ、と言われたのが3日前。此処までの距離を歩いたのは本当に久しぶりだよ。

ん？あー、一応知らなさそうな君に説明しておく、俺が追い出された龍門は炎国の主要都市だから、大体その辺りをうろついているんだ。テラの地図を見た事があるかい？ウルサス帝国と龍門は結構な距離があるんだよ。

ふー、にしても寒いな。途中で防寒具を全員で着用したんだが、必要最低限ってところだから完全には寒さを防いでくれないんだ。

それでも靴と手袋だけはしっかりしているとところを見ると、ちゃんとコレを着用するヤツへの思いやりが感じられるな。悴んだ手じやあ碌に武器を振れないしな。靴に関してもだけど、足先の感覚が有ると無いとじゃ全然違うんだぞ？

そんな事を考えてる内に山岳地帯に突入したな。こつからはウルサス帝国軍が監視してる事もあるから、なるべく素早く行動するんだと。精々奇襲を受けないように祈りますかね。

周囲を警戒しながら進んでると、後ろのヤツが話し掛けて来た。話しを聞いてみると、どうやらレユニオンには『スノーデビル小队』ってのがあるらしい。

なんでも『フロストノヴァ』って言うレユニオンのアーツ部隊幹部が率いる精鋭部隊らしく、主に此処みたいな寒冷地で行動しているらしい。名前からして寒そうなヤツだな。冷気を操るアーツでも使う

のかなあ？

もしかしたら会えるかもなって適当に相槌を打ってこの話しを止める。隊長が言うには、そろそろ目的地に着くらしい。くれぐれも気を抜かないようにしなくちゃな。到着して気を抜いた瞬間に襲われたら、目も当てられないからな。勿論それほどの惨状が出来上がると言う意味で。

一山越えて、またもう一山を中腹ぐらいまで行くと、そこには村がある。小さくて、寂れた少し貧しい村だ。

幸いにもウルサス帝国軍はいなかったから、部隊長が村人達に事情を説明している間に、さっさと運んできた物資を村に運び込む。お、缶詰。せめて俺もコレが食べたかったよ……。

その後はちよつとした炊き出しをして、少しだけ休憩してから村を出る。後ろから感謝の声が聞こえてくるんだけど、ちよつと不思議な気分だな。こんな感じの心の籠った感謝は、今までに何回聞いてきたっけ？

心なしか、みんなも明るくなってるな。まあ、子供は可愛いよ。俺もそれぐらいは分かる。色々な話をせびられたヤツに至っては、仮面越しにも分かるぐらいの笑顔だ。こう、無邪気なところが良いんだろうな。

来た道を少しだけ外れてから戻れば、後はキャンプを張って休むだけ。この分なら、良い運動になりそうだな。多分力は衰えてないけど、持久力は落ちてるからなあ……。

物資を運び終えて軽くなった体を揺らしながら、木々に囲まれた山を降りる。足元には雪が積もっていて、踏み外したら麓まで滑っていきそうだな。

寒さで白くなった息を吐きながら、気を研ぎ澄ませて進む。いつ帝国軍に出会すか分からないからな。

ふと思ったんだけど、この仮面口の部分に穴が空いていないのに、不思議と苦しくならないんだよな。意外と良いヤツだったりするの

かな？俺が昔被ってたヤツもそうだけど、機能まで似てるとはな。

突如湧いた疑問はまた対処するとして、段々と視界が開けて来たな。どうやら、無事に山を下る事が出来たみたいだな？

地平線から顔を覗かせた太陽が発する光を、周囲の雪が反射して光り輝く。朝焼けに染まった空は、どこか儂げだ。

何人かが感嘆の声を漏らしてるけど、だからと言って気は抜いちやいけないんだよなあ。

……今更だけど、まだ日が登ってすらないのに押し掛けるって、相当迷惑だし非常識だよな。改めて考えてみたけど、よく追いつかれなかったよな。

ふと、何かが動いているのが見えた。その黒い物体は、俺達から見て右側の、それなりに遠いところで動いてるみたいだ。

ああ、クソツ。俺はアレが何なのか知ってるんだ。部隊長に声を掛けてから、急いで岩陰に身を隠す。

他の面々も部隊長の指示で隠れるところを眺めながら、俺はどうするかを考える。

まず、ウルサス帝国軍には国境周辺を巡回する索敵哨戒部隊がいる。主に5人ぐらいで1つの車に乗って、不審な者、もしくは物を見つけたら戦闘哨戒部隊に連絡するんだ。

で、戦闘哨戒部隊って言うのはガツチガチに武装した哨戒部隊で、不審者とかの排除をその場で行う、又はちゃんとした戦闘部隊が来るまで敵の侵攻を防ぐのが役目なんだ。ごつつい車に15人ぐらいで乗ってるんだよ。

索敵哨戒部隊が40〜50ぐらいで、戦闘哨戒部隊が10〜15ぐらいなんだ。で、索敵哨戒部隊はまず最初に戦闘哨戒部隊に連絡を飛ばして、次に国境付近の駐屯地に連絡を飛ばす。戦闘哨戒部隊はそのまま駐屯地に飛ばすんだ。

結局何が言いたいのかというと、俺達は戦闘哨戒部隊にぶち当たってたって訳だ。……もう見つかったのかな？

コレは冗談抜きで本当にヤバイ。もし見つかったら、多分遠距離から一方的に攻撃されるし、かと言って山に引き返しても、

生憎と後ろはウルサス帝国だ。囲まれてじわじわと死んでいくのがオチだな。それにさっきの村の連中を巻き込みかねない。

せめて接近戦に持ち込めればワンチャンスあるんだけどな。でもこの距離を走って詰めるとなると、腕や足の一本覚悟しなくちゃあいけないんだ。流石にこんな所で自分の鮮血振り撒きたくないぞ。

見つからないように注意しながら敵を確認してみると、こっちに向かって来ているのが分かる。

んー、あの速度から考えるに、「ん？何アレ？なんか見えたぞ。」って感じだな。……どうやらギリギリセーフだったみたいだな？制服が真っ白だったのが役立つらしい。

暫くの間息を潜めていると、アイツらの車が正面辺りで停止して、中から人が降りて来た。

ざつと12人つとところだな。盾を持った重装が3人、剣や槍を持った前衛が4人、クロスボウを持った狙撃手が3人、術師が2人いるみたいだ。多分車の方にも何人か残ってるな。何か異常があったらすぐに連絡出来る様に、と待機しているんだと思うけど、動きづらいなあコレ。

考えを巡らせる。こうしている間にもヤツらは此方に近づいて来ている。……ちよつと無茶かもしれないけど、生き残る為には頑張つて貰わないとな。きつと決死の覚悟で行けば成功するさ。

俺とは違う岩に身を隠した部隊長まで腹這いになって近づいて、俺の考えた作戦を伝える。部隊長の方もこの作戦に納得してくれたようだ。

作戦は至って単純、そう、シンプル・イズ・ベストだ。ただ寄つて来た帝国軍を殺して、狙撃手に車の逃走を妨害して貰いその隙に接近、中の奴を殺して車を鹵獲、そして逃走だ。

ん？ああ、安心しろつて。俺は車の運転ぐらい出来るんだ。これでもフィクサーだったからな。

この作戦で最も重要なのは、如何に最初にやって来るヤツらを早く

殺せるかだ。

その為には、より無駄が無く迅速に、効率的に、そして圧倒的にやる必要があるよな。

だから俺はアーツの準備をした。

俺の相棒とも言える剣を引き抜いてアーツを纏わせる。黒い靄が俺の剣に纏わり付く。それは、何もかも呑み込みそうな深淵を思わせた。そして俺は、周囲にアーツを解き放った。

辺り一面の白。吹き抜ける風。

——沈黙が訪れた。

底無しの恐怖に打ち震…………え？言ってみたくならない？

ところで、みんなは音の無い世界ってどう思う？

都会の喧騒は消えて、自然は静寂に包まれる。ピアノの鍵盤に手を置いても下手くそな音は出ないし、小鳥だって歌えない事に首を傾げる。

人によつては魅力的だったり、そんなのは絶対に嫌だ、という人もいるんだろうな。

俺か？俺はまあ、嫌かな。だって、俺は音の無い世界を知ってるからな。

俺はローラン。過去に自分のアーツを何度も誤爆させた事がある男だ。それも日常生活で…………よく捕まってるないな？

こんなくだらない事を考えてるのは、今現在俺がアーツを使っているからだ。

アーツを扱うのには、基本的に集中力が必要になる。冷静さを欠いたら駄目だし、かと言って、何も考えずに機械みたいに振るうのも駄目だ。…………本当によく生きてたな？俺。

イメージ。確固たるイメージが大事なんだ。こう放つたらこうなる、威力はこんな感じ、使うエネルギーはこれ位…………って感じになる。感情に任せて発動させるアーツは、確かに出力こそ大きいけど、その分体力を消費する。自分の命をコストに発動させてるのと変わらな

いんだ。  
じゃあ最適な精神状態って何なんだろうな？俺はいつもよりちよつとだけ集中、真面目モード！って感じで使ってるけど。ま、人それぞれだよ。

ああ、考えが脱線しかけてるな。集中集中…………。

ある日外を歩いていたら、突然自分の足音が消えるんだ。みんなの喋り声も、車の行き交う音も聞こえない。

自分だけが世界から切り離された、そう感じるんだ。そして、視界

の端から迫って来ている車に気付かず……。

……痛かったなあ、アレは。アレ以来、必死にアーツの制御を始めたんだっけ。

結構貴重な体験だと思うんだ。だったら、それを誰かと共有しても良いんじゃないのかな？

そんな過去の失敗を思い浮かべれば、アーツの準備は完璧だ。後は解き放つだけ。簡単だろ？

敵の重装兵達が最初に違和感に気づき、そして前衛、射撃兵、術師と、混乱は伝播して行く。

音が聞こえない。耳をやられたか？何処からだ？みんなは？生きてるのか？当然、普通ならパニックになるよな。

そして、致命的な隙が出来上がる。後は簡単さ。

目の前の大きな、壁みたいな重装兵を飛び越えて、剣を逆手に。狙うは敵の術師の首筋だ。

スパツと、小気味良い音を立てれば飛び散る赤い体液。それは鉄臭くて温かい。生物であるならば、必ず体内に流れる生命の結晶。

気付いたらそれを撒き散らしていた。そうなればもつとパニックだ。で、滅茶苦茶にアーツを、武器を振り始める。そんな事してたらもつと溢れるぞ。

1人1人の間隔を空けてから処理したら、次は射撃兵だ。血が飛び散る音すら聞こえないもんな。気付いて言う方が酷だよな。

振り向いたら目の前に、味方じゃないヤツがいる。じゃ、それは敵だ。そう判断した射撃兵はクロスボウで狙いを着ける。意識はそこで途切れてしまった。

ショットガンでも無い限り、近距離で弾を発射する系統の武器はお勧めしないな。

首筋を搔つ切ったら、逆手から順手に持ち替える。主に順手は正面切つての戦闘に、逆手は奇襲やトリッキーな戦闘に。

腰を入れながら顔面を一突き。そしてそのまま上に切り上げれば、はい、終わり。

振り向けば、そこに立っているのは一部を赤く染めた、白装束の集



団だけ。足下には、それなりに良さそうな装備を着けた肉塊が横たわっている。ヒュー、パーフェクトだな？

アーツを解除してから走り出す。さっきのはアーツらの周辺の音だけを【沈黙】させたんだ。勿論、効果範囲内に入れば俺自身も【沈黙】するけど、来ると分かっているのとそうじゃ無いのだと、天と地の差があるだろ？

武器を鞘に仕舞ってから、急いでヤツらの車の方に走る。味方の射撃兵や術師がフロントガラスを集中攻撃しているお陰で、ヤツらはビビって運転出来無いみたいだ。

……今思えば、最初から最後まで一緒に居てくれたのはお前だけだよな。初めての特注品だったから、興奮して『デュランダル』なんて名前を付けたつけ。アレはどうなったんだろうな？多分あの女が持つて行つてると思うんだけど、まさか売り飛ばして無いだろうな？

……つと、集中が途切れてたみたいだ。前よりも雑念が増えたみたいだけど、これも鈍ってるって言えるのかな？

車のすぐ側に到着して、ヤツらが降りて来た後ろの扉を開ければ、中には怯え切っているウルサスの軍人が3人いた。……仮にも軍人だろ。少しは戦闘の意思ぐらい見せろよ。

斬りかかろうとする味方を宥める。抵抗の意思を見せないヤツは殺さない。そうしないと後々面倒な事になるんだよ。

お前もヤツらと同じにく、とかコイツらにも家族がくみたいなありきたりな方法で虐殺を阻止する。……これは立派な善行だな！

車内にあつたロープでヤツらをふん縛ってから外に放り出す。これぐらいウルサスだから耐えられる筈さ。ちゃんとコートまで着せてやってるんだからな？

後から乗り込んで来た仲間を尻目に、車の運転方法を確認する。……俺が運転した事がある車と、運転方法は大した変わらないみたいだ。

パンパンに人を詰め込んだ車が発進する。発信機？そんなのは付いていないと思うし、どうせ乗り捨てるから無問題さ。にしても……暑苦しいな。何人か天井の上に出てくれないかな？

ハンドルを操り、ちよつとした道になっている場所を走る。フロントガラスは破れているから、吹き付ける風が寒いけど我慢だ。おい、後ろのお前らもだよ。助手席の部隊長を見習えよ。俺なんかモロに喰らってるんだぞ？

部隊長が言うには、この車はレユニオンの技術部隊にまで持って行くそうさ。……んまあ、乗り捨てるよりも、そっちの方が戦力増強に良いだろうな。さつきは付いてないって言ったけど、何だか発信機が付いてないか不安になって来ちゃったじゃないか。勘弁してくれよ？

にしてもレユニオンの技術部隊か。聞いた感じだと、結構腕の良いヤツが所属しているらしい。多分だけど、鉱石病に感染したからって、クビになったエンジニアだったり、工房を追い出されたヤツだったりするんだろうな。……俺がよく使ってた工房の連中が、その程度の理由で解雇するとは思わないけど、また特注で作って貰えるかな？でも金無いしなあ……。

暫くの間走っていると、ふと、誰かが先程の戦闘を話題に出した。俺はやってやったぞ！とか、あそこはこうした方が良かったな、とか。そして、話題は俺の事で持ちきりになった。……何で？

部隊長に聞いたら苦笑いされた。何でも、彼処まで戦闘能力が高いとは思っていなかったらしい。まあ、そう見える様にしてたけどさ……。特にアーツが凄かった、との事だ。そう言われてみれば、確かにそうかもな。アーツと言えば火を起こしたり、電気を発生させたりが一般的だが、俺みたいにああして現象に干渉するヤツってのは稀だからな。それに鉱石病に罹って無かった時でも、アレ以上の事出来たし。何ならもう一個使えるし。

……アレ？俺って実は、結構凄いヤツだったのかなあ？……ま、当然だよな！

……少なくとも、普通では無いよな。

腐れ縁は断ち切れないから腐れ縁なんだ。縁って  
言っつていいののか？

あれから色々とおつたけど、この組織にも随分と馴染んだかな。

感染者を助けたり、非感染者と戦ったり、非感染者から奪ったり、非感染者から……碌な事してねえなコレ。地獄の最下層に落とされそうだな。

とまあ、こんな感じに罪を積み重ねて行ってる訳だけでも、今回はまた一段と重い罪を背負う事になりそうなんだ。

そんな訳で今更神様に祈ってみる俺、ローランド。幾ら何でも遅過ぎたかな？

あの後車を技術部隊にまで持っていたんだけど、結構面白い光景を見れたんだよ。確か……レユニオンの空挺部隊だったかな？ ジェットパックの調整をしたみたいなんだけど、危うく死人が出るところだったんだ。

……流石に反則だろツ、「見せてやろうか！」って言って装着したら、近くの森林に吹っ飛んでいったんだぜツ、何やったらあんな雑揉み回転するんだよ……ツプ、クフフフ……！……笑い事じゃ無いな。てか何で生きてたんだアイツ。まさか慣れてるとかじゃ無いだろうな？レユニオンの空挺部隊が心配になって来たぞ……。

……まあ、それでだ。戦闘能力の高さを評価されて、早速別の部隊に異動する事になったんだけど、コレがまさかの突撃部隊でさ。またあんな死線を潜り抜ける事になるとは思わなかったんだよ。移る理由は分かるけど、本人意思の確認ぐらいしろよ……。

それに、そこはレユニオン幹部の1人、『スカルシユレッダー』が率いる部隊だったんだけど、子供だったんだよ。信じられるか？ウルサスだとは言え、まだ小学校低学年位の歳みたいだったぞ。

薄々勘付いてはいたけど、完全な実力主義みたいだな。この調子じゃあ、まだ他にも子供の幹部がいそうだな？……きつと全員人外レベルで強いんだろうなあ。何だよ、最近の子供はブレードで敵の盾こ

と胴体を半分に叩つ斬るモンなのか？

……恐ろしいな。俺だって出来ない事は無いけど、あくまでちゃんとそれ用の武器を使つての話だぜ？子供に負けた……シヨックだな。ま、まあアイツはウルサス人だし？俺はそう言う怪力系の種族じゃないし？だからしようがないんだよ。……しようがないさ。

おっと、過去を振り返るにしても、こんなくだらない過去を振り返つても何の為にものならないな。では、これからの事に集中するとしますかねっと。

俺達レユニオン突撃部隊は今、ウルサス帝国の都市の1つ、チエルノボーグに来てるんだが、前にも言った通り、此処は感染者への扱いが酷い。じゃあ何で来たのかつて？

そりゃあ、ぶつ壊す為だからさ。最初に上司から聞いた時は、指導者は気でも狂つたかつて疑つたけど、別にそんな事は無いらしいし、個人的な恨みもあつたり無かつたりするから、丁度良いかかつて考える事にしたんだ。レユニオンを抜けたら、今度こそ何処にも行けなくなるからな。それだけは勘弁願いたいぜ。

この作戦という名の虐殺には、殆どの幹部が参加するみたいなんだ。当然、真面目なスカルシュレットダーが蹴る筈も無く、俺はまた最前線に突撃する事になったのさ。……死にたく無いな。

今回の作戦では、移動都市であるチエルノボーグが国境に最も近づいたタイミングで突撃、そして乗り込んで、後は大暴れつて感じた。シンプルなのは嫌いじゃないぞ。寧ろ好きなくらいだ。

突撃部隊つて本当に嫌な役回りだよ。だつて真つ先に死ぬ部隊だからな。今まで往生際悪く足掻いて来たけど、まさか未だに役に立つとはな。

殺られる前に殺る、俺は好きなんだ、この言葉。やられてから、それ以上の事をやり返すのも悪く無いけど、損害はゼロの方が良いだろう？

そして今回の作戦において敵対する事になるヤツは、チエルノボーグの憲兵団と、常駐してるウルサス帝国軍だな。真正面からは絶対に戦いたく無いね。アイツよりも遥かに弱いヤツらに血霧にされるの

は御免だからな。アイツと戦うのも御免だけど。……確かもう死んだんだつたよな？あの化け物が戦死とか……考えられないよ。

今はウルサス帝国の国境付近に潜伏中だ。そんな事を考えながら、俺は自身の愛剣を引つ切り無しに研いだり、磨いたりする。本当は工房の連中にお願いたいところなんだけど、金が掛かるしなあ。収入ゼロの実質無職みたいな俺にはキツイかな。

にしても『デュランダル』とは、俺も結構良いネーミングセンスしてるとは思わないか？実際のところ、一度も折れたりなんてしてないしな。刃毀れは……ちよつとだけ。

俺自身の組織内での地位もちよつとだけ上がって、装備もちよつとだけ良い物に変わったけど、仮面だけは変わらなかつたんだよなあ。みんなは赤とか、バツテンが付いてたりとかしてるのにさ、俺だけ黒一色とか何の虐めだよ。やめろお前ら。1人だけ違って強そうとか言うな。終いには泣くぞ。

……俺はちよつとセンチメンタルな所があるのかもな。いつまで過去の柵に囚われてるんだか。て言つても、無理なモノは無理だしな……。いつそ記憶喪失にでもなれないかな？……いや、やめておこう。もし戻ったりしたら、その時の反動で発狂しそうだ。

愛剣の手入れに満足が行き、鞘に入れてからベルトに下げる。鞘も立派な武器だから、直ぐに外せるようにしておかないとな。

そうして1人離れた所で、座りやすそうな岩に座っていると、続々と幹部の連中が集まり始めた。

んー、どれどれ？あのループスの女は見た事が無いな。見た目的に暗殺特化みたいだな。そして……ガキが2人、か。やつぱり他にもいたのかよ。白髪の方はなんか薄気味悪いな。黒い方は……存在感が薄過ぎないか？にしても馬鹿でかいクロスボウとか、あの女を思い出しちまうからやめてくれ。マジで何処にいたのか分からなかつたかな。……何で生きてるんだろう。

あの白いコートスの女は、多分フロストノヴァってヤツで間違い無いな。可哀想に、あまり長く無さそうだな。

そして、何だアイツ。やけにデカイし、ボロボロだけど……アイ

ツ、パトリオットか!?!生きてたのかよ!?!何でレユニオンに居るんだ? やべえな、殺されないかな?ば、バレないよな?大丈夫だろ、うん。多分……。

色々と疲れるな。想像以上にヤバい面子じゃないか。幹部の連中がパワーインフレ起こしてるんだけど、これならチエルノボーグどころか、ウルサス帝国ごと破壊出来るんじゃないか?

で、あれがタルラ。レユニオンの指導者、ね。……強いな。自信無くなつて来たぞ。レユニオン・ムーブメント、恐ろしい組織だな。これだけ戦力が充実していれば、非感染者への攻撃が激しくなるのも無理は無いのかもな。

お、やつぱりトップが出て来たら集まり始めたな。俺も一応分隊長になつてるんだし、さっさと行つたほうが……

「ねえ、貴方ローランでしょ?随分と落ちぶれたモノね。」

後ろから声がした。気付かなかつた。この若干イラつかせる声と喋り方は……

「はあ……。お前、生きてたんだな。W。何で俺だつて分かつたんだよ。」

「その剣、散々私達の前で振り回してきたでしょ。忘れる方が無理な話よ。」

W。サルカズの女傭兵。爆弾魔。凄く嫌なヤツ。でも強い。……腐れ縁だな。

そして、昔の俺を知っているヤツでもある。はあ、ホント、厄介なヤツに見つかったよ。俺の運を呪いたくなるな。

「何でお前がレユニオンに居るんだ?ヘドリーとイネスはどうなった?」

「別に?テレジアを殺した奴等をぶつ殺して、レユニオンで傭兵としてやってるだけよ。言っておくけど、私は幹部だから言う事は聞いた方が良いわよ?」

「おい、誰だお前を幹部にしたヤツは。人選ミスなのは火を見るよりも明らかだろ。」

「今の台詞、タルラの前で言ってきたら?」

「……で、ヘドリーとイネスはどうなった。」

「隊長さんの方はあの摂政王の方に召喚されたわ。イネスは多分死んだ。」

「多分だと？それよりもアイツが死んだのか？」

「そのこの辺りは私でも詳しく分からないの。……まあ、アイツは気に入らないかしら。」

「……タルラか？頼むから変な気を起こすなよ。巻き込まれたく無い。やるとしても何処か遠くでやってくれ。」

正直言つて、Wとあのタルラがガチで戦うとか、周囲への被害が凄そうだな。

そんな事を言うと、アイツは口の端を釣り上げながら、羽織っている上着の胸ポケットに手を入れた。

「ふーん。じゃあ、貴方にも協力して貰いましょうかね？『黒い沈黙』さん。」

Wの手には黒い一對の手袋が握られていた。

……お前が持ってたのかよ。何で捨てて無かったんだ。

あまり良い思い出しや無いのに、懐かしいと思うのは  
何でだろうか？

はあ。今までに自分が中途半端にやり残したモノとか、嫌になって  
捨てたモノって言うのは、思わぬ形になって戻って来るんだよ。

今まで考えないようにして逃げ続けた結果がこれだ。俺の罪の象  
徴でもあり、俺の強さそのモノでもある、この手袋。

丁度今、過去の清算をする事になった俺、ローランだ。ホント、つ  
いてないよな……。

「なあW。俺はてつきり、お前が持つてるくらいなら売り飛ばしてる  
と思うんだけど、何で持つてるんだ？」

「私も色々試したのだけど、幾らやっても中身が取り出せなかった  
し、これじゃあ普通の手袋と変わらないからよ。それだったら、貴方  
に恩を売り付ける方が良いと思わない？」

「……相変わらずだな。」

「お互い様でしょ？寧ろ、貴方の方はもつと酷い事になってそうだけ  
ど。」

「どうだろうか？」

手袋。そう、一見何処にでもありそうな、黒い一對の手袋。かつて  
俺が常に着けていた物なんだ。

あの頃の俺は、今みたいに落ちぶれてこそいかなかったけど、中身の  
方はぐっちゃぐちゃだったっけ。それもWに指摘されるまで気付か  
なかったんだ。……荒れてたなあ。

はつきりと言うと、あの手袋には特別な仕掛けがあって、俺はそれ  
を使って『特色』にまで上り詰めたんだ。師匠には、感謝しておけば  
良かったな。もう遅いけど。

「で？貴方はこの手袋がいらないのかしら？大丈夫よ。あの時程辛い  
仕事になるとは思えないし、貴方もそれなりに過去とは決別出来る  
と思うのだけど。」

「……ちよつと待ってくれ。」



正直言つて、アレが無ければ俺はもう死んでいた。これだけは間違いない。

あの時ドジって手袋を失くしちゃって、唯一回収出来たのは『デユランダル』だけだったかな。それで俺のフィクサーとしての生活は一旦終了、後は底辺として適当に生きる、……だったんだけどな。

まさか見つけてたとは思わなかったぞ。W、お前一体俺に何をさせるつもりなんだよ……。

過去に自分を助けてくれたけど、それと同時に苦しめてきた物。そして、今それを突き付けられた。みんなだったらどうする？

俺はもう一度向き合わなきゃいけないんだ。俺の罪に。ちよつと前だったら即座に突き返せたんだけど、今はそう言つてられないんだ。

もうどうなつたつていい。生きていけばいい。そもそも、俺がこんな事になってるのは、全部近衛局の所為なんだ。何で俺だけ追放なんだよ。何で医療機関の紹介すらしてくれなかったんだよ。何で、何で……！

俺はもう決めたよ。今は過去がどうのこうのとか関係無いんだ。そんなの後から考えればいい。言つてしまえば先延ばし、かな。

鉍石病に感染している上に、レユニオン・ムーブメントに参加して、散々人を殺して、その前にも人を殺して、恨まれない筈が無いんだ。だったら、とことん恨まれた方が良いんじゃないかな？

どうせ俺は空っぽなんだ。それでみんなにも迷惑を掛けていたし、あの状況から抜け出せ無かった。今でも過去を引き摺っているのなら、きつと、俺はまだ空っぽなんだ。

そうなれば今、何が欲しい？

金？そんな物後から幾らでも稼げる。

地位？ただ邪魔臭いだけだな。

親友？俺みたいなヤツと友達になるとか、絶対まともじゃ無いだろ。じゃあ、何が欲しい？何が必要だ？どうせいつかは破滅する。なら必要なのは……。

力だ。無慈悲で、無遠慮で、何処までも俺に付いて来てくれる力な

んだ。力があるヤツはその分必要とされるし、他の物と比べて邪魔にならない。

今考えてみれば、感染者を徹底的に迫害してきた非感染者を殺し尽くす。なんだ。ちゃんと力を振るう目的もあるじゃないか。喜ぶヤツもいるんだ。だったら、それでいいんじゃないか？

人って言う生き物は、いつまで経っても変わらないのさ。俺はそうなんだ。

今、失った物を取り返すチャンスがある。これ以上は何も手に入れない、そんな時に舞い込んで来た物。……受け取らない理由は無いだろう？

「その手袋を渡してくれ。契約だ。俺は、お前の言う事に従うよ。」

Wの口の両端が釣り上がる。

「やっぱりそう来なくちゃね。ただ目の前の敵を殺す為に力を振るう、貴方らしいわよ、ローラン。」

Wが投げた手袋を片手で受け止めて、今着けている手袋と着け替える。程良く手に馴染むそれは、見慣れた黒い手袋だ。最初の頃はよく、依頼が終わったら意味も無く手元を見てたかな。

「いつもありがとう。結局いつまでも、俺はお前に助けられたな。」

「……貴方から感謝の言葉を贈られるのって、違和感しかないからやめて欲しいわね。」

「ツ、はいはい、お前はそう言うヤツだったよなあW！お前なあ！折角人が言っやってやっつてんだぞ！少しは素直に受け取ったらどうなんですかね？」

「え？別に素直に受け取ってるじゃない。これが普通よ。」

「……ホント、お前は変わって無いな。」

これ以上は何を言っても無駄だと判断した俺は、鞄に入れたデュランダルを手袋に『仕舞った』。

「最初からフィクサーじゃなくて、マジシャンにでもなった方が良かったんじゃない？」

「フィクサーになってから手に入れたんだよ……あー、今からあの時みたいなのスーツに着替えるから、ちよつと向こう向いててくれない

か?」

「……何でスーツを持つてるのよ。」

「追放された時に持って行ける服がこれしか無かったんだよ。」

「追放って……まあ、後で聞かせて貰おうかしら?」

そう言いながら向こう側を向いたWを尻目に、俺は素早くスーツに着替える。先にズボンを履き替えて靴を履き、上を脱いでからシャツの袖に腕を通して、ボタンを澱みなくはめていく。何百何千と繰り返ししてきたから、今更時間が掛かる事なんてのは無い。みんなにとつても当たり前の事だろう?」

ネクタイを締めてジャケットを羽織り、ボタンを一個だけはめれば完成だ。

「おう。待たせたな。」

「……ふーん。やっぱりそっちの方が似合ってるわね。でも、その格好でその仮面は間抜けに見えるけど。」

「……もしかしてさ、俺の仮面も持ってない?」

「粉々に砕けた仮面を拾い集めるとでも? いつそ外しなさいよ。」

「……それさ、マジで言ってる?」

「まさか、まくだ自分を隠さないと生きていけないのかしら。」

その瞬間、俺の視界は急に広がった。当然だ。Wに仮面を剥がされたんだ。俺の顔は、どうなってるんだ?

「あははっ、あの時と変わらない、酷い顔ね。いつまで背負ってるつもりなのよ。相手もちゃんと覚悟して挑んでいるんだし、貴方は殺しに快樂を見出す様なヤツでも無いでしょ?」

「それはそれ、これはこれだ。疲れてるんだよ……レユニオンに休みは無いのかよ?」

「……まあ、強がれるくらいは気力があるのなら問題は無いわね。」

俺は手袋をはめている右手首に手を当てて、とある武器をイメージしながら手を握り、そして引く。

手には一本の剣が握られていた。極東が兇祥とされる切れ味に優れた剣、所謂刀と言う武器だ。

その調子で他の武器の状態も確認する。どれも錆びたり壊れたり

している様子は無く、これなら何時でも使えそうだ。

「本当にその手袋どうなってるの？」

「俺の師匠の力だよ。死んだ、筈なんだけどな。何でまだ使えるんだろう……。」

「そう。じゃあ、貴方をタルラに紹介しに行くから付いて来て。勿論幹部にさせるわ。」

「え？オイ、待てよ。あのパトリオットも幹部なんだろう!?アイツの前に現れたら今度こそ殺されるって!」

「過去に命を奪い合った程度で殺そうとはしないわよ。随分と臆病になったのかしら?」

「そんな事言われても……パトリオットとやり合った事が無いから言えるんだぞそんな事。」

「来たか、W。……その男は誰だ？」

「ええ、ローランって言うの。私が雇ったんだし、コイツも幹部に出来ないかしら?」

「まだそいつの実力を知らないぞ。本当に腕が立つのか?」

「じゃあ、コイツが『黒い沈黙』だって言えば分かるかしら?」

「……生憎だが、知らないな。」

「やっぱりな。俺は徹底的に身バレにだけには気を付けてたし、傭兵ですら無さそうな少女が俺を知ってる訳無いか。」

「……多分、他の特色だったら名前ぐらいは知ってるんだらうけど、まあ、俺が好きでそうしてる訳だし……しようがないな。」

「……黒い、沈黙か。」

「アンタは……久しぶりだなパトリオット。調子はどうだ?若干ボロボロだけど、あまり変わって無さそうだな。」

「お前も、あまり、変わって無いな。あの時の、ままだ。」

「あー、もしかして喉をやられたのか?」

「ああ、鉱石病、にな。此処に、いるという事は、お前、もか。」

「アンタに比べればめちやくちや軽症だけだな。もしかしてだけど、あのリーベリもいるのか?」

「彼は、いない。それなりに、前に別れた。」

「……俺を、殺したりしないよな?」

「敵対する、意味が無い。同じ、感染者ならば、尚更だ。」

「おお、生きてられるぞ。にしても、以前より強くなってないか? 多分鉱石病が原因なんだろうけど、うわあ……想像したくも無いな。味方で本当に良かったよ……。」

「タルラ。彼は、黒い沈黙。あの、特色の、1人だ。有名では無いが、腕は確かだ。かつて、戦った事が、あるからな。」

「……なら、腕は十分の様だな。と言っても、いきなり幹部と同等の地位を与える訳にはいかない。この作戦が終わってからだ。」

「あー、マジでなっちゃうのかなあ? 俺以外全員強いし、正直言っただけ弱過ぎると思うんだけど。肩書きが重過ぎる……元々、黒い沈黙つてのもスカーモールが勝手に付けただけだし、特色にも成りたかった訳じゃ無かったんだけど……。」

「まあ、ほんのちっぽけでも期待されてるんだ。そこはフィクサーとして、特色として答えてやらないとな?」

「視線をウルサス帝国の方に向ける。アレがチエルノボーグだ。」

「……悪いけれど、俺の為に死んでくれ。」

## 特色フィクサー

見渡す限り街並みは破壊に溢れていて、少し前まで人が生活していたとは、とてもじゃ無いが思えない。

割れたショーウィンドウ。煙をあげる炎。時折響き渡る人生最後の絶叫。どれを取っても地獄としか言いようがない。

それでも、そこに生物は存在する。白装束に仮面を着けて、今まさに他の生物を殺す為に彷徨っているが。

恐怖に顔を引き攣らせた死体。散らばる色んな形の人体の部位。赤く染まったテディベア。その近くには小さな肉塊が転がっている。

レユニオン・ムーブメントに襲撃を受けたチエルノボーグは、人々の傲慢さと憎悪が混ざって完成した芸術品と言っても過言では無い。これを見れば、まともな感性を持ち合わせた人なら、それに込められたメッセージを読み取る事が出来るだろう。

そんなチエルノボーグの中にも、レユニオン以外でまだ生き足掻いている者はいる。もつとも、その者達は日に日に数を減らしているが。理由としては、たった一つのビスケツトを求め、例えそれを手に入れたとしても、損害の方が多い殺し合いをしているとか。

少女が別の少女に馬乗りになり、顔面を殴打し続けている。殴られている少女は抵抗しない。もはや原型を留めていない脳は、体に指示を出せないのだから。そして殴っていた少女も、次第に動きが止まり始め、自らの手で殺害した妹の名を呟き始める。テラでは平凡でありがちな悲劇だ。

しかし、チエルノボーグの中を走り抜ける一団があった。他の者達に比べれば足取りは素早く、自分達が目的を達成する為に走っている事を忘れていない。

記憶喪失になってしまったドクターを救出したロドス・アイランドのオペレーター達は、途中で発見したウルサスの少女達を保護しながら進んでいた。この地獄から脱出する為に。

メフィストと名乗る少年と、謎の狙撃手による襲撃に反撃し、ドクターは此処は戦場であると実感する。

レユニオンの襲撃により、既に崩壊寸前だったチエルノボーグを天災が襲う。彼らは建物の瓦礫に身を預け、追いつきの様な天災をやり過ごす。

道中でタルラと呼ばれる、レユニオン・ムーブメントの指導者に会い、少なくとも犠牲を払ってどうかこれに乗越えて、今現在、恐らくレユニオンの幹部の一人と思われるサルカズの女性に攻撃を受けていた。

爆発物を扱うそのサルカズは、卓越した技術による爆破と、自身の指揮によつて動かすレユニオンの兵士でロドスの一団を確実に追いつめていった。途中で射撃オペレーターのアドナキエルが反撃を試みるも、爆風に巻き込まれ重傷を負ってしまう。

もう少しでこの悪夢の様な移動都市から脱出できると言うのに、あと僅かだと言うのに、そこまでの道はとてつもなく長いと感じられた。

そして、遂にロドスの一団は追い込まれてしまう。目の前の敵を突破せざるを得ない状況に陥つたのだ。

サルカズの女性は自身の事をWと名乗った。どうやら傭兵らしい。更に、先程救出したばかりのドクターの身柄を要求してくる始末。源石爆弾のピンに指を通し、不敵に微笑むW。身構える兵士達。

ドクターと呼ばれている彼も覚悟を決めたようだ。目が覚めてからの少ない経験を頼りにし、戦術を組み立てていたその時、戦場には似合わない、何処か気が抜けた様な声があった。

「なあW。これって俺も手伝った方が良いのか？」

思わず声のした方向を向いてしまう。ドクターはおろか、オペレーター達やWまでが顔の向きを変えた。

内装が剥き出しになっているビルの二階、崩れて無くなっている床の縁に一人の男が足をぶら下げて座っていた。

あまり見る事の無い黒髪黒眼、黒い革靴に黒いスーツを着ていて、手には黒い手袋をはめている。右手には黒い鞘に収まった長剣を持っており、左の二の腕に、まるでDNAの様なシンボルが入った腕章を着けている事から、彼がレユニオンに所属しているのだと分か

る。

突如現れた黒尽くめの男。Wの様に兵士とは明らかに違った服装をしていたり、Wを呼び捨てで呼んでいるところからWと同じ地位である可能性が高い。

つまり、それは彼もレユニオンの幹部と言う事だ。まあ、実際には幹部に相応しいか試験中なのだが。

レユニオンは実力主義である。だから、あまり信頼されない傭兵であるWも幹部なのだ。となると、彼もWに匹敵する、もしくはそれを上回る実力を持っている事になる。

それならばここでより警戒を強めるのが普通だが、優秀なオペレーターであるドーベルマンやニアールでさえ、それをするのに遅れてしまった。勿論理由はある。

感じられないのだ。強者であれば持っている筈のモノを。人に聞けば、聞いた人の数だけ答えが返ってくるだろう。視線だとか、立ち振る舞いだとか、オーラだとか。

それらが一切と言う訳では無いが、少なくともWやタルラ、メフィストから感じていたモノは感じられない。

敵の目の前で座り込んでいたり、わざわざ声を掛けたりと無防備にも程があるが、不思議と隙は無かった。でも、ただそれだけ。脅威には値しないと脳は評価を下してしまう。

「別に見てるだけでも良いけど、少しは肩慣らしとして戦ってみたら？」

「……それもそうだな。でも、あの騎士とか強そうだな？あー、声出さない方が良かったかも。」

別に隠している訳でも無いが、当然の様にニアールを騎士だと見破った男は、ビルから飛び降りて着地し、Wの側まで歩み寄った。

ロドスの一団は男と向かい合う。彼はリラックスしている様子で、目付きが良いのか悪いのか、何とも言えない様な視線を向けていた。そして暫く考えている様な様子を見せた後、横に居るWに話しかけた。

「まあ、やれるだけやってみるよ。あ、俺を爆発に巻き込むなよ。手足



が吹き飛ぶとか御免だからな。」

「それはアンタの腕の鈍り様によるわね。ボサツとしてるとあの世行きよ？」

「うへえ……。」

彼は顔を若干顰めると、姿勢を正して此方を見据えた。どうやら左利きらしく、柄に左手を掛けている。戦う気になったらしい。

正直なところ、この男が一体どれほどの実力を持ち合わせているのか。それはこの場に居る者だとWにしか分からなかった。

ローランはなりすます事が上手かった。一般人や様々な職業の人になりすませば、それだけターゲットに近付きやすく、気付かれにくい。素人や弱者になりすませば、敵や同業者とお互いを認識した状態で戦いになった時、自身の実力を悟られにくい。ローランがフィクサーとして活動していた時、極めて重要視していた技術だ。実際、この技術は彼の命を何度か救っている。

故に、彼は今もなりすましている。コピー元は先程見かけた、レユニオンの少しだけ腕が立つ兵士だ。そして、ロドスのオペレーター達は見事に騙された。

剣を抜き、走り出す。あまりにも無謀な突撃に見えるそれは、流石にニアールなどの一部の優秀なオペレーター達は警戒した。だが、それだけである。

狙撃オペレーターがクロスボウを構え、走ってくる男に照準を合わせた時、男の姿は何処にも無かった。

驚愕に目を見開くロドスのオペレーター達。それはレユニオンの兵士達も同じ様だ。重装オペレーター達がドクターや医療オペレーターなどの非戦闘員を守る様に囲み、周囲を警戒する。Wだけは嬉しそうに口元を歪めていた。

先鋒オペレーターであるフェンは槍を構え、突如として現れ、また突如として消えた男を探していた。しかし、何処を見渡しても見つからない。ふと、頬に液体が掛かった。

最初は雨が降ってきたのだと思った。しかし、雨にしては妙に温かく、肌触りも変だ。やけに鉄臭い。そして、何かが動いている気配が

したので、そちらに視線を向ける。

地面に倒れ込む二人の先鋒オペレーター。両方とも、首筋を押さえ  
て蹲っている。

目の前には赤い噴水。その向こうに見え隠れする、長剣を振り抜い  
た体勢の男。

背中に氷柱を突っ込まれた様な感覚に襲われたフェンは、直ぐに防  
御姿勢を取った。瞬間、とてつもない力で叩き付けられる。

そして前蹴りを繰り出した男、ローランはまだ何が起きているのか  
よく分かっていないと言った様子の、ロドスのオペレーター数人に対  
して素早く剣を振り回して無力化する。

ようやく奇襲に気付いた前衛オペレーターの攻撃を軽く避け、ロー  
ランは最も危険と判断したニアールに急接近し、切り掛かる。

斜め左下からの切り上げを盾で防ぎ、ニアールは男の頭部目掛けて  
メイスを振り下ろすが、男、ローランは最低限の動きでこれを躲し、今  
度は上から長剣を振り下ろす。

ニアールはこれをメイスで防ぎ、シールドバツシュを仕掛けるが、  
逆にその衝撃を利用して大きく距離を取られてしまう。

ローランはWの元まで飛び下がり、一息吐いた。次の瞬間、斬られ  
た事による苦痛の声と、死体となったオペレーターに対する悲鳴が、  
一時停止を解除したビデオの様に途中から聞こえ始める。

「何人が持っていていけたけど、まだまだ残ってるし、何より強いヤツは本  
当に強いな……。」

「じゃあここからは私がやるから、アンタは見てていいわよ。」

「いやせめてさ、普通最後までやらせるところだろそれは！」

ドクターは理解した。あの男はさつきまで皮を被っていたんだ。

あの男が、この中で一番強い。そして、壊れている。

幹部って言っても、何すれば良いのかな？

実際に経験してみれば分かると思うけど、戦いでひやつとする様な攻撃を躲すと、アドレナリンが滅茶苦茶出て気分が良くなるんだよ。……まあ、エンケファリンみたいな物さ。

目の前で繰り広げられる、悪友の蹂躞劇を眺めている俺、ローランだ。お、今のは結構な爆発だったな？

相手の何人かを戦闘不能に出来たのは良かったんだけど、あの騎士……ニアールって呼ばれてたっけ？ソイツだけは持つていけなかったな。やっぱり鈍ってるよなあ……。

これも、三年以上ぬるま湯に浸かってたツケだな。もし師匠がいたら半殺しにされてるよ。

イメージ通りに体が動いてくれないし、気配の察知も難しくなっているな。うわ、改めて見ると致命的じゃないか。

そんな訳で、ここはWに任せっきりになっちゃったんだ。今の俺がとてもしゃ無いけど、あの戦いに混ざれるとは思えないし、全員俺の事を警戒しちやってるからなあ。……でも、俺があの中二病チックな名前で呼ばれていた事は知らなさそうだ。自分で隠してたつてもあるけど、他のヤツらに対して知名度が低過ぎないか？ちよつとへこむぞ……。

最後に見た時よりも、Wは強くなっていた。以前よりも多くの爆弾を使いこなし、弱点であった接近戦も改善され、戦闘中に挑発を入れる余裕も忘れていない。正直なところ、今の俺だったら勝てそうに無いかなあ。アイツの言う事に従うのは癪だけど、あまり反抗しない方が良さそうだ。

そんな事を考えていると、Wが攻撃を止めて、完全に戦闘態勢を解いていた。

変だな。アイツは敵を簡単に逃す様なヤツじゃないし……ああ、ロドス・アイランドって言ったっけ？あのドクターとか言うヤツ、どつかで見た気がするな？そう言えば、俺がWと別れたのもアイツがバベルって組織に行ったからだったな。……え、マジかよ。

思考を巡らせている内に、結構深いところまで辿り着いてしまったようだ。そして、持っていた無線機から通信が入った。

「ローランド。」

『私だ。……どうやら、私の指示やWの援護も出来たようだ。流石は特色と言ったところか。』

「お、じゃあ俺も幹部の仲間入りですかね。後、Wがロドスを逃そうとしているのですが、良いのですか?」

『……Wが勝手に逃がそうとしていたのは知らないが、ロドスは逃がしている。これは私の命令だ。』

「了解です。……ふう、敬語って疲れるなあ。」

昔だったらタメ口で話せたかもしれないが、今はあまり信用されていない、且つ昔よりも弱くなっている、あまり強く出られない。タルラのアーツは脅威的だし、挑んだところで溶かされるに決まっている。強いヤツは本当に理不尽だ。有り得ない速度で侵攻してきて、全てを破壊していく。俺みたいな凡人の、その延長線上にいるヤツに太刀打ち出来る相手じゃない。

「その話し方止めてくれるかしら? 気色悪いわよ。」

「うわっ。って、いつの間になんだよ。……あくまで俺はフィクサーであって、それに昔ほど強くないんだ。幹部に成れたとしても、俺が一番下だし。」

「言っておくけど、そんな敬語で話す奴なんて、幹部の中ではスカルシュレットくらいよ? ま、安心しなさいな。あなたの雇い主は私だから、あの龍女に好き勝手させないわよ。」

「そんな事言っても、お前勝てるのかよ?」

「……分からないわ。けれど、その時は勿論、あなたにも頑張って貰うから、今の内に昔の勘を取り戻しておいて。」

「……憂鬱だな。」

どうやら、Wはあのタルラに対して、相当な恨みがあるらしい。そして、俺は良い感じにWの手駒に引き込まれたって訳だな。……なんつーハマしてるんだろう。また情報収集も再開した方が良さそうだな?

この作戦が終わったら、まず最初にパソコンを買いに行こう。Wにも理由として十分に通じる筈だ。ロドスの事も調べておこう。損は無い筈だろうしな？

チエルノボーグから撤退した後の、貰える報酬を何に使うか考えていると、Wにさっさと集合するわよと言われてしまった。うーん、自己紹介とか、またしなくちゃいけないのかな？

「腕は鈍っていても、黒い沈黙さまさまね。ウルサス帝国軍の小隊相手に一人で立ち回って、壊滅。目撃者はこの私だけ。やっぱりあなた化け物よ。」

「だから違うって言ってるだろ？今の俺は、お前よりも弱いかもしれないんだ。」

「実際に戦ったらあなたが勝つに決まってるわよ。て言うか、特色基準で強弱を測らないでくれるかしら？色を貰ってるだけで十分強いだよ。」

そんな事を言われても、全然自信は湧いて来ない。あの赤い霧の戦闘を見たら、誰だつてそう思うさ。他の特色だつて滅茶苦茶だ。サルカズの傭兵も恐ろしい。戦うのなら、こうしてビクビクしてるくらいが一番なんだ。昔の俺だつて、内心怖かつたんだぜ？自分は何をしているのか、いつ死ぬのか、よく考えたものだ。

少し前まで人が住んでいたとは思えない、破壊された都市をWと歩く。転がってる死体なんて気にも留めない。殺した分だけ積み上がって、笑ってる。早くお前も、仲間になれよと囁いてくる。別に何も感じないけど、あまり見たくは無いし考えたく無い。さっさと自然に還ってくれ。

暫く歩いていると、レユニオンの部隊員が大勢集まった場所に出て、更に進めば、そこには幹部が勢揃いしている。俺の元上司でもあり、尊敬すべき先輩でもあるスカルシュレッダーもいる。……俺もウルサス人だったらなあ。

そしてタルラがやって来て、報告が始まる。途中白髪の子供、メフィストがパトリオットに咎められていた事を除けば、随分とスムーズに進んだし、俺も幹部として認められた。スカルシュレッダーは意

外そうにしてたつけ。まあ、ちよつと前まで自分が引き連れていた弱  
そうなヤツが、幹部になつていたらそう思うよな。実際Wがいなかつ  
たらこうはならなかつたし、俺もそう思うかな。

因みに、俺は部隊を持つていない。本来幹部になつたら、必ずと  
言つて良いぐらい部隊を持つんだけど、俺は一人の方が動きやすい  
し、Wに雇われの身なので、実質Wの部隊に加わっていると云つても  
過言では無い。過労死するぐらい利用されそうだ……。

それと、スカルシユレツダーが自身の姉に会う為に龍門に行くらし  
い。Wも興味を持ったようだ。……積極的に関わつて行くとは思わ  
ないけど、あまり行きたくないかな。近衛局に出くわして、冷めた目  
で見られたく無いしな。

Wにパソコンを買いたいと相談すると、何故かWも一緒に来ると言  
い出した。そこら辺の適当な場所で買うつもりだったんだけど、何で  
こうなるかなあ？折角の報酬が……傭兵を雇い主に持つと、碌な目に  
遭わないみたいだ。みんなも気を付けろよ？

## 閑話休題 シエスタに來たローラン君

何処までも広がる青い空。ギラギラとアホみたいな熱量を発し続ける太陽。そして……海って言うよりは湖だけど、まあ透き通る海。テラで一番のリゾートと言っても過言ではないシエスタ。そんな所に、いつもの真っ黒なスーツで來た事を後悔している俺、ローランだ。

だからと言って、そこら辺の店で半袖半ズボンを買うつてのは、あまり乗り気じゃないんだ。さっき買ったサングラスで我慢すると思いますかね……どうかなあ？似合つてそう？

こんなカンカン照りの中で、一人だけ真っ黒のスーツ、そして黒いサングラスまで掛けていれば、これがまあ目立つんだ。別に俺はお偉いさんのボディガードとかじゃないんだけどな。過去に似たような事はやったけど、かと言って、今俺の隣に居るコイツを守るとか……無いな。

俺が視線を集めている理由はざつと二つある。一つは俺がボディガードみたいな格好してるからだな。で、もう一つが……俺の隣に居るヤツが、世間一般的な人から見れば美人だから……らしい。

ええ、まあ確かに……ガワだけは良い、のか？正直コイツの性格を知っている身としては、とてもそうとは思えないんだけど。

Wだ。俺は今Wと一緒にシエスタを歩いている。事の発端は二日前だな。

無事にタルラからW経由で渡された報酬を手に入れた俺は、久しぶりに情報収集を再開しようと思ったんだ。その為にもまずはパソコンが欲しい。携帯だと持ち運びは便利だけど、パソコンには劣るし、天災の事もあって携帯系のネットワークはあまり安定しないんだ。だからパソコンの方を使つてるヤツが多いし、その分情報収集をしやすいつてわけさ。ノウハウは知ってるし、あとはパソコン本体と適当な回線があればバッチシだ。だからそれらを調達する為に、Wにちよつと行つてくると言つたんだけど……お察しの通りだよ。

まさかのWと一緒に來たいとか言い始めたんだよなあ。その所為

でせっかくのプライベートタイムが潰れたし、そこら辺の適当な場所で買うつもりだったのに、Wに脅き……説得されてシエスタまで来る事になったんだ。俺の報酬が……。

で、助手席にWを乗つけた車を俺が運転して、シエスタまでやって来たんだ。雇い主の事が心配だが、W曰く「あの龍女にはちやんと言つてある」との事。なんか不安だ。こう、いまいち信用出来ない。今はシエスタで一番大きいショッピングモールに向かつてるんだけど、思えばこうして人目の付く場所を、それも誰かと一緒に堂々と歩くだなんて。何年ぶり……そもそもあつたっけな？

ヤシの木が生える海岸？沿いの道を歩く。木陰で日光を防げるし、時折り吹き抜ける風が気持ちいい。ビーチではしゃぐヤツラを見て、随分と楽しそうだなと感想を抱く。

昼前だったので、二人で適当な店を選んで腹を満たす。シエスタは感染者に対して、比較的寛容だからこそ出来る事だ。あくまで比較的、だけだね。

それからまた暫く歩いて、ようやくショッピングモールに到着だ。デカイ火山がバックにあるから良く映えるな。全部で四階建てで、だいぶ広い。中に入れば冷気が俺達を歓迎してくれる。くくつ、案外素晴らしいじゃないか？

「あら？年甲斐も無くはしゃいでるみたいね。やっぱり初めてだと感じるモノがあるのかしら。」

「そう言うお前は初めてじゃないんだっけ。俺としては、その事について驚きを隠せないかな。あー、一旦解散で良いよな？」

「別に構わないわ。ま、精々楽しみなさい。」

そう言うWは此方に背を向け、ゆっくりと消えていった。じゃ、こつちも行動開始だ。早いところ電化製品を売っている所を見つけてますかね。モール内の地図は何処にあつたかな？

かなり良い性能のノートパソコン3台、その他諸々の必要な機器を買い揃えた俺は、吹き抜けになっているモール中央の三階のベンチに



座っていた。Wと決めた集合場所だ。直ぐ近くのカフェで買ったコーヒーを啜っていると、やっとWがその姿を見せた。右手に先程のカフェのモノらしきカップを、左手には紙袋を提げている。

「ちよつと待たせちやったかしら?」

「そうだな。大体10分と言ったところか。」

「そこは全然って返すところですよ。まったく、レディの扱いがなっていないわね。」

「ええ?お前女だったのかよ?」

隣に座って来たWに頭を殴られる。けど、此処で反論したら負けな気がして、クールに受け流す事にする。

Wと二人で飲み物を飲んでみると、ふと、一階のところに気になるヤツがいた。身なりからして、バカンスに来た貴族か、はたまたこのシエスタのお偉いさんの娘か……。

「おいW、あの子を見てみろよ。結構良い身なりだけど、お前誰だか知ってるか?」

「ん、何々……ああ、あいつ?確かこの市の市長さんの娘だったかしら。なんかのパンフレットで見た気がしなくもないわね。」

「そっか……。」

なるほど、市長の娘さんか。だったら近くにボデイガードでも……お、いたいた。にしても女か、それもフェリーの。見た感じだと、武器はかなり大きそうだな。それこそバカでかいクロスボウってところか?

……あゝあゝッ!?バカでかいクロスボウを持ったフェリーの女あ!?

「おい逃げるぞW、アイツはヤバいんだよ……!」

「ねえ、ちよつと何よ。あの女がどうかしたって言うの?」

「アホみたいに強い狙撃手だ!過去に俺が雇われた部隊で敵として出会してな、俺以外全員死んだし、俺もアイツを仕留め損なったんだよ!」

「……あの黒い沈黙から生還したってこと?それだったらヤバいわね。」

そんな訳で尻尾巻いて逃げ出したんだ。はあ、たまったもんじやないよな。シヨツピングモールでかつての強敵に出会すとか……ついでないなあ。

「まだ帰る時間まで結構あるけど、どうしたものかしら。試しに泳いでみる?」

「お互い傷だらけの肌晒したところで虚しいだけだと思うぞ。」

「はあ、つれないわね。あとayingっておくけど、私はあなた程傷だらけじゃ無い自信があるわよ?」

「へーへー、そりや何よりで……あーあ、今更だけど、金にもまだ余裕があつたし、本当に久しぶりに手入れ用品でも買っておきたかつたかな。」

「武器の手入れってこと?」

「うん?……まあ、お前ならいいか。武器じゃなくて毛並みの手入れだよ。」

「……は?アンタ今毛並みって言った!」

「そ、そうだけど?……ほら。」

今までずつと伏せておいて、髪に擬態させておいた耳を立てる。ぴよこんという擬音が合いそうだ。

「その耳……ローラン、あなたループスだったのね。じゃあ尻尾は?」  
「ズボンの中に仕舞つてあるぞ。出来れば素顔と一緒に種族まで隠したかつたしな。お前とはなんだかんだで長い付き合いだし、別にいいかなと。」

「……そう。」

## ささやかな報復

移動都市龍門、その中に存在する数多のビル群。それらの屋上はビルによって様々だが、一つだけ他とは少し変わっているビルがあった。

ビル内の部屋の殆どが使われておらず、精々が龍門で幅を利かせていたマフィアのマジト……それすらも何者かに壊滅させられ、ビル内はまさしく無人の廃墟と化している。しかし、屋上だけは別だった。

屋上に出て直ぐ側には室外機、その近くにタープが建てられていた。まだ日が登っている中、二人組の男女が日を避けながら何かしらの作業をしていた。

地面に座り込んだ全身黒尽くめの男は、持参した機械類に接続したノートパソコンのキーボードを素早く叩き、時々悩みながら手を動かす速度を緩めている。

そしてそれを見つめるサルカズの女性は、手に配線が繋がれたアンテナを掲げている。時々ペットボトルの水を飲んで、男を急かすような言葉を吐いていた。

この見るからに怪しげな二人組の男女、ローランとWは、現在絶賛不法侵入中だった。勿論この廃ビルに入り込んでいる事もそうだが、龍門の正式なゲートすらも通過しておらず、当たり前のように都市の外壁から、内部の複雑な通路を潜って入って来ていた。その最中に近衛局に見つかれば、しよつ引かれる事間違いないのである。Wの方は兎も角、ローランは龍門を追放された身であるからだ。

その二人がこんなところで何をしているのかと言うと、ローランは現在、近衛局のとある機動部隊の無線を傍受しようと四苦八苦しており、Wはその手伝いをしていた。バレたら牢にぶち込まれる事間違いない無しである。

何故そんな事をしているのかと言うと、ローランとWは龍門でとある作戦を遂行する為にここに潜伏しており、ローランは敵となる近衛局の情報を手に入れようとしていたのだ。もつとも、最初にやれと言ったのはWであり、ローランはその無茶振りに応えているのであつ

た。

「ねえ、近衛局の無線の傍受はまだ出来ないの？そろそろ腕が疲れてきたんだけど。」

「……あのさ。お前俺に相当無茶振りさせてる自覚ある？まあ、無線機の実物が無い事は許そう。しかしなあ、前情報どころか手掛かりも無しじゃねえかよ！前買ったコンピューター一式持って付いて来いって言うから来たんだけど、せめて自分で前もって調べるか、この作戦が始まる前に教えてくれよ……。」

「あらあ？てつきり情報戦に強い黒い沈黙さんなら一瞬で出来ると思ってたの。まさかそっち方面の腕も鈍ってるんじゃないでしょうね？」

「コツチは鈍ってないよ。はあ、全く分からない無線の回線を見つけ出すのがどれぐらい難しいのか知ってるか？むしろあともう少しのところまで来ている俺を褒めて欲しいね。」

「……ホント、イカれた速さの情報収集ね。それだけで特色になったって言われても納得出来るわ。」

「そんな事言っても上には上が……あ、おい。アンテナ揺らすなよ。ノイズが混じっちゃうじゃないか。」

「はいはい。今治すわね。」

やる事が無く、アンテナで遊び始めたWに注意をし、ローランは液晶画面に目を走らせる。少しのズレがあると傍受出来なくなる無線。その回線を見つけ出して周波数を探し出し、チャンネルに入る為のパスワードを丁寧に入力していく。情報戦に強いのが売りの特色なので、相手側にバレる事無く無線の傍受に成功する。

「あー疲れた……。ほら、繋がたぜW。」

「ふーん、流石ね。……なに休もうとしてんのよ。アナタも聞くのよ。」

エナジードリンクの缶のプルタブを起こし、そこにストローを刺すローランを引き寄せ、二人でスピーカーに耳を傾ける。途中、ローランがエナジードリンクをストローで吸う音が五月蠅く、Wが拳骨を叩き込むというアクシデントが発生したが、近衛局がどのような作戦を

立っているのか。その殆どを把握出来た。

「動くのはまだ先みたいだし、今は昼前か……なあW。ハムハムパンパンに行ってサンドイッチを買って来てくれないか？13区の3番通りにあるんだ。俺はここで無線を聞いてるし、お前も腹が減っただろ？余った金で好きな物買つてもいいぞ。」

「私はそんなので喜ぶ子供じゃないわよ。それに行くならアナタが……あ、追放されたんだったわね。まあいいわ、行つてあげる。」

仕方無いと言つた様子のWを見送り、ローラン個人としては好きな、科学的な甘さの液体をストローで口に送る。

警官などに「傭兵やつてます」と言つて捕まる事はまずないし、都市には都市のルールがあるので、基本的に傭兵が都市に入つても何か不自由な事が特別多いなんて事は無い。しかしその都市の市民や重役、貴族などを殺している場合は別なので、ごく一部の傭兵とフィクサーは正式な方法で都市に入らない。傭兵よりもハイリスクハイリターンな依頼を受ける、それがフィクサーなのだ。

持つて来ていた工房のカタログを読みながら無線を聞いていると、Wが頼んでいたハムハムパンパンの紙袋を手提げながら帰つてきた。

「で、何か新しい情報は出てきたの？」

Wがサンドイッチを齧りながらローランに問い掛ける。食べているのは定番だが、だからこそ美味しいプレーン味だ。

「うん？ああ……どうやら、スカルシュレッダーは随分と苦勞する事になりそうだな。まず敵として近衛局。ここに関しては隊長格にさえ気を付けていれればいいかな。多分チェンと大盾持ったオニの女……ホシグマだっけ？コイツらは出て来る筈だから注意が必要だな。」

「次にロドス・アイランド。チエルノボーグで戦つた例の組織だな。アレって表向きには製薬会社だけど、保有してる戦闘力が半端じゃ無

いんだよな。前にあそこの公開求人調べたけど、一般の事務員に紛れて傭兵だったりライン生命の社員だったりストリートギャングだったり……とんでもねえ私兵部隊だな。民間軍事組織の間違いじゃないのかな？」

「さらにこの作戦において、ロドスはBSWの連中を何人が雇ったらしいな。分かるのは派遣されたって事だけで、流石に人数とかまでは分からない。ま、そこそこ警戒しておいた方がいいかな。レユニオンの一般兵士には強敵だろうし。」

口に含まだサンドイッチを咀嚼し終えたローランが言う。食べているのは何回も通わないとその味の良さが分からない、知る人ぞ知る特性ミートソース味だ。提案者は料理が趣味のピエールという人らしい。

「BSWとは何回かやり合ったけど、普通より少し強い程度かしらね。」

「この作戦で敵対する相手はこれぐらい！だったらよかつただけだな……ロドスが急遽ペンギン急便を雇ったんだ。」

「それって確か物流会社よね。という事はトランスポーターが雇われた筈だから、案内役かしら？」

「いや違うね。案内役兼護衛だ。龍門で起こる騒ぎの大半に関わってるヤバいところだし、所属しているヤツらもそこそこ強い。まあ、当たるとは思わないけど、サンクタの少女は銃を躊躇なく正確に乱射してくるから気を付けろ。……まあ、ざっとこんなものかな。」

サンドイッチを食べ終わったローランは、両手を後頭部で組んで室外機に凭れ掛かる。彼らが現在居る場所は、四方を室外機や建材で囲まれた人目に付かない場所だ。ビルの屋上の、それもほぼ真ん中の位置なので見つかる事はまず無いだろう。

「そう。確かにあの子には厳しいわね。私達の目的はあの子がくじった時のバックアップだから、あんまり関係無いけど。」

「同じ幹部、それも子供相手に冷たいやつだな。」

「それアナタが言える事かしら？一度しか身バレした事がない特色さん。」

「それはそれで、これはこれだ。……あ、タルラには俺が連絡しておいたから、お前はスカルシュレッダーに連絡しておけよ。」

自身の装備品の中から無線機を引っ張り出すWを見て、ローランは今さっきWに言われたことを考える。確かに殺したと言えれば殺したが、大半のヤツらはいつ死んでもおかしくない裏の業界に入ったヤツらだった。そうじゃなくても運が悪かったな、ドンマイとしか言えないし、知ってしまった、見てしまったものは仕方が無い。時間があれば少々荒っぽく記憶処理を施すだけだが、なければないで一瞬で……処理する。

故に、老若男女なんて関係無い。死は平等だ。しかし、ものすごい気まぐれなだけである。悪いとは思うし罪の意識はこびり付いて離れないが、自分が生きる為だと割り切る事になっている。死ぬのが嫌なら強くなればいい。師匠がいつか言っていた言葉だ。

何処か遠い目で虚空を見つめていると、Wからボーっとしないと言われるってしまった。意識を取り戻して大きく伸びをする。俺達の出番はまだ先だが、だからと言って思考停止していい訳じゃない。コンデイションを整える事も、フィクサーとして大事な要素なのだ。

遂に作戦を実行する時間になった。Wが言っていた様に、スカルシュレッダーはターゲットの少女、自身の姉であるミーシャをロドスに取られてしまったらしい。ロドスがターゲットを近衛局に引き渡す際に襲撃すると決めてはあるが、どっちが最初に攻撃を仕掛けるかで揉める事になった。

「お前の武器は爆発物だ。だったらお前が最初に仕掛けて爆破、混乱している隙に俺がターゲットを回収すればいいだろ。」

「もしかしたらターゲットを巻き込んだりやうかもねえ？ だったらアナタのアーツで素早くターゲットを回収、追跡を阻止する為に私が遅れて爆破するわ。」

「俺は追放されたから、本来いない筈の人間なんだよ。今更アイツら

と顔合わせるのも気不味いし、色々動き難くなるかもしれないだろ。」

「レユニオンに参加した時点でもう手遅れよ。私だって今回の作戦で存在が把握されて、龍門にはもう来れなくなるのよ。」

ローランは最初、仮面を着けようとしていたが、Wにまだ過去のしがらみに囚われているのかと言われてしまい、渋々仮面を仕舞っていた。

この場に第三者が存在するのなら、それぐらい事前に決めておけどツツコミを入れるだろう。二人が腐れ縁なのが災いしたようだ。

しかし、かつて一緒に戦った身なので、解決方法は二人とも同じ事を考えていた。

「ふふふ、これは公平に決める必要があるなあ？」

「ええ、そうね。アナタが悔しがる姿を見てあげる。フツ……。」

「うん、ジャンケンするぞ。(するわよ)」

なんだかんだで仲が良いのである。普通ならローランもたかが傭兵一人に雇われないし、Wも男と二人きりで長時間廃ビルの屋上に待機していない。因みにジャンケンではローランがグー、Wがパーでローランの負けである。ローランは大袈裟に落ち込みWは高笑いする。

最後に二人で武器の状態を確認し、ついでに天気予報にも目を通しておく。どうやら、これから少しだけ雨が降るらしい。ローランとWは顔を見合わせた。

さっさと終わらせよう。例え傭兵、例えフィクサーでも出来れば濡れたくないのだ。

路地裏を駆け抜けて、錆びついた階段を駆け上がり、パイプが張り巡らされた壁を駆け登り、目的のビルの屋上に到着する。ここからは隠密行動なので、先頭を走っていたローランに倣いWも気配を消す。ローランに関しては完璧な気配の消し方で、背後にいたWも少しだけ驚いていた。

決して気付かれないようにビルの縁から顔を出して、下で行われて



いる近衛局とロドスの受け渡しを観察する。ロドスはスカルシュレッダー率いる、レユニオン突撃部隊の猛攻をなんとか凌いでいたようだ。着ている服の所々に汚れが見えるが、目立つ傷を負っている様には見えない。

Wと視線でやり取りする。ロドスがターゲットの引き渡しを完了し、スカルシュレッダーの追跡を再会した時がチャンスだ。失敗しても命は落とさないが、面倒くさい事になるのは避けられないのでWも真面目だ。もつとも、ローランは失敗した時の逃走経路を四通りほど考えていた。これをWが知ったら、幾ら何でもビビり過ぎと揶揄うだろう。

ざっと敵の人数、強弱を確認し、相手にする敵とそうじゃない敵に目星をつけ、自身と相手の動きを脳内で素早くシミュレーションし終え、ローランは最後の準備に取り掛かる。

手袋をはめた右手の手首の辺りに魔法陣の様な円が出現し、その中に戸惑う事無く手を入れる。そしてゆっくりと手を引き抜くと、その手にはさつきまで存在しなかった一本のナイフが握られていた。グリップから刃までローランに合う様に作られた、工房の特注品だ。ローランのアーツに呼応し、薄い銀色と黒色の光を纏っている。

Wはその過程を若干前のめりになるぐらいに見つめていた。過去に見せて貰った事はあるが、それでも興味深いモノは興味深いのだ。

ローランはナイフを軽く握り、そして手を開いた。次の瞬間には、黒い手袋は銀の綺麗な装飾が施された手甲に変化しており、左右のそれぞれ指の先端が長く、鋭く伸びていく。伸び切った頃には、ローランの両手には見事な鉤爪がはめられていた。

『狼牙工房』製のナイフと鉤爪。両方とも切れ味と取り扱いの良さに優れ、リーチが短い代わりに狭い場所での戦闘に特化している。迅速な暗殺には欠かせない武器だ。特に鉤爪に至っては、ローランはループスな為、非常に扱いが得意な武器でもある。人数がそれなりに多く、場所も狭いので、いつもの長剣『デュランダル』の代わりに装備することにした。

それらの武器を装備したローランは中々様になっており、今が夜で

満月でも登っていけば、直ぐにでも遠吠えしそうだ。Wは無意識にそんな場面を想像してしまったが、不思議と笑える事はなかった。

いつの間にか、ローランが再び下の様子を観察していたので、Wも気を取り直して下を覗き込む。丁度今ターゲットが近衛局に引き渡されたようだ。コータスの少女がターゲットに何か一、二言話し、そして離れて行く。

ロドスの一行がスカルシユレットダーを追跡する為に離れていき、それを見送ったチェンも無線機を手に取り何かを喋る。ここでローランとWはまた顔を合わせた。ローランはナイフを逆手に持ち、Wは源石爆弾のピンのリングに指を通した。

ロドスの一行が大分離れ、近衛局も連絡を終えて動き出そうとしたその時、場に沈黙が訪れた。

ローランはビルの縁から飛び出して落下していき、なんの苦もなく着地しながら鉤爪とナイフを振るう。銀と黒の光を纏ったそれらは、近衛局の兵士の装備を容易く引き裂き、首元にダメージを与える。

着地の硬直はせずに前へ、ローランが最も警戒しているチェンとターゲットの元へと地面スレスレで走り抜ける。黒い疾風が通り抜ければ、兵士達は突如発生した痛み悶え苦しみ、苦痛の声を上げて、それが全くの無音である事に混乱する。

真つ先に異常に気付いたチェンが、部下の安否を確認する為に振り向けば、そこには美しく輝くナイフを手を駆ける一匹の狼、その顔に見覚えがある事に驚きつつも赤霄とは別の剣を引き抜き、目前まで迫って来た狼、ローランに突き出すが……剣の先端はローランの持つナイフで逸らされ、逆に鉤爪による斬撃を腕に受けてしまう。一見浅い切傷だが、チェンは酷く混乱してしまった。

しかし、それも一瞬の事である。持ち前の精神力で直ぐに体勢を立て直すと、そこにはローランの姿は無く、それと一緒に先程引き取ったばかりの少女、ミーシャの姿も消えていた。

辺りを素早く見渡せば、ビルの壁面を人間とは思えない速度で登っているローランを発見した。右手でミーシャを担ぎながら、なんの障害もない様にスイスイと登っていく。兵士達も立ち上がり、チェンが

ローランを追いかけようとしたその時、空から一つの黒い物体が落ちて来た。

球状のそれは特徴的な物に見え、チエンは一瞬固まってしまいが、それが何なのか直ぐに理解した。急いでその場を離れる。兵士達も続く様にして物陰に身を投げる。

黒い球体が炸裂し、飛び散る破片と衝撃波が周囲を無差別に襲う。逃げ遅れた何人かが衝撃をモロに受け、まるで子供が放り出したオモチャの様に飛ばされていく。

沈黙は去り、一帯は音を取り戻す。ビルの間を反響する爆破の残響と、兵士達の呻き声が耳に入った。

チエンは追い掛ける事を止め、比較的無事な兵士に指示を飛ばすと無線機を耳に当て、医療部隊の要請をした。

兵士達の一通りの応急処置を終え、ロドスに、レユニオンにミーシャを攫われた事を無線機越しに伝え、チエンは一息吐く。

そして、彼女は龍門のトップに回線を繋ぐ。追放された筈の底辺フイクサー、誰にでも親しみやすくフランクに接していた、そして先程見た恐ろしいほどの無表情の顔をした男の事を聞く為に。

最近のガキつてのは凄いな？

天気予報で確認した小雨に合わないように、ターゲットである少女を抱えてWと一緒にビルの屋上を駆け抜ける。

文面だけ切り取れば完全に誘拐犯な俺、ローランド。何気に依頼で誘拐が来た事は無かったな……。

ターゲットの奪還に成功した俺達は、一旦仮拠点にしていたビルに戻って機材を回収、それから集合場所である、龍門から出て直ぐの探掘場跡地で落ち合う予定だ。スカルシュレッダーには、Wが既に連絡を入れてある。上手いこと撤退してくれるだろう。

「W。さっきのビルに戻って機材を回収するぞ。俺はターゲットを抱えてるからお前が持つてくれ。」

「それぐらい自分で持つたらどう？」

「無茶言うなよ。大した量じゃないんだし、だったらWがこの子を抱えてくれるのか？」

「あーはいはい。私が持つわよ。」

Wにしては珍しく、意外とあっさり折れてくれたみたいだ。なんか嫌な予感がするぞ。

小脇に抱えているターゲットに目を向けると、案の定、と言うか当たり前だけど凄く困惑していた。誰だつて知らない大人二人に連れ去られたらそうなるし、まだ子供なら尚更だよな。

仮拠点のビルに到着し、機材の回収をWに任せて、俺はターゲットの子に状況を説明する事にした。今まで宙ぶらりんだつたターゲットの両足をコンクリートにつけさせる。

「……貴方達は誰なの!?!近衛局の人間じゃないし、アレックスの事を知ってるの!?!」

「……アレックス？」

「スカルシュレッダーの本名よ。それぐらい調べておきなさい。」

知らない単語に首を傾げていると、Wが助言をくれた。スカルシュレッダーの本名はアレックスと言うらしい。Wに感謝の言葉を言うつてからターゲットに向き直る。

「ああ、俺達はスカルシュレッダー、アレックスの味方だよ。ちよつと前に弟さんとは会っていたと思うけど、アレックスがターゲットを奪われたって連絡してきたから、こうして助けに来たんだよ。改めて自己紹介しておこうか。俺はローラン。で、あっちの女がWだ。一応聞いておくけど、君は？」

「……ミーシャ。ねえつ、あの子は、アレックスは無事なの!? 貴方達は何なの!?……私は、どうなるの?」

「あー、W?」

「スカルシュレッダーは別に何ともないわ。ちよつと部隊員が欠損しただけよ。」

流石は幹部だ。あの年齢でレユニオン突撃部隊を任せられるだけあるな。

「今Wが言ったように、君の弟さんは無事だよ。で、俺達は何なのかって言う質問だっけ? 俺達はレユニオン・ムーブメントって言う組織で、感染者の解放を目指して戦ってるんだ。あ、俺とWは雇われの身だから、あまり深くは関わってないよ。」

「そして最後に君のこれからだけど、まずは弟さんと再会して、そこで君の未来が決定すると思うよ。見た感じだと君には素質があるから、弟さんと一緒に戦ってもいいし、新しい生活を送るって手もあるぞ。」

今までの依頼で培った経験でターゲットである少女、ミーシャを落ち着かせる為の言葉を俺の口はぺらぺらと吐いた。まるで俺は操り人形みたいに誰かに喋らされてるみたいに薄っぺらい言葉だ。それでも、ミーシャが信じて落ち着くには十分だったらしい。警戒する目付きは相変わらずだが、いつでも飛び掛かれるようにしていた様に見える臨戦態勢を、取り敢えずは解いてくれた。

機材を俺が持つてきていたアタッシュケースに詰め終えたWが暇そうな顔をしていたので、ミーシャを再び小脇に抱えて移動を始める。

ビルとビルの間を飛び越えて、路地裏を警戒しながら小走りに移動し、人目の付かないマンホールをこじ開ける。

梯子を降りればそこは下水道だ。Wとミーシャは顔を顰めている

が、作戦を始める前に気遣って消臭剤を買ってあるので（Wがごねた）、どうかここは堪えてほしい。と言うか、Wは我慢しろよ。お前傭兵だろ。劣悪な環境で行動した事が無いのか？死体の山で一夜を過ごした俺を褒めて欲しいね。

事前に頭に叩き込んでおいた地図を頼りに、迷路の様に入り組んだ下水道を走る。足元には等間隔で明かりが灯っているので、間違えて下水に落ちるなんて事は無い。暫くの間走り続け、外に出る為の梯子を登ってマンホールを手で退かす。顔を出せば僅かに太陽の光が差し込む、周囲を巡らされた配管に囲まれた場所に出た。おいW、俺の尻を叩くな。今上がるから待つてろって。

日光が差し込んで来る方向に進んで行けば、龍門の外壁に出る事が出来る。俺達は今、作業員が定期的に点検に使う為の通路を歩いて、近くに人の気配を感じないところを見ると、どうやら近衛局の連中は追ってきていないようだ。またあの隊長さんとやり合うのはゴメンだし、ラッキーだな。さてと、じゃあ行きますか。

「しつかり捕まってるよ。」  
「え？待っ。」

手摺りに片手をかけてダイナミックに飛び降りる。そしたら近くにある手頃なパイプに捕まり、また降りるを繰り返す。途中で焦ったくなつて、結構な高さから直接地面に降りたけど、衝撃はちゃんと逃したからミーシャも大丈夫な筈だ。少し遅れてWも着地した。Wが笑い出したのでその視線の先を追ってみると、ミーシャの顔から完全に血の気が引いていた。どうやらかなり怖かったらしい。

そこからまた走り出して、十分ほどで例の採掘場に到着した。俺が抱えていたミーシャを降ろしていると、Wが俺のアタッシユケースを漁って消臭剤を取り出していた。市販のスプレータイプだ。

まずWが全身に吹き付けてから、ミーシャにまでやってあげていた。同性、それも子供には甘いのかもしれない。

「ああ、俺にも貸してくれよ。」

「…………ええ、いいわよ。」

「うん。ありがうえあッ!?!」

顔面にスプレーを吹き付けられた。勿論Wは大爆笑だ。鼻がスー  
スーする。取っ組み合いに発展した。

……ミーシャに止めろと言われてしまった。俺もWも手を下げた。  
なんだ、凄くしつかりした子じゃないか……。

## 財布を潰して皮を削ぐ

生き別れた姉弟が遂に再会、感動する場面だな。今は仲睦まじく話し合ってるし、他のヤツらも温かい雰囲気だ。

が、そんな空気にはとても馴染めそうには無いので、Wと二人でちよつと離れたところを散歩している俺、ローランだ。ま、あの場に居続けて水を差すよりはマシだろうな。

レユニオンとしては、多少の損害を払って龍門から脱出し、当初の目的を達成した訳だけど、まだ気を抜いてはいけない。何時だってハッピーエンドにはバッドエンドが付き纏うんだ。

「おいW。この状況、近衛局のヤツらが諦めるとは思わないよな？」  
「十中八九追跡して来るでしょうね。まあ、私達にはもう関係無いけど。」

「そうだな。後はスカルシユレッダーなら何とか出来るだろうし、これ以上俺達が出る幕も無いか。」

近衛局とロドスは必ず此処を目指している。あのターゲットの少女の価値なんて知りたい気も起きないけど、それ程重要な情報を持っているっぼいな。

……うくん、恐らくチエルノボーグ関係なんだろうけど、あの作戦の裏側はかなり混沌としている事は察せる。これ以上ヤバい事に首突っ込むのはやめたいかな。いつか首だけになりそうだ。

「ねえローラン。どうやらスカルシユレッダーが近衛局の連中を迎撃するらしいわよ。早いとこ逃げておきましょう。」

「やっぱり直ぐそこまで来ていたみたいだな？よし、じゃあ取り敢えず炎国辺りにでも……。」

炎国料理は美味いんだよな。程よい辛さが、凄く今食べてますって事を実感出来て、生きている事の幸せを噛み締められる……気がするからな。どれ、最近は何にやられっぱなしだし、アイツの料理に唐辛子でも……。

「ローランにW！すまないがミーシヤを安全なところまで連れて行って欲しいんだ！」



予定変更だ。まったく……もう勘弁なんだけけどな？

「うん？ああ、いいよ。上司の願いくらい素直に聞くよ。」

「ちよつとローラン。言っておくけど私はゴメンだから、あなたが面倒見なさいな？」

「俺は決着を付けなければいけないんだ。ありがとうローラン。幹部じゃなかった頃から色々と面倒を掛けていたな。」

「別に、気にしない気にしない。」

……子守ねえ？龍門に居た頃でも偶に依頼としてはやっていたし、あの子は大人しそうだ。それ程手間の掛かる事じゃ無さそうだ……。Wは俺に丸投げするみたいだし、ここはフィクサーとして鍛え上げた俺のテクニックを見せてやりますかね。

俺とWはスカルシユレットダーからミーシャを託され、少数の突撃部隊員と共にレユニオンの野営地に向かっていた。あそこなら簡単には見つからないし、近くに炎国行き交通機関もあるから丁度良い。そんな風に今後の予定を建てていたんだけど、どうやら神様は俺の事がとつても嫌いらしい。

……この子がスカルシユレットダーを心配する気持ちは分かるけど、だったら何で引き留めなかったのかな。姉なら、無理矢理にでもして欲しかったよ。

「お願い……あの子を、助けてあげて。」

「はあ？」

Wが機嫌の悪そうな声を上げる。俺だって内心そう思ってる。来た道を引き返して、スカルシユレットダーを助けに行くのか？今更行ってもな……。

「貴方達が強い事はよく知ってる。だからお願いなの。アレックスとはもう離れたく無い……！」

実を言えば、凄く面倒くさい。またあの連中と顔を合わせるとか、余程の戦闘狂とかじゃなきや喜ばない。最初は断ったけど、そこから

ずーっとこの調子だ。いい加減五月蠅くなってきたな？

「はあ、そうかい。……なあW？お前、行つてきたらどうだ？お前一人で十分だと思っただけど？」

「奇遇ね？私も似たような事考えてたわ。黒い沈黙様なら救出くらい余裕なんですよ？」

「……ふーん。」

「へー……。」

「あの、早く……。」

「うるさい。」

Wとの真剣勝負なんだ。頼むから邪魔しないでくれ。

「おい、次は負けないからな？」

「よく吠えるわねえ？叩き潰してあげるわ。」

「……ジャンケンポイ！」

「あっち向いてホイ！」

「フッ！」

「ジャンケンポイ！」

「あっち向いてホイ！」

「っしやー！」

「ジャンケンポイ！」

「あっち向いてホイ！」

偵察目的で配置していた兵士が倒され、迎撃に出ようとするも、まるで戦場を上から直接見ているのかと疑いたくなる程の、ロドスのドクターの戦術指揮。奇襲を仕掛けても悉く看破され、戦力はどんどん削られていき、ミーシャを逃す事を目的としていたスカルシユレッツ

ダーも、源石爆弾を握りしめて潜伏し、覚悟を決めていた。

自身の武器による爆破で巻き起こる砂埃に身を隠し、それでも不安と焦りを隠せなかったスカルシュレットダーは、判断を誤ってしまった。

ドクターを巻き込んで死ぬ。最終手段としてドクターの背後から接近し、源石爆弾を起動、しかしドクターの側に居たコータスの少女が反応して……………何も起きなかった。

突如消えた敵に困惑を隠せない少女、アーミヤは周囲を警戒する。それはドクターや他のオペレーター、チェンや近衛局の兵士にペンギン急便の面々も同じだ。

一瞬だけだが、音が完全に聴こえなくなったのだ。寧ろ消えたと言う方が正しいだろう。この現象に、かつてチエルノボーグで似た様な経験をしていたロドスの者達は全力で警戒し、それと同じ様に近衛局の者達も周囲に敵が居ないか探し始めた。特に隊長のチェンは必死だ。唯一、ペンギン急便の二人だけが対応出来なかったが、首を傾げつつも辺りを見回すと……………

「なあ。もう此処で引いてくれないかな？これ以上損害を出すのも嫌だろ。」

いつからそこに居たのか。少し離れた岩場に全身黒尽くめの男が立っていた。近くにはスカルシュレットダーも居る。漸く敵を認識出来た近衛局の一行を尻目に、その男はスカルシュレットダーに話し掛けていた。

「スカルシュレットダー。ミーシャからキミを守れと言われたんだ。だから先に撤退しておいてくれ。」

「ロ、ローラン？今のは……………いや、ありがとう。しかし、お前一人でこれだけの量は……………」

「撒く事ぐらい出来るさ。さ、早く行つてくれ。」

後ろ髪を引かれる想いで撤退して行くスカルシュレットダー。ローランはそれを見届け、そして振り返った。

「よお、また会ったな？キミ達が何であの少女を追いかけているのかは知らないけど、さっさと回れ右して帰ってくれると嬉しいよ。」

ローランは手ぶらだ。その様子に全員が怪しんだが、武器を隠し持っている様には見えない。剣を持ち直しながら、チェンが前に出た。

「貴様は、以前龍門で低級フィクサーとして活動していたローランだな？何故レユニオンに参加した。」

「何故だつて？笑わせてくれるなよ。お前らが俺を追放したからだろ。俺が何かしたか？何もして無いよな。だったら少しぐらい報復してもいいだろ。」

先程見た時よりも妙に険しい眼付きのローランを若干不思議に思いつながら、チェンは何時でも動けるような体勢で話を続ける。

ウエイ長官に問い合わせて分かった事は、名前がローラン。九級フィクサーで、数年前に龍門にやって来て、それ以降事務所を営んでいる。

たったそれだけである。以前何をしていたのか、何処にいたのか。それらが完全に謎だったのだ。龍門に来てからは、毎日都市でフィクサーとしての活動をしていたとあるが、本当にそれだけである。

あの戦闘力を見て、チェンはローランの正体が隠しているか、又は降格処分を喰らった上級フィクサーだと仮定していた。実際その仮定は間違っていないが、少しだけ解釈が違う。

「……貴様を追放したのはウエイ長官だ。理由は私も知らない。」

あの時のナイフと鉤爪の様な武器は持っていない様だが、それでも今さつき見せ付けられた素早さは侮れない。このまま戦闘に入るか、はたまた相手が撤退するか。それを見極めようとして……。

「……ねえ、何で？ローランが、追放？」

ローランのでもチェンのでも無い声が響き渡る。全員がその声の持ち主に目を向けると、そこに居たのはペンギン急便所属のトランスポーター。サンクタの少女、エクシアだった。

「ん？……ああ、キミか。さあな？俺だつて追放された理由が分からないなあ。」

「追放つて……何かしたの？引越したとかじゃなかったの？」

「黙れ。何でキミ如きに一々話さなくちやいけないんだ。」

「ッ！……。」

そう言われ、エクシアは黙り込んでしまう。少し前まで親しかった者が突如消え、久しぶりに会えたと思っただけなら追放されていたと知り、さらに自身の敵としての再会。あの冷たい言葉は、龍門に居た頃のローランを知るエクシアには想像も付かないものだった。

「まあ、俺はスカルシユレットダーを撤退させに來ただけだし、それじゃあもう二度と会わない事を祈るよ……。」

「待て。逃すと思うのか？」

次に言葉を発したのはドクターだった。目の前で自身を救出してくれた人々の何人かが彼に殺された事を、ドクターは鮮明に覚えていた。チエンから襲撃を仕掛けて來た男の容姿を聞いた時から、なんとなくは予想していたが、こうして再び現れた敵をみすみす見逃す事はしたく無かった。

「はあ、やっぱりこうなるのか。っち、頼みなんか聞くんじゃなかったな……。」

ローランは言い終えると、最も近くに居たチエンに急接近する。それにしつかりと反応したチエンは洗練された動きで迎撃に出ようとするが、その一撃は何時の間にか、両手に小振りの剣を持ったローランに容易く避けられる。武器を持ち出した瞬間が全く見えなかったが、気にする余裕も無い為、フェイントを織り交ぜた剣撃を繰り出す。その悉くを避けられ、躲かれ、逸らされる。

『クリスタルアトリエ』製の双剣は繊細な為脆いが、驚く程軽く鋭利に出来ている。重さなど感じさせない腕を振るえば、敵は防御に徹しざるを得ず、自身のペースに持ち込む事は簡単だ。敵集団への牽制や強敵との一対一に使われるこの武器は、よほど熟達した者にしか使い熟せない。

流れる様な斬撃を繰り出すローランに対し防戦一方になってしまったチエンを見て、近衛局の兵士が援護射撃をする為にクロスボウを構えるが、その視界は狙いを付ける前に暗転してしまう。

響き渡る聞き慣れない轟音。糸が切れた様に後ろに倒れ込む兵士。この音が何なのか、それを一番よく知っているエクシアは驚愕する。

「ラテラーノ銃!？」

瞬時にチエンから距離を取ったローランの両手には、黒い大型の拳銃が握られていた。今までに見た事の無い形をした銃を、ローランは平然と発砲していく。

またしても急に出現した武器に混乱が起こる。矢とは威力も弾速も違う、死の鉛玉が肉眼では捉えられない速度で飛来し、命の灯火を消し去っていく。

正直なところ、ローランはこの『ロジックアトリエ』製のラテラーノ銃を使いたくは無かった。兎に角弾丸が高いからだ。しかし、その出し惜しみが自らに牙を剥く事を知っているので、敵の遠距離攻撃の手段を潰す為に引き金を引く。

二丁合わせて装弾数十六発、発掘では無く、一から作成されたこのラテラーノ銃はローランの戦闘スタイルに合う様に造られている。敵の手数を削ぐ為に造られたこの銃は、それ故に距離も装弾数もエクシアの持つ銃に劣るが、威力と狙ったところに飛ぶ精密性は一級品である。

一見無差別に発射している様に見えるが、ローランはしっかりと考えて撃っており、なるべくチエンやドクター、それに近い者を撃たない様になっている。こんな状況に陥ってまでなるべく敵を作らないその姿勢は、例え無意味であっても見事なものだろう。

弾丸を撃ち尽くし、しかし再び弾丸を込める事はせずに、ズボンに着いていたベルトに銃を仕舞ったローランは、とても憂鬱そうな顔をして一言。

「な？余計な損害は出したく無かったろ？キミ達は戦力を削がれて、俺は金を失った。良い事なんて何一つとして無かったな。」

去っていく彼を止められる者は、誰一人として存在しなかった。

## 道化の奥底

ロドスの艦内は騒然としていた。ほぼ全ての職員が駆けずり回り、ある者は必死にキーボードを叩き、またある者は、医薬品が入った箱を出来るだけ速く運んでいる。

ロドスは最近ドクターが目覚めたという理由上、二徹三徹は当たり前というレベルで忙しい会社だ。特に人事部の忙しさは異常を通り越している。勿論人事部以外の部門も忙しいが、全員が全員常に目の下に隈を作っているかと聞かれると、そうでも無かったりする。

しかし、この瞬間だけは疲れ切った体に鞭を振るわざるを得なかった。近衛局との合同作戦として龍門に行っていた行動隊が、現在敵対している組織『レユニオン・ムーブメント』の幹部の一人に大きな損害を与えられたのだ。

奇跡的にも、ロドスのトップであるドクターとアーミヤに怪我は無かったが、それでも残された爪痕は大きかった。

腕や足が半分で千切れたり、脇腹から内臓が溢れそうになっている重傷者が大量に出たのだ。中には頭の上半分が吹き飛び、帰らぬ人となった者もいる。

……もつとも、高い金や根気強い交渉で揃えたオペレーターとは違い、人事部がそれほど手間を掛けずに集めた彼等は、補充が効くと言ってしまうばそれまでだが、それでも大事なロドスの一員である。

ロドスの職員達は個人差はあるものの、全員がこの損害を与えたレユニオン幹部である存在を憎んでいた。休みが減ったというもつともなものから、親しかった、愛し合っていた人を失ったというかなり激しいものまでと、理由は様々だ。

近衛局の調査により、このレユニオン幹部の身元は判明していた。その資料はロドスにも渡されており、情報部はそれを頼りにローランなる男の正体を探っていた。

しかし、調べれば調べる程分からなくなった。龍門に来るまでの足取りが完全に不明だった。

かつて上級フィクサーだったらしい。分かるのはそれぐらいであ

る。龍門でもフィクサーとして活動していたが、これに関しては本当に普通であり、ペンギン急便のメンバーとも交友関係があったという。その時点では不審な点は見られなかった。

レユニオンに所属している理由は憶測だが、現在ロドスと契約を結んでいるペンギン急便のメンバーエクシアによれば、鉱石病に感染して追放されたとの事で、それで恨みを持つてているのではないかと言うものだ。実際あながち間違っていないが、ローランは恨みを返せるのならロドスでもよかった。ただ先にレユニオンと接触しただけである。さらに現在は傭兵であるWに雇われたという、レユニオン内でもかなり曖昧な立場だったりする。

以上の情報は一般職員では情報部にしか知らされていないが、正義感の強い誰かの手により、ローランの現時点で判明しているプロフィールはロドス中に広がっていた。

当然職員達はローランを罵倒し、この男に対する憎悪を募らせていく。……その様子をエクシアとテキサスは離れた所で見ていた。

何時、何処で、どのような理由で知り合ったかは覚えていないが、ローランはペンギン急便のメンバーと面識があった。

エクシアにとっては都市内を歩いたり、配達をしていれば見かける事がある男友達という認識だった。その度に話し掛けたり、ちよっかいを掛けたりしていた。自分よりも年上で背も高く、誰にでもフランクに話す彼との一時は楽しかった。偶に相談事もする程の関係で、今思えば龍門でローランと一番親しかった者はエクシアだろう。

テキサスにとってはなにかと気が合う異性という認識だった。自身がよく食べているチョコレート菓子をお裾分けした時はかなり良い評価を貰い、一緒にカフェに行った時も同じコーヒーを頼んでいたり、ローランに紹介されたハムハムパンパンという店のサンドイッチも気に入り、お互いが一緒にいて疲れないと感じていた。少なくともテキサスはそう思っている。

それに、一番の理由としてはローランからは同類の気配がしたという事がある。テキサスと同じ一匹狼の気配だ。一見彼の種族は分からないが、テキサスだけは何となくループスだと感じていた。



偶にエクシアがローランをペンギン急便に入社させたいと喚く事があったが、実はテキサスや他のメンバーも満更でもなかった。ペンギン急便を創り上げた社長のエンペラーもローランの能力は評価していたが、幾ら調べても過去が全く分らないという事だけは疑問視していた。しかし、フィクサーにはよくある事だと言うし、普段の素行にも何ら問題は無かったのでローランに意思があるのなら、と思っていた。

が、彼は突然龍門を去って行った。何の前触れも無しにだ。

急に一切の連絡が付かなくなり、最終的には彼の事務所にまで赴いたが、そこは既にもぬけの殻となっていた。

以前、エクシアはローランからフィクサーについて色々聞いてみた事があった。彼はフィクサーが受ける依頼について話してくれて、依頼の内容によつては長期間別の場所に滞在する事も珍しく無いと言っていたし、エクシアはローランが何か大きな依頼を引き受けたのだと納得する事にした。勿論心配したが、飄々とした彼なら何時の間にかふらりと帰つて来て、何事も無かつたかの様に目の前に現れる気がして、その時に何かいたずらをしてやろうと笑みを浮かべた。

意外にもその再会は早かった。そして、それは最悪の形として実現した。

いつもの親しみやすい笑顔の代わりに冷え切った無表情を貼り付け、腕に敵対している組織のシンボルマークが入った腕章を着け、両手に黒い手袋をはめていた。

再び会えた喜びよりも、何故という疑問と困惑の感情がエクシアとテキサスを支配した。

彼は先程まで戦っていたスカルシュレットダーを回収しに来たという旨の発言をした。エクシアもテキサスもあの俊敏さを見て、初めて彼は私よりも強いと認識した。あの時のへらへらして、何処か控えめな態度からは想像も出来なかった。それと同時に、彼は私の事を信頼していなかったとも認識した。それが、どうしようも無く寂しかった。

そして、チエンがローランにレユニオンに参加した理由を聞くと、

彼は自身が追放されたからだと言った。

次に二人を襲ったのは、これまた困惑と、言いようのない怒りだった。何故彼が。どうして彼が。

再会の喜びと信頼されていなかった寂しき、そして近衛局に対する感情が混ざり合い、エクシアは彼に勇気を振り絞って話し掛けた。こうなつた理由を聞く為に。

返ってきたのは罵倒と拒絶の言葉だった。龍門で活動していた頃の彼を知っているのなら、まず飛び出る事は無いだろうと思える様な言葉だった。

そして彼は何処からともなく美しい装飾の施された双剣を取り出し、あのチエンと直角以上に斬り結んだ。彼の実力を痛感するには十分だった。

この時点でテキサスは兎も角、エクシアは事態に付いて行けなかったが、突如響いた轟音に正気に戻される。

遅れて地面に叩き付けられる飛び散つた肉片の音。彼の両手を見れば、見慣れたシルエットがそこにはあつた。

構造が複雑な為、ラテラーノ人にしか使えないとされるラテラーノ銃。彼が両手に握っているのは形状は拳銃で、銃口付近に回転式弾倉が付いているという見慣れない物だった。彼はそれをなんて事無いと言う様に乱射していった。

弾丸がこちらに飛んで来る事は無かったが、エクシアは一種の絶望感を抱いていた。

ローランは何故かラテラーノ銃に詳しく、よく守護銃の改良の相談に乗って貰ったが、まさか彼自身が使えたとは思わなかった。それは、彼にとつて話す程信頼されていた訳では無いと言う事と同時に、心の何処かで彼を見下していた事を自覚させられた。対等に接していたと思つていたのに、相手だけで無く自分までもが。

エクシアとテキサスは、先程の作戦中の出来事をエンペラーには報告したが、まだ他のメンバーには伝えていない。彼の事を何も知らない人達が、彼を貶すのを黙つて見ていた。何も知らないくせに、とは言えない。自分達は彼の事を近くで見えてきたと言うのに、本当の彼を

何一つとして知らなかったのだから。

暫くして、ロドスに二人のオペレーターが帰って来た。一人は先鋒オペレーターであるグラニ。もう一人は任務という名の単独行動をしていたスカジである。

スカジは厄星の異名を持つ賞金稼バウンティハンターぎであり、その噂は同業者の賞金稼ぎだけで無くロドスにも広まっております、基本的にスカジは他人に積極的に関わっていく性格では無い為、その噂には数々の尾ひれが付いている。

とある村に単独で向かっていたという事はケルシーしか知らず、ロドスの職員達は何故か最近見掛けなかった彼女を見て、なるべく同じ空間に居たくないと言わんばかりに足早に去って行く。

スカジはそんな職員達を気にも留めず、ケルシーの元へ『あるモノ』を持って向かっていた。

「ねえ、さつきからロドスがやけに騒がしい気がするの、私の気の所為かしら。」

『あるモノ』と引き換えにケルシーから情報を得たスカジは、ロドスに戻ってから感じていた違和感の正体を知ろうとケルシーに問い掛けた。

「気の所為では無いな。龍門との合同作戦に送った行動隊がかなりの損害を負った。そして、その損害を与えた敵の情報を、正義感に駆られた誰かがロドスに流布した。」

「私も見てみたいわね。」

ケルシーは持っていたクリップボードに留めてあった、ホチキスで纏められた数枚のコピー紙を取り出して、スカジに手渡す。ロドスの情報部が精一杯纏めた敵の情報だ。

受け取ったスカジはざっとロドスが受けた被害の欄に目を通し、そ

の敵と思われる顔写真を見つめた。

「……………ウソ。」

「どうした?」

スカジらしくない珍しい反応に、ケルシーは彼女の顔を覗き込む。顔は口元こそ変わらぬが、その目は驚愕に見開かれていた。

「……………ロドスは、この男——ローランと敵対したのね?」

「ああ。それに書いてある通りだが……………まさか、お前はコイツの正体に心当たりがあるのか?」

「……………ええ。聞く限りは、ローランの事を調べても一切分からないみたいね。」

まさかの人物が、現在ロドスを悩ませている敵の正体を知っているかもしれない。ケルシーは、一刻も早くスカジが知っている事を知りたかった。

「幾ら調べても足取りが一切掴めない。分かっているのはコイツが元上級フィクサーという事だけだ。もつとも、これすらも憶測に過ぎないが。」

「そうね。元上級フィクサーというのは間違つて無いわ。」

「……………一級か?それとも便利屋クラスか?」

スカジは天井の隅を見つめ、何処か懐かしむ様な声で話し始めた。

「彼はスカーモールから『黒』<sup>黒</sup>を授かった、最上級のフィクサーよ。」

「何?コイツの正体は……………黒い沈黙なのか?」

「そう、彼は黒い沈黙。私と同じ様に化け物と呼ばれる人。」

ケルシーは何処か引つ掛かっていた。黒い沈黙と言え、悪い意味で有名な特色フィクサーだ。諜報に優れたフィクサーで、曰く、臆病者。雑魚。人間不信と言われる特色の中でも奇妙な存在だ。

そんな特色が、あのローランという男。近衛局の隊長と斬り結んだと聞いているから、かなりの実力を持っている。しかし、その顔はおろか、姿や種族、使う武器すら不明で、挙げ句の果てにはその存在すら疑われていたフィクサー。情報を隠蔽していたとするのなら、確かに納得がいく。しかし、誰が特色フィクサーが龍門で九級フィクサーをやっていると思うだろうか。

「……なるほど。あそこまで自身に関する情報を抹消する技術。情報戦に強いと言われる黒い沈黙なら納得できる……が、本当にそんな事が可能なのか？」

「彼は自身の正体を知った者なら、必ず消していたわ。常に仮面をして、依頼人との一对一の面会だけでしか依頼を受けない。私が生きているのは偶然みたいなものよ。」

「特色の中では一番弱いと聞くが、そこはどうなんだ。」

「ただのデマね。特色の中でも間違いなく上位に位置する実力者よ。……：相手が悪かったわね。黒い沈黙は一对多に強いわ。」

報告によれば、この男はスカルシュレッダーを回収する為に一人で現れたらしい。以前チエルノボーグで敵対した時もWとの二人きりだった。

「送り込まれたら最後。敵は必ず『沈黙』<sup>皆殺し</sup>する。だから黒い沈黙なよ。臆病だから沈黙してるとかじゃないわ。」

「報告ではこの男が使う武器は長剣、鉤爪、ナイフ、双剣、二丁のラテラーノ銃とあるが、他にも使う武器があると予測出来る。そして、はめている手袋から明らかに質量を無視した武器を取り出す、周囲を無音にするアーツを使うとあるが、お前は何か知っているか？」

「私は長剣しか見た事がないわ。そして、少なくとも私が出会った時は手袋をはめてなかった。」

スカジはそう言い終えて、自動ドアを潜って部屋を出ようとする。「待て。正体を知った者は殺されるのだろう？何故お前は生きている。そしてこの男といつ出会っていた。どんな関係をいつまで続けていた。」

「それを貴方に話す義理も義務もないわ。それに、知ったとしても得られる物は何も無い。」

「——ローラン。また、会えるのかしら。」

「ううえつつくしゅんツツ!!」

「ちよつと、何よ急に。汚いわね。それぐらい我慢しなさいよ。」

「無茶言うなよW。何だろう……風邪かなあ？」

「誰かがアナタに恨み言でも吐いているのかしらねえ？」

「……あー、うん。十中八九ロドスのヤツらだな。」

## ローランとW

ヴィクトリア王国のロンディニウム市、そのスラム街の何処かに存在する寂れた倉庫。倉庫の側の路地を一本の街灯が照らしている。その光は儂げで、今にも消えそうだ。

見る人によつては幻想的とも取れる光景だが、その光の元には似つかわしく無い、蠢く闇達が通り過ぎて行った。

特筆する点も無い、言つてしまえばごく普通な男達が倉庫の中に入つて行く。全員が自身の両腕で抱えられる程の木箱を持つており、その瞳は若干の怯えが混ざりながらも、これから手に入る莫大な利益に爛々と輝かせている。

倉庫内の天井からぶら下がる電球の一部に灯を付け、運び込んだ木箱をそそくさと積んでいく。ずっしりと感じる重さに思わず笑みが溢れるが、それは倉庫内にいる全員が同じだった。

彼等は此処、ロンディニウムのスラム街で幅を利かせているギャング組織の一員であり、違法ルートで入手した商品売り捌く、組織の収入を任されているチームの下っ端である。

最近はこのスラム街で最大の規模を持っていた『グラスゴー』が衰退した事により、実質裏ロンディニウムのトップの座が空席になった為、以前よりも組織間の抗争が多発していた。抗争には沢山の人員と武器が必要になる、つまり金がある組織が最終的に勝利を収めるのだ。

それはどのギャングも承知の事であり、全ての組織が新しいルートや収入源の確保に奔走している状態だ。

この倉庫内にいるギャング達が所属している組織はロンディニウムでは有名で、グラスゴーがまだ力を振るっていた頃から数々のルートを掌握しており、グラスゴーに続いて勢力が大きかった組織である。着々と資金を集めて力を蓄え、ギャングの頂点に立つ事を虎視眈々と狙っていた。

そして、この木箱達は彼等の目的への大きな一歩になる物であり、それこそ一気に抗争の大部分を鎮静化させる事が出来る程の物だ。

運び込んだ木箱の内一つの上部をボールでこじ開け、中を確認してにんまりと笑う。箱いっぱい詰まったエンケファリンは、彼等の将来を薔薇色に輝かせてくれる。

続いて、武装した大勢の男が倉庫に入ってきた。男達は組織に所属する戦闘員が殆どだが、中には歴戦の傭兵も混じっている。これらの物資を売り捌くまで守り通す。それが男達に課せられた役目だ。

三日間交代を挟んでこの木箱達に張り付き、ネズミ一匹逃さずに監視する。その間は常に精神を擦り減らす、リターンを考えればさほど気にはならなかった。

下っ端の一人が無線機を取り出し、今回の命令を下したチームのリーダーに連絡を取ろうとするが、何故かノイズが混じっており、上手く連絡が付かない。その下っ端は溜息を吐いて無線機を仲間に渡し、直接リーダーに会う為に三人の護衛を連れて出ていった。

あれから三時間が経過したが、どうもおかしかった。直接リーダーに会いに行った四人が帰って来ないのだ。一時間もあれば行って帰って来れる筈なのだが、一向に帰ってくる気配が無く、さらに機械いじりが得意な男が先程から無線機をいじっているが、此方も通信が繋がる気配がしなかった。

全員が何か向こうであったのではと思ひ始めるが、守っている物が物である為、今度は本当に下っ端の五人をリーダーの元へと向かわせる事にした。

夜の闇に消えていく五人を見届けて、彼等は今一度、所持している装備の確認を始めた。

「な、なあ！もう本当に何も知らないんだよ！お願いだから、た、助けしてくれえ！」



「……コイツ、本当の下つ端ね。さっきの奴らを殺したのは不味かったかしら？」

男は自分が知っている全てを話したが、目の前のサルカズが目線を逸らす事は無かった。

三時間前に出ていった四人が帰ってこず、続いて男を含む五人が送り出されたのだが、急に街灯の灯りが消えたと思ったら何処かの路地裏にいた。

鉄の匂いに気付いて周囲を見渡せば、視界に映る血と肉。そして目の前に立つ二人の男女。男は今日ほど自身の不幸を恨んだ事は無かった。

「ねえローラン。コイツの事、どうしようかしら？私に任せてくれてもいいけど？」

「いや、いいよ……俺に任せておいてくれ。」

ローランと呼ばれた男が前に出る。その手には鈍い銀色に輝くハンマーが握られている。

「ひ、ヒイヒイヒイッ！やめろ！やめろって！俺が何したんだよ!?!」  
「まあ、怖がるのも無理ないよな。けど安心しろよ？俺は別に殺しはしないよ。」

ローランはハンマーを振り上げる。

「……ちよつと痛いかもな。」

男のこめかみにハンマーが叩き込まれ、崩れ落ちる。ローランは男を担ぎ上げ、男が吐いた倉庫の方向へと歩き始めた。

「そんな死体なんか抱えてどうするつもりなの？精々中身を売るぐらいしか出来ないと思うわ。」

「いや、だから死んでないって言ってるだろ？ちよつと記憶を吹き飛ばしただけさ。一人だけあんな光景脳に焼き付けて生きてくなんて、可哀想だからな？」

訝しげな目を向けてくるWに対し、ローランは空いた方の手でハン

マーをぶらぶらさせながら話す。

ローランが握っている『老いた少年工房』製のハンマーは店主直々の精神に干渉するアーツが付与されており、先程の男にした様に、これで頭部を叩けば簡単に記憶処理を施す事が出来る。他にも破壊工や相手の武器破壊にも使えるので、ローランはこれを重宝していた。

「この辺に置いておけばいいかなつ、と。じゃ、コイツが言つてた倉庫に行くとしますかね。」

「昔のあなただつたら殺してたのに、わざわざ御苦労なモノね。」

「過去は過去で今は今だ。目先の事を考えようぜ?」

「それもそうね。」

ローランは手袋から長剣を取り出し、Wは手に握った起爆装置を回して遊んでいる。

ローランとWはタルラからの指示も無く、暇な時間が生まれたので、暇潰しと金稼ぎを兼ねてロンディニウムにまで依頼を探しに来ていた。

そこで知り合った金持ちから、復讐目的の為のとあるギャング組織の殲滅依頼を受け、夜になってからスラム中を飛び回って殺戮を始めていた。

「基本的にこの手の組織は『首から上』を潰せば後は勝手に自滅するけど、どうせなら『手足』も潰しておいた方がいい。あのおっさんも喜ぶだろうしな。」

「言っておくけど、あなたもそのおっさんの仲間入り間近よ?」

「……俺はまだ二十代だぞ?でも、マジか……確かに人によつては、おっさんか……?」

シヨックを受けているローランが言っている『首から上』とは組織のトップやその周辺の幹部を意味する単語であり、『手』は組織の戦闘員、『足』は組織の財産の元締めや売人を意味している。ローランが一人で使っている言葉だが、それなりに長い付き合いをしているWは意味を把握していた。

「あー、お前は見てていいぞ。下手に爆破すると俺らも巻き添え喰ら

うからな。」

「それだったら大丈夫よ。今回はこのナイフで、丁寧に相手をするわ。最近では中距離から一方的に爆破してばかりだったから、ちよっと鈍っちゃったのよね。」

言葉とは裏腹に熟達したナイフ捌きを見せるW。ローランは苦しんで死ぬだろう相手の苦悶の顔を思い浮かべた。

「ふうく……取り敢えずは依頼、完了ってところかな？そっちはどうだ。怪我とかしてないか？」

「勿論よ。少しは腕の立つ奴もいたけど、精々雑魚の寄せ集めってところね。」

少し前まで男達がいた倉庫は、二人の人間を残して全て動かなくなった。血液が飛び散った惨状が広がっているが、二人は特に気にする素振りも見せずに話し合う。

「じゃあWは此処にも爆弾を仕掛けておいてくれ。確かまだ持ってたよな。」

「りよーかい。」

Wが爆弾の起爆装置の設定を始めているのを尻目に、ローランは何かと気になっていたり木箱の中身を覗いていた。一見何かしらの食料品や雑貨に擬装されてはいるが、いかんせんお粗末なので簡単に正体を確認出来た。

「うわあ……これ全部エンケファリンかよ？一体何人のジャンキーが生まれるんだろうな。こっちは……純正源石か。チツ、下っ端が何人感染しようとお構い無しかよ。」

「何々？何か良い物でも入ってた？」

横からWがずいと顔を出してくる。それも結構な近距離、かつ明かりを消していた為暗闇からだ。

「うおっ!?!……驚かせるなよ。まあ、ほら……見てみる。これ全部売り捌いたら報酬要らない気がするな。Wは欲しいか？純正源石に

理性回復剤、エンケファリンまでであるぞ。純正源石に至っては何の処理も施されて無いから、運んでるだけで感染するとかクズだな。……俺が言えた事じゃないか。」

「源石爆弾の材料に必要なだから、純正源石だけは貰っておくわ。はい。この容器に入れておいてね。あなたは私よりかなり後に鉱石病に感染したんだし、これくらいいいでしょ?」

「ま、そうだな……。」

ローランはWから容器を受け取ると、そこら辺から見つけてきた大きなトングの様な物で純正源石を詰めていく。動きに一切の無駄が無いところを見るに、ローランは依頼で似た様なモノを受けた事があ  
るらしい。

「ねえ、エンケファリンって麻薬なのよね?これってどうやって製造してるか知ってるかしら?」

Wがエンケファリンが詰まった容器を指で遊びながら問い掛ける。

「ん?ああ……俺も詳しくは知らないけど、一番最初にそれを生み出したのはライン生命だつてな。なんでも、とある実験の副産物らしい。そこから成分を分析して複製して、被験者とかに投与してたらしいけど、何処かからその存在と実物が漏れた……らしいぞ。」

「ホント、やけに詳しく知ってるのね?」

「うっ……俺がまだ色を貰う前に、ライン生命から依頼を受けたんだ。この薬品が出回る前に売人を始末しろって依頼。その時に軽い説明を受けたんだ。一応依頼は達成したけど、やっぱり無理だったみたいだな。」

「はあ……まったく、何でそんな依頼受けたのよ。あなたの頭を覗けば、この世の全てを知れる気がしてきたわ。」

「そんな頭の持ち主はいないよ。」

二人は悠々と倉庫から出て、依頼人の屋敷へ歩き始める。

「実の娘を殺された恨み、か。俺とお前に向けられた恨みってどれくらいあるんだろうな。」

「数えたくも無いわね。それよりもほら、空を見上げてみなさいな?依頼の成功に花火なんて良いと思わない?」

「まったくくだな。」

ロンドンディニウムに爆音が響き渡り、夜空には複数の爆炎が上がる。一時的にだが、スラム街は昼の様に明るかった。

「それで、あの無駄に強がってたヤツの顔は見た？バラバラにされるって分かっても何もできないあの絶望してる感じ、結構面白いと思わない？」

「俺には理解しかねるよ……。」

人気の無い路地裏をローランとWは歩いていた。ローランの手には依頼の報酬が入ったアタッシュケースが握られている。看板の切れかかったネオンが、ケースを不気味に照らし出している。

大規模な爆破が出来てご機嫌なWとは対照的に、ローランのその顔は陰鬱に染まっていた。

「にしても、何かに引火したのかしら？思ってたより爆破が派手になっちゃわね。」

「なあ……俺って、何で生きてるんだろうな。」

「機会があればもう一度……はあ？何よ急に。」

上機嫌で語っていたWの話を堰き止める様に吐き出されたローランの言葉に、Wは少しイラついた様子で返す。

「自分が生きたいから生きてるんでしょ？それ以外に何があるって言うのよ。」

「そうか、そうだよな……お前には、生きる目的があるもんな。それに比べれば、俺なんて……。」

「……ちよつと、本当にどうしたのよ？」

遂にローランはケースを手放し、頭を抱えて壁にもたれ掛かってしまう。一瞬見えた表情は歯を食いしばっており、その目には生気が感じられなかった。何処か苦痛の表情にも似たものを浮かべるローランから滲み出た黒い靄に、Wは目を見開く。

「ぎつぎつ殺したヤツらの中に、一人だけ家族写真を持つてるヤツがいたんだ。俺は、特に生きる目的なんか持たずに、逆に持つてるヤツらを殺したんだ。何でこんな事してたんだ……。」

「……まだ立ち直れて無かったの？いい加減断ち切ったらどうなのかしら。弱肉強食の世界なのよ。殺した分だけ生きたらどう？」

ローランから滲み出る黒い靄が次第に濃くなっていくのを見て、Wは焦りを覚える。

「違う、違うんだ。俺なんかが生きてたって、何も良い事なんて起こりはしない。」

「世界はいつも俺から何かを奪っていく。俺はそれを取り戻して、俺自身の中身を埋めたかった。それだけだ。」

「だからと言って、他人から奪って良い訳じゃないんだ。俺は今まで何人殺した？殺した分だけ、幸せを掴めたのか？」

「結局、俺は空っぽのままだったんだ。底の無いバケツに幾ら血を注いでも、満たされる事は無い。ただ、他を食い潰していくだけだ。」

黒い靄がローランを渦巻いていく。

Wはこの現象を知っていた。以前ローランが話してくれた事がある。一部の人間は自身の特定の感情が最大限に到達した時、その心情を現実に引き出すと。最初は馬鹿馬鹿しくて気にも留めていなかったが、実際にそれを見て考えを改めた。

ローランは過去に一度だけ、これを引き起こした事がある。その時はローランがかなり疲弊していた事と、Wが尽力した結果事なきを得たが、今回はそうはいかなかった。簡単な殲滅だった為にローランは疲弊しておらず、Wは証拠の爆破の為に大量の爆弾を消費した。

このままだと周囲一帯が更地になるのは火を見るより明らかだった。あの黒い靄は有る筈も無い中身を埋めようと、全てを飲み込んでしまう。

Wは、ローランがこんな姿で苦しむのを、見たくは無かった。

「あ………W？」

「しようがないわねえ……あなたは別に、空っぽなんかじゃ無いわよ。ちゃんと考えて動けるし、私をおちよくる事だってあるじゃない？」

「じゃあ俺は……何で、生きてるんだよ?」

「それぐらい自分で見つけるモノよ。……そうね、少なくとも一つあるわ。」

「私は依頼人で、あなたはそれを受けたフィクサー。まだ依頼を受けているのに、勝手に逃げようって言うの?」

「私の依頼を達成する。これだって、立派な生きる意味でしょう?」

「あー、ゴメン、W。凄く情けないところを見せちゃったなあ。しかも、お前に慰めて貰うなんてな。」

その後、ローランは立ち直る事が出来た。顔色も良く、いつものおちやらかな態度もとるようになったが、背中が冷や汗で濡れていた。「ほんつつつとうにその通りよ。はあ、この私があなを抱き締めるなんて、何をさせたのか分かってるのかしら?」

「うん。ゴメン。本当にゴメン。ほら、この通りだ。」

ローランは以前依頼で行った事がある極東で教わった、どうしても相手に謝る、もしくは自身の意見を貫き通す為の奥義、土下座を披露した。

「ふーん、そう……まあ、許してあげるわよッ!」

「ふゲエっ!?!……は、ははー。そのお心遣い、感謝します……痛てえ。」  
地面に付けられたローランの頭を、Wは踏み抜いた。カエルが潰れた様な声が漏れるが、ローランは全て自身が悪い事を自覚しているの  
で抵抗出来ない。

「あースッキリした……いつまで寝てんのよ。さっさと立ちなさい。それと、完全には許してはないからね?」

「逆にそこまで許してくれるだけありがたいよ。……あー、腹減ったなあ?何か食おうぜ。」

「ま、確かにそうね。……この時間で開いてる店だと、ピザが良いわ

ね。」

「お、ピザか。いいな。」

二人は道を進んでいく。そこに、さっきまであったしがらみは殆ど無かった。

止まる事はせずに、ずっと歩き続ける。そうすればきつと見つかる。希望的観測だが、どんな形であろうと生きる意味が見つかるのは間違い無い。

「ピザと言ったら、やっぱりクアトロ・フォルマッジだよな！濃厚な味わいとあのチーズの伸びが堪らないぜ。」

「何言ってるのよ。ピザと言ったら、普通はマルゲリータでしょ？バジルの風味とモッツアレラチーズ、そしてトマトソースの味。あのシンプルさが一番なのよ。」

「……………あ？」



久しぶりに友だちと会うと、色々複雑な気分になるよな？

「おおー、改めて見てみると、結構酷くやられたんだな。ほんのちよつと前まで人でごった返してたなんて嘘みたいだ。」

「私達の襲撃を喰らった後に、天災でしょ？そりやこうもなるわよね。」

「そう、それ。確か極東の諺で泣きつ面に蜂って言うんだ。」

破壊された都市、チェルノボーグをWと二人で歩く。辺りはひっそりと静まり返っていて、当然人っ子一人存在しない。

代わりと言ってはアレだが、腐敗が進行しつつある死体だったら沢山転がっている。まあ、戦場に転がった敵の死体をちゃんと処理するヤツって珍しいいな。普通は身包み剥いでポイか、ダミーとか潜伏場所として下に潜り込むだけだ。

この前の作戦の結果を他の幹部に報告しに行く俺、ローランだ。  
……………ん？なんか寒くないか？

「おい、気温がどんどん下がってきてるぞ。お前は大丈夫か？」

「ええ。……………はーあ、コレはフロストノヴァのアーツで間違いないと思うわ。私達がこつちに来てるって把握してるのかしら。」

おおよその見当はついてたけど、やっぱりフロストノヴァだったか。もうコレ以上アーツを使ったら死ぬと思うんだけど、少女にしては意外としぶといみたいだな。感服感服つと。

俺達は今、ちよつと前にあつたミーシャを回収する作戦の結果を報告する為に、再びチェルノボーグにやって来ている。

Wの話だと、都市内にいるメフェイスとファウストに報告すれば良いみたいだ。ああ、それと、スカルシユレッダーにはミーシャと一緒にタルラの元に行つて貰つてる。弟は兎も角、姉の方も鍛えれば相当強くなりそうだしな。姉弟様様ってヤツか？

そんな風にあの姉弟の行く末を考えていると、瓦礫を挟んで少し遠くに離れた所。薄く靄が立ち込めている場所に動く黒いシルエット

が見える。

「多分アレね。さっさと報告しちやいましょ。」

「だな。時間が出来たら、ラテラーノのロジックアトリエに寄って弾丸を買いたいなあ。」

自分の命の為に金に糸目はつけない。当たり前前の事だ。聖人君子の善人だって、極悪非道の悪人だって、それこそ、聖書に出てくる神様だって。誰だって最終的に一番大事なのは自分の命なのさ。何なんだよ。一回死んだなら大人しく見守つとけよ。何で復活する。

「それって私も行つていいのかしら？あの戦争で結構な頻度でラテラーノの行商を襲つてたでしょう。その時に奪つた守護銃、そろそろ弾が無くなりそうなのよ。」

「え、Wが？……まあ、いいと思うぞ。俺は結構良い客らしいし、工房側も客が増えるなら願つたり叶つたりだろ。あ、不用意に言いふらすのはやめろよ。文字通り蜂の巣にされるからな。」

蜂の巣にされるのはマジの話だ。現状、銃の製造方法はラテラーノ政府の上層部、そのほんの一部しか知らない。あそこの工房は政府と執行人の目を掻い潜って銃や弾丸を製造しているんだ。そんな必死でやってるのを簡単に触れ回るヤツがいたら、当然始末する。ロジックアトリエは一応その客が信頼に足る人物かどうか調べてるけど、情報の価値に負けたヤツが広めようとする。

ソイツを自分達や客のフィクサーに依頼して始末するんだ。何回か俺もそんなバカの抹殺を依頼されて、他のフィクサーとチームを組んだ事があるんだ。いやあ、アレは凄かったな。四方八方からターゲット目掛けて飛び掛かる鉛玉の嵐。相手は抵抗するも虚しく全身に集中砲火を受けて一巻の終わり。なんなら、終わった後のターゲットの身元確認と証拠の抹消の方が苦労したな。

にしても、ロジックアトリエは何処で銃の製造方法なんか掴んだんだろうな？……もしかしたら政府絡みかもな。天使も地に堕ちれば黒くなるもんか。

「取り敢えず俺が案内するから、その通りにすれば大丈夫……お、あつちの連中も俺達に気付いたみたいだな？」

向こうから靄を掻き分けて姿を表したのは、レユニオンが誇る精鋭部隊、スノーデビル小隊の兵士だ。

「Wとローランか。フロストノヴァの姉さんが今あつちの広場に向かってる。そこにメフィストとファウストもいる筈だから、直ぐに行ってくれ。」

「サンキュー。……とところでさ、そのフロストノヴァが冷気を出してるみたいだが、まさか、敵と交戦する直前って事は無いよな？ それもロドスと近衛局と。」

「……嫌な予感は何時でも当たるみたいだな。なるべく巻き込まれない様に気を付けて欲しいが、出来ればフロストノヴァの姉さんの身を思っただけしてくれるとありがたい。」

「……だつてさ。どうする、W?」  
「火力支援ぐらいはしてあげてもいいわ。ローランは前衛部隊に加わりなさい。」

「あー、ありがたいんだが、ローランの装備だと姉さんの出す冷気に耐えられないんじゃないか?」

「こう見えてもこのスーツ、耐熱に耐寒もバッチリなんだぜ?……俺に拒否権はないし、あんたは幹部じゃない。そう言う訳だ、よろしく。」

「……苦労してるんだな。」

俺がいつも着ているこのスーツは、そこら辺の安っぽいブランド物なんかじゃない。ちゃんと服専門の工房に仕立てて貰った一品。防刃防弾防水耐爆さつき言った様に耐熱と耐寒性能もバッチリだ。汚れも付きにくいし、落ちやすい。返り血を如何に対処するかも戦場じゃあ大事な要素の一つだ。

早速俺は走り出して靄に突っ込み、Wはいい感じのポジションを探す為に瓦礫の上を跳躍して行く。相手はあのロドスと近衛局だ。どれ程の戦力を投入しているかは知らないけど、俺への何かしらの対処をしているに違いない。

地形を把握し、どんな風に攻めるかを考えていると、種族柄効く鼻に異臭がつく。人が焦げる匂いだ。

靄が段々と薄くなっていくと、近くの崩壊仕掛けたビルに巨大なレユニオンのシンボルマークが爛々と輝いているのが見える。よく目を凝らせばそれは燃えていて、所々歪な出っ張りが見える。

……おい、マジかよ。燃えてるの人間だよな。十中八九メフィストの仕業なんだろうけど、あのガキ絶対碌な死に方しないぞ。俺が言える立場じゃ無いのは今に始まった事じゃないが、流石にあそこまで露骨な死体蹴りはした事が無いな。精々そこら辺に拷問した死体を張り付けるとかにしとけよ……。

靄を抜けて、視界が広がる。近くにはメフィストが自身の部下に指示を出し、ファウストがそれを見守っている。奥では他の部隊とは違う、白い防寒具を見に纏った兵士達が目まぐるしく動き回り、丁度その中央辺りで大規模なアーツを展開して冷気を生み出し、空気を氷結させて発生した氷塊を敵に飛ばすフロストノヴァが見える。

その圧倒的なアーツをロドスは近衛局と協力しながら凌ぎ、反撃の機会を見極めている。凄まじい結束力だ。

「メフィスト。例の作戦の報告をしに来た。俺も戦わなくちゃいけないから、手短かに伝えるぞ。まあ、成功だ。被害はそれなりに出たが、必要な被害だったと言っておくよ。スカルシュレッダーとターゲットは今タルラのところにいる。」

「……なるほど、しくじらなかつたみたいだね。流星は特色だよ。じゃ、早く行ってきたら？ 僕達はそろそろ移動しなくちゃいけないんだ。」

「……言われなくても。」

戦場に爆音が鳴り響く。どうやらWが攻撃を開始したみたいだ。俺もさっさと参加しなきゃな。

デュランダルを手袋から出して抜剣し、手で遊ばせながらスノーデビル小隊に近づく。最初に気付いたヤツに声を掛けて、俺も戦闘に参加する、冷気の心配はしなくていいと伝える。

前衛部隊に素早く移動すると、偶然攻撃のチャンスを掴んで、前に出て来た近衛局の兵士と目があつたので、適当に首を刎ね飛ばす。

「チツ、一人やられた！ 気を付けろ、黒い沈黙だ！ 絶対に固まって動

け、奴が持っている武器に警戒しろ！」

「みなさん！彼に最大の注意を払って下さい！隙を突かれれば一気に崩壊します！」

（……は？何でこんなにも早く身バレしてるんだ？便利屋でも雇ったのか？）

俺が黒い沈黙だと知っているのは、それこそ一握りの信頼出来るヤツらだけだ。便利屋を雇ったのなら話は別だが、アイツらなら依頼を却下する……と思うんだけどな。所詮友情なんて儚いか。

が、やりようは幾らでもある。沈黙のーツを使えば連携は少しでも乱れるだろうし、俺の使う武器だって全部は把握しきれていない筈だ。

振り返ってフロストノヴァに参戦の意思を伝え、再び前に出た。

……ああ、君か。そりゃ、そうなるよな。

「久しぶりねローラン。会いたかったわ。だから剣を納めてくれないかしら。」

「なあスカジ。俺は友だちを傷付けたくない。特に君とくれば、尚更だ。」

スカジ。異常な強さを誇るアビサルハンター。俺が今、こうしてここに立っていられる理由になった、ちゃんとした友だち。

結局、俺は友だちになったヤツとは一度は刃を交えなくちやいけないらしい。仲直り……出来るかな。

## 沈黙は破れない

戦場の最中に沈黙が生まれる。

向かい合うのは二人の男女。黒尽くめの男は、両手に握り締めた長剣を胸の前に構え、美しい銀髪をはためかせる女は、自身の身長と変わらない、地面に突き立てた大剣を引き摺り抜く。

不思議と、二人だけの戦場に横槍が入る事は無かった。もし入れれば、邪魔をされた男は怒り、無慈悲な殺戮を開始するだろう。そして、女はそれを宥める。ロドスもレユニオンもそれは理解出来た。無駄な損害を増やす訳にはいかない。

「……はあ。君とやり合うのは初めてだな。これが最初で最後だと良いんだけど。」

「同感ね。私も余計な血は流したく無いわ。ローラン、だいぶ軽くはなった様だけど、まだ引き摺り続けているのね。」

「ああ。出来れば君とは一時間ぐらい話したいけど、俺はちよつと殺し過ぎた。勿論ロドスのヤツらもな。……だから、これを置いていく事は無理かな。」

黒と銀が急接近し、ぶつかり合う。スカジは大剣を振り上げ、ローランは長剣を振り下ろす。二、三回の衝突を経て、二つの影は距離を取る。

圧倒的なパワーと耐久力で自身のペースに持ち込もうとするスカジに対し、数多の武器を使い分ける技術に特化したローランは少々分が悪かった。

相手はそんなじょそこの力自慢とは違うアビサルハンター。人知れず幾つもの異形から人々を守る守護者。ローランの様な人殺しなんて、本来なら顔を合わせる事すら憚られる筈だ。

ゆつたりと佇むスカジと比べ、ローランはいつでも動けるように踵が上がり、表情は険しい。

ローランが駆使する、生きる為に殺す為の殺人術。スカジの怪力の前には、所詮小手先の技術でしか無い。幾ら剣撃が速かろうと、幾らフェイントを織り交ぜようと、スカジは真っ向から叩き潰してくるだ

ろう。

銃を使っても時間稼ぎ程度にしかならないと判断したローランは、一撃の威力と安全性を選んだ。手袋に長剣を突っ込み、代わりに違う武器を取り出す。

取り出したのは『アラス工房』製のランス。ローランの身長と大して変わらないリーチを誇り、相手に余裕を与えない。並大抵の盾ではその突きを防ぐ事は難しく、安易とその装甲を貫くだろう。

先行を取ったのはローランだった。有らん限りの力で大地を蹴り、美しく輝く先端をスカジに向けて突き出す。

スカジは、その攻撃を身を退け反らせる事で回避した。数々の死線を乗り越えたローランも又、スカジには及ばずとも身体のスベックは化け物染みている。一呼吸の間も置かず、次の刺突が繰り出された。

時には突きから派生して振り上げ、時には薙ぎ払う様にして振われるランスは、スカジにとって厄介としか言いようが無い。ダーっと行って、ドンツと倒して、パパツと片付ける。ローランが聞けばまず間違い無く脳筋かよと答える程に、スカジの戦術は単純だった。

単純故に強く、嵌りやすく、躓きやすい。それを理解しているローランはスカジの接近を許さない。一挙手一投足の動作に目を配り、スカジの行動を阻害する様にランスを放つ。

早い話、スカジは若干苛立っていた。自身が思う様な展開に上手く持ち込めない事もあるが、ローランが振るうランスが、まるで自分を拒絶しているような気がした。これ以上、お前は俺に関わらないでくれと言われているようで、線引きされているようで、嫌だった。

解決方法はこの手が知っている。隙を突いて大剣をコンクリートの道路に突き刺し、そのまま地面をなぞる様にして接近した。大剣は障害物等物ともせず、氷の上を滑る様にスカジの両手に着いて行く。

ローランは初めて見る動きに目を見開き、スカジの意図を理解して歯噛みする。即座にサイドステップを繰り出そうとしても遅かった。苦肉の策と言わんばかりに後退する。

瞬間、スカジが大剣を振り上げ、ローランを目掛けて大小様々なコ

ンクリートの破片が殺到する。攻撃にも、目眩しにも成り得る一手だ。

ああ、確かスカジの前で似た様な事やったよな。そんな場違いな記憶を脳の隅に追いやり、自身が退避するコースに飛んで来る破片だけをランスで迎撃する。

決めた量の破片を捌き切り、反射に近い動作でランスを両手で上に掲げれば、自身が地面に陥没すると錯覚する程の衝撃がローランを襲う。痺れる両手に鞭を打ち、声を上げながらランスで払い除ける。一瞬の内に交差する視線は、スカジは熱く、ローランは苦しげだった。

素早く動くランスを足場にし、もう一度空中で一回転からの剣撃を繰り出すという離れ業をスカジは見せる。迫り来る凶刃をローランは避けきれず、左の前腕を大剣が掠めた。防刃性のスーツは意味を成さず、前腕に一本の赤い線が刻まれた。膨大な質量で切り裂かれた肉はぱっくりと裂け、血液が溢れ出す。

骨まで届いていない事を把握したローランは、慣れた痛みを無視してランスを仕舞い、左手を腰の辺りに持つてくる。そこからは、正に神速と言うべき電光石火の抜刀だった。

目にも留まらぬ、嵐の様な太刀筋。防御の為に構えた大剣から夥しい程の金属音が鳴り響く。腕や足に無数の赤い線が生まれ、赤い玉が浮かび上がる。

最後の一闪を大剣に受け、再び距離を取る。一連の攻防で生じたテングロンハットのズレを直し、正面に立つローランを見据える。

ローランは目を瞑って息を吐き、ゆっくりと抜身の刀を鞘に戻す。その姿は、何十年もの間研鑽を積んだ達人と見間違える程だ。

漸く目を開いたローランは、左手が問題なく動く事を確認してから、『ムク工房』製の太刀を仕舞った。抜刀してからほんの僅かな間だけ、身体能力が向上するアーツが込められた業物だ。少しはダメージを与えられるかと期待したが、手で擦れば消えていくスカジの傷を見て、大きな溜息を吐いた。

「あら、女性相手に酷い仕打ちをするのね。髪の毛が何本か切れちゃったわ。」



「お……君がそんな冗談を言うなんて、ちよつとびっくりしたな。まあ、悪いとは思ってるけど、しょうがないだろ？」

「私のコレは本心よ。言っておくけれど、分かっていたわ。貴方が言う冗談は、いつも中身の無い薄っぺらな物だつて。」

「……もういいだろ。頼むから引いてくれ。これ以上は。」

「無理ね。いつだって貴方はそうやって……「俺のダチをやりやがったなクソ野郎ツ!!」

視界外から突然近衛局の兵士が、仲間の静止の声を振り切つて現れる。憤怒に煮えたぎる想いを乗せたその剣は、ローランの無防備な頭へと向かつて。

「うるせえよ、黙ってる。」

底冷える様な声が漏れる。刃がローランに届く事は無く、復讐に燃える瞳は顔面ごとランスで貫かれた。司令塔を失った兵士は溢れ出る鮮血をローランへと浴びせ、ランスが軽く振り抜かれたと同時に捨てられる。

頭の頂点から被った血に手を当て、ローランは顔の前に持つてくる。

ローランはアーツを発動させる。二人以外に、言葉が届く事は無い。

「君も見ただろ？俺はどうしようもないクズなんだ。だから、もう俺とは関わらない方が良いと思うよ。」

「それで？貴方はどうなるの。その身を擦り減らして消えていくだけだなんて、私は許せないわ。私としても、貴方の友だちとしてもね。」

ローランの顔が歪み始める。本当は言いたくないが、それでも決心した顔だ。

「俺には、君の友だちなんて資格は無いよ。君はそつちで、俺はこつちなんだ。わざわざ孤立する理由なんて、ないんだよ。分かってくれ。」  
「全てを背負おうとするからそうなるの。仕方がない事だつてあるわ。」

スカジは大剣の切先を下げる。

「ローラン。貴方は優しすぎるわ。フィクサーなんてやるには、どう

しようもないくらい。殺した相手の顔をずっと覚えているなんて、苦痛でしかないのに。」

「……それだったら、俺に殺されたヤツらはどうなるんだよ。誰からも忘れ去られるのか？ そんなのは、駄目だ。たかが俺なんて人間の所為で、そんなのは。」

結局、ローランは断ち切れなかった。幾ら立ち直ろうと、幾ら心を入れ替えようと、背負ってきたものはローランの精神を蝕み、溶かし、混ざり合い、確実にローランを殺していった。

「私が全部、受け止めてあげるわ。だって、それが友だちでしょう？ 貴方が私にしてくれた様に、私も貴方を助けるわ。」

ローランは肩を震わせ、顔を上げる。何故、どうしてといった感情がごちや混ぜになった表情だ。口から漏れようとしている言葉は、彼女を傷付けようとしていて、それでも、どうしようもなく嬉しくて。

だが、ローランはまだ断ち切れなかった。その黒く染まった精神は、まだ元に戻るには……不安だった。

「どうして……端から断ち切れるんだよ。」

ローランは長剣を手に強く握り締める。スカジにとってその姿は、あまりにも悲しく映った。

「……断ち切ることはできないんだ、スカジ。」

「今更、このまま自分で勝手に断ち切れないんだよ!!!」

## 負け犬

有りとはゆるる負の感情がごちゃ混ぜになった様な剣撃。荒々しい激情の刃をスカジは防ぐ。

体全体を使い、斜め右上から振り下ろされた長剣を受け止めながら、スカジは鏢迫り合っている大剣越しにローランを観る。先程まで浮かべていた歪んだ表情は消え失せ、代わりに恐ろしいまでの無表情が貼り付いている。廃墟を移動しながら、様々な方向から飛び掛かる斬撃を受け流す。

何かしらの覚悟を決めた時、ローランはその感情を絶対に表に出さない。スカジはそれを知っていた。しかし、知っていたからこそ、ローランがどんな覚悟を決めたのか、ある程度の予想が付いてしまった。

ローランはスカジとの関係を完全に断ち切ろうとしていた。攻撃の一つ一つに殺意が纏わり付き、致命の一撃と成ってスカジの体へ繰り出される。

ローランとしては、スカジを殺すぐらいなら自分がスカジに殺されたかった。それぐらいでしか、友だちとの関係を断つ方法が思い付かないからだ。自身が死んで悲しむ人間など、三本の指で数え切れるぐらいしか思い付かないし、戦死という形ならきつとWも納得してくれる筈だ。せめて、自分が知っている誰かに引導を渡して欲しかった。

だが、おかしい。自分という殺人鬼が殺すつもりでの攻撃を叩き込んでいるというのに、何故彼女は、スカジは殺意を出さないのだろうか。さっきの一撃だってそうだ。アレがローランの頭を真つ二つにするつもりで放たれていたのなら、ローランの腕の傷はもっと深かった。相手が凶器を手に襲い掛かってきたら、誰だって本気で抵抗するだろう。チャンスさえあれば凶器を奪い取り、躊躇無く相手を殺す。

そんな当たり前の事をしないのは、生きる意味を見出せない負け犬か、他殺願望を抱える精神異常者だ。

じゃあ、目の前の友だちが取っているのは何だ？数え切れない程見て、叩き潰してきただろうが。アレは防御体勢だ。相手の出方を伺

い、カウンターを入れる為の体勢。ああ、分かっている。スカジはそんな事をするヤツじゃ無いなんて事は、最初に出会った時から察してた。

何で受け止めようとするんだ？何で反撃に転じようとするんだ？躊躇う必要はないんだ……だから、俺を救うなんて間違ってるんだ。

一向に反撃しようとしないうスカジに腹が立ち、ローランは手数で圧倒しようとして武器を変える。

その両手に握られるのは『ケヤキ工房』製の戦斧とメイス。硬い相手にはメイスで、そうじゃない相手には戦斧で対応出来る組み合わせだ。回転する様に両腕を振るい、その大剣ごと粉碎せんとばかりに叩きつける。

別々の方向から迫る攻撃に、スカジは冷静に対処する。戦斧を大剣の刃で受け止め、メイスは柄で無理矢理挟み込む様にして防ぐ。尋常じゃない衝撃に手が痺れるが、武器が零れ落ちる事は無い。

今、最もローランの心に近く、それを外側から治す事が出来るのはスカジだけだ。Wでさえも、その心が崩れない様に補強する事しか出来なかった。

私がローランを止める。その覚悟はローランの覚悟に並び立つ。深淵の如き闇に囚われる彼に、私が光を指し示す。それが友だちだから。

より一層強固になる防御に、ローランは攻めあぐねる。幾ら攻撃を加えても、彼女が揺らぐ気配がしない。

だったら、君が俺を嫌いになるまでやるだけだ。動きはもう、大体把握出来ている。

スカジが漸く繰り出した、ただの牽制の為の攻撃。それを完全に見切ったローランは、大剣の腹に向かって、戦斧から持ち替えたハンマーを思い切りぶつけた。

予想外の方向からの衝撃にスカジの体幹が崩れ、胴体ががら空きになる。ローランはその腹部を……メイスで振り抜いた。

腹の中身が潰れて、混ざり合う感触。目を見開く友だち。口から溢

れる血液。ローランは瞳越しに伝わってくる傷を振り払う様に……鳩尾にとつても無い勢いで爪先を蹴り込んだ。

その一撃をまともに喰らい、しかし先程ローランがやって見せた様に、衝撃を利用して距離を取るスカジ。口内を蹂躪する液体を吐き出し、必死に呼吸をする。大剣を杖にして立ち続けるその姿は、誰の目から見ても重症だ。

「ごほっ、ごほ、……一つ、教えてあげるわ。」

腹部を押さえながらも、その目はしっかりとローランを見据えている。口元から顎に伝う血液を拭い取り、言葉を紡ぐ。

「貴方は私を殺そうと思っていたのなら、今の一撃で殺せたわ。……結局、貴方は私を殺せなかった。」

弾かれた様に動き出したローランの両手は、手袋から黒いショットガンを取り出し、銃口をスカジに向けた。引き金に人差し指を掛け、親指で散弾が炸裂する距離を調整する。

銀色のパーツが光り輝いた。

「私だって貴方を殺したくないわ。だから助けるの。私の覚悟は……貴方よりも強いだよ。」

スカジにとっては聴き慣れない発砲音が鼓膜を震わせる。1mも離れていない地面から破片が飛び散り、スカジの肌を傷付ける。

空になったシエルを排莖し、ローランは狙いをスカジの頭に向ける。仄かに香る硝煙の匂い。

「……俺が君を、殺せないだって？そんな訳無いだろ。俺はもう、決めたんだよ。」

「手が震えてると、説得力の欠片も無いわよ。どうしたの？それで私の頭を吹き飛ばせるんでしょう？」

スカジは、ゆっくりと大剣を担ぎ上げた。もう腹部は押さええていない。

「前に色々と普通じゃ無いって事は言ってたでしょ？私はもう動けるわよ。最大のチャンスを逃してしまったのね……貴方は、安堵している様に見えるわ。」

「……。」

その銃口から次弾が発射される事は無く、手袋へと消えていった。前髪を掻き上げながら、ローランは口を動かす。

「スカジ。俺はさ、君になら……ッ!!」

何処か悲しげな表情は、即座に憤怒一色へと変貌した。

「お前らは、お前らはッ!!煩い五月蠅いうるさいさつさと黙れよッ!!死ねよッ!!邪魔くせえーんだよおおおッ!!」

振り抜いた長剣と、巨大な逆三角形の盾が激突する。突如回転を始めた盾の縁にローランは押され、下がると同時に幾つもの矢が飛来する。その全てを長剣で切り払い、一刻も早く消し去りたい乱入者達を睨み付ける。

盾を構えた、長身のオニの女が立ち塞がり、その背後から続々と近衛局の兵士やロドスのオペレーター達が姿を現す。そのさらに後ろでは、数人の人影にスカジが運ばれて行く光景が見える。

「何も聞こえないと思えば、いきなり叫びだすとはな。うるさいのはお前の方だぞ。」

前に出たチエンが剣先をローランに向ける。

「……フロストノヴァはどうした。さつきまで戦ってただろ。」

「あいつはもう撤退してる。残っているのはお前だけだ、黒い沈黙。」

「……チツ。」

一瞬で拳銃を両手に出現させ乱射するが、即座に対応した近衛局とロドスの重装オペレーターに防がれる。これ以上撃っても無駄だと判断したローランは、クリスタルアトリエの双剣に切り替えて跳躍した。

狙いは敵の後衛。内側から潰してやる。

周囲の建物を蹴り、敵の中心へと飛び込む様に接近するローランを迎撃したのは、巨大な紫色の一撃だった。完全に何も無いところからの攻撃。師匠の顔が脳裏を過ぎるが、体を振って即座に下がる。

気付けば、最初にいた位置へと戻って来ていた。先程のアレは、恐らく姿を消すアーツの持ち主が潜伏していたのだろう。

「お前への対策はある程度出来ている。真つ向での戦いに持ち込めれば良い。」

「そうかよ。なら、コイツは初めてだな？」

オニの女——ホシグマが刃を回転させながら盾をローランに振るが、思わぬ衝撃に弾き返される。オニの膂力を使って強引に盾を構え直す、下から跳ね上げられた。

流石に不味いと感じた重装オペレーター達が前に飛び出し、ホシグマを守る様に盾を掲げるが、今のローランにとってそれは悪手でしかない。チェンとホシグマが下がれと怒号を飛ばすが、間に合わない。

膨大な質量で身体が真一文字に両断され、それを防いだ者は上から盾ごと切り裂かれる。

ローランが使用したのは『ホイールズ・インダストリー』製の大剣である。峰の部分に張り巡らされたパイプ。取り付けられたシリンドラーが伸縮し、剥き出しの歯車が噛み合って回り、蒸気を吹き出す。機械仕掛けの大剣を前に、盾で防ぐという行為は愚かとしか言いようが無い。

スカジならば受け止めていただろう。だが、目の前に転がっている人間だったモノは出来なかった。それだけの違いだ。

スカジと全く同じ構えを取るローランに、再び空気が張り詰める。誰もが静まり返ったその時に響いた音は、コツンと小気味良かった。

目を覆いたくなる程の激しい閃光が当たりを包み、光と影を作り出す。瞼や掌、ヘルメットのバイザー程度で対処出来る光量では無い為、殆どの者が個人差はあれど視界を失う事になった。

ローランはすぐさま大剣の腹を盾に閃光の遮断を試みたが、何者かに襟首を勢いよく引っ張られた為、それは叶わなかった。そのまま誰かに担がれ、されるがままに運ばれていく。しかし、その感覚は不思議と安心するものだった。ローランは、その誰かのぼやける横顔を見て、意識を手放した。

「……閃光弾か、やられたな。」

「どうしますか隊長。追跡は可能かと。」

「いや、やめておこう。何かしらの罠に誘い込もうとしているのかもしれない。兵士達も疲弊しているし、死傷者も発生している……死体を回収しろ。ロドスのドクターへの報告も兼ねて、撤退する。」

「っは、ほんつとうに重いわね。どうやってこんなモン振り回してるんだか。」

気を失ったローランの右腕を肩を組む様に掴み、空いた方の手で大剣を引き摺りながら、Wは落ち着ける場所を探して進んでいた。

あの乱戦状態に上から閃光手榴弾を投げ込み、視界を潰してからローランを回収したWは、未だに起きる気がしない友人をジト目で射抜いた。久しぶりにじっくり観察したローランの顔は、Wの記憶に鮮明に焼き付いた。

戦闘の影響で乱れた頭髮からは整髪料の香りがした。髭は綺麗に剃っており、不快感は感じない。肌は艶こそ無いがすべすべとしており、瘦けていない。目元が若干黒くなっているのは、恐らく寝不足だからだろう。緩んだ眉間には、うつすらと皺が走っている。どんな時でも——笑っている時も、怒っている時も——眉間に皺を寄せている所為だろう。その目付きの悪さが第一印象になっている事を、この男は知らないらしい。無意識でやっているのだろうが、良い加減に辞めた方がいいだろう。

相変わらずの黒いスーツは、所々に赤黒い汚れが付着している。よくよく見れば、左の前腕が裂けていた。Wは一際大きく溜息を吐くと、ローランをゆっくりと地面に降ろす。自身のポーチから消毒液と包帯を取り出し、慣れた手付きで傷の処置をしていく。ローランはスーツのポケットに何か入れている訳でもなければ、バックパックを背負っている訳でもない。要するに怪我を治療する為の救急キットの類を一切持ち歩いていないのだ。これには傭兵をやっているWとしても呆れるしかない。さっさと依頼を終わらせて去っていくのがローランのスタイルだが、それでも最低限の物は常に持つておくべきだろう。



少しだけ苛ついていたWは包帯を巻き終えた腕を強めに叩くが、ローランが目を覚ます気配はしなかった。自身が歩いてきた方向を見るが、誰かが追いかけてくる気配は無い。折角仕掛けたトラップが無駄になってしまったようだ。気晴らしに片手に持った大剣に目を向ける。

爆弾を扱う関係上、Wはある程度機械に関して詳しいが、この機械仕掛けの大剣はどのような仕組みなのか理解出来そうも無かった。持ち手のトリガーを引き、大剣の速度と威力を高めるのは分かるが、何を動力にしているのか、どのように大剣を加速させているかが理解出来なかった。アーツが付与されている雰囲気がないので、恐らく機械しか使っていない。Wは首を捻った。

上から奮闘するローランを眺めながら戦況を伺っていた時、この大剣から蒸気が吹き出ているのが見えた為、実は結構単純な仕組みなのかもしれない。

刃が付いている側の持ち手の近くに『Wheel, s—Indust try』と刻まれている。これを製造した工房の名前なのだろう。今度、ローランに聞いてみようかと考える。

なんとなく、大剣の持ち手をローランの掌に押し付ける。すると、大剣は僅かな銀の光を残して消えていった。こんな事なら、最初からこうすれば良かったとWは天を仰ぐ。こちら側からは外に出せないのに、仕舞う事だけは出来るのか。

「……私じゃ、あなたの事をちっとも救えないって言うつもりなの？」

ローランからの返答は無い。

「別にいいわ。あのお友だちと何をしていたかは知らないけど、あなたが自力で立ち上がるしかないって。私はそう思ってるから。これ以上面倒くさい人間なんて、見た事無いわ。」

Wは再びローランを担ぎ上げ、歩き始めた。

## 秘密

チエルノボーグへ偵察目的で送り出した行動隊が、死傷者を出して帰還してきた。

死亡した者は全員が重装オペレーターであり、胴体や脳天を一刀両断された様な傷を負っていた。遺品として持ち帰られた盾は、どれも裂けていた。

一方負傷者の殆どは長時間低温に晒された事による凍傷であり、幸いにも手足を切除する程重症化しているオペレーターはいなかった。唯一アビサルハンターであるスカジが腹部に強烈な打撃を負ったが、一日もしない内に戦闘が可能なまでに回復していた。

ロドスの空気は最悪と言えるだろう。ほんの少し前の作戦で黒い沈黙に大打撃を受け、それを反省して立てた対処法を元に周囲を完全に包囲し、特殊オペレーターマンティコアにより後衛部隊への被害を抑え、真正面の戦闘へと持ち込んだ……筈だった。

その手袋から取り出される新しい武器、機械仕掛けの大剣は全てを薙ぎ払った。強固な重装オペレーター達は、その力の奔流に呆気なく命を奪われた。そして急に現れた閃光弾が炸裂し、黒い沈黙はままと撤退していった。

ロドスの艦内で、黒い沈黙への憎悪は募りに募っていた。誰もが恨みつらみを吐き出していた。エクシアとテキサスは、それを遠目に見ている事しか出来なかった。

「ローランは、そんな人じゃないのに……。」

「……この際だからはっきり言おう。私達はローランの事を何一つとして知らなかった。勝手に仲が良いと思っただけで、ローランからしてみれば……そういう事だったんだろうな。」

そう言いながらテキサスは腰に着けたポーチから箱とライターを取り出し、中からタバコを一本取り出して吸い始めた。エクシアは、先程自販機で購入したミネラルウォーターのペットボトルを傾けた。

ロドスの甲板のベンチに腰掛けた二人は空を見上げた。何処までも続く曇り空だ。周囲には誰も居らず、寂しげな風が吹き付ける。

テキサスが吸っているタバコは、以前ローランと選んだものだった。初めての喫煙に噎せるローランが面白おかしくて、笑った記憶がある。エクシアが身に付けている指無しグローブも、ローランに無理を言わせて買ってもらった物である。財布の中身を空っぽにしたローランに、お礼として特製のアップルパイを作つてあげた。

上っ面だけの付き合いだったのだろう。ローランにとつてはどうでもよくて、迷惑なだけの作業。

今この瞬間だけは、タバコを吸う習慣があるテキサスも、近くでテキサスが吐き出す煙に慣れていているエクシアも、やけに煙が目沁みた。

一体どれ程の時間が過ぎ去つたのだろうか。深海の如き気持ちに沈んでいた二人を引き戻したのは、頬を打つた一滴の雨粒だった。

気が付けば箱の中から数本のタバコが消え、側に置かれたペットボトルは空だった。立ち上がったテキサスが艦内に向けて足を動かし始め、エクシアもそれに重い足取りで付いて行く。

人工的な白い明かりが照らす廊下を歩き、多くのオペレーター達が集う休憩室に入る。中ではオペレーター達が思い思いの事をして過ごしていた。

一通りの仕事を終えた彼らは、ソファで横になつていたり、本を読んだり、テーブルを囲つてボードゲームをしていたりと様々だ。だが、二人以上のグループで纏つているところでは、全てに共通している事があった。

全員が全員、黒い沈黙を貶していた。悪口を叩き合い、とても子供に聞かせていい内容ではないジョークで一喜一憂し、また憤怒の炎を滾らせる。黒い沈黙の人外染みた戦闘力が拍車をかけ、化け物と呼んで怒り、恐れ、また怒つた。

居た堪れなくなった二人は直ぐに部屋から出ていった。なるべく

はやく廊下を移動し、周囲の会話に耳を貸さない様にするもその努力は虚しく、次々と黒い沈黙への罵詈雑言が飛び込んでくる。

人が死ぬような場所で働いている彼らは、自身が死ぬ覚悟はあっても、仲の良い同僚や先輩、後輩が死んだ事実を受け入れられる程の覚悟は持ち合わせていなかった。この想いを吐き出さなければ、怒りでどうにかなりそうだったのだ。

何処か、誰もいないところを探して彷徨っていると、テキサスは視界の端にあまり顔を合わせたくない相手を見つけた。見かける度に絡んでくる、自身に執着する銀色の一匹狼、ラップランドだ。

しかし、何か変だ。いつもなら直ぐに目の前までやって来てべらべらと話し始めるラップランドが、今はこちらに興味すら示していない。その口元は満足気に弧を描き、嬉しそうな瞳を窓の外に向けて、鼻歌を歌っていた。まるで、この状況を楽しんでいる様に。

ラップランドは優越感に浸っていた。今や、ロドス全体で噂される黒い沈黙の悪行を耳に挟む度に、その気持ちは増大していった。

何も知らない愚か者達は、口々に恨み言を吐いている。そんな事をしている暇があるのなら、もっと別の事に時間を回した方が遥かに有意義だろう。それこそ、自身が恨む黒い沈黙を討ち取る為の鍛錬を積みめば良い。本当に、口先だけの愚かで、哀れな者達だ。他の努力している者達が目に見えないのだろうか？

ロドスで吐かれた暴言が黒い沈黙に届く事は無いし、仮に届いたとしても、黒い沈黙は傷付くどころか、怒りを露わにする事すらせず、冷たく受け流すだろう。殺すのなら、殺される事もあるというのに。そんな当たり前の事について不満をぶち撒けて何になるのか。

誰も知らない黒い沈黙。それを——ローランを他と比べれば遥かに知っているラップランドにとって、それは自身が特別な存在である事を実感させてくれた。

と言つても、まだラップランドが幼い頃、自身が実家にいて、返り血を浴びた事も無ければ武器を手にとつた事も無い頃だ。

最初は一族の工房を利用する為に訪れたローランが、待ち時間に当たりをぶらついでいて、偶然ラップランドと出会った時だ。その体格に合った黒いスーツを身に付け、存在をあやふやにする黒い仮面を着けていた。

初めて見る格好に興味津々だったラップランドは、若干吃りながらも、勇気を振り絞つてローランに話しかけた。意外にもローランはちゃんと反応し、ラップランドの質問にも答えてくれた。

暫くしてから、ローランはまたしても工房を訪れ、そしてラップランドはローランと話した。冷たい雰囲気を放っているが、その言動からは、若いラップランドを気遣う様子が見て取れた。

ラップランドはそれが嬉しくて、かなり長い間ローランを質問攻めした。ローランという名前はその時に知った。

自身が知らない沢山の知識を教えてくれて、嫌々ながらも遊んでくれて、体の動かし方を伝授してくれて……謝ってくれて、受け止めてくれて、慰めてくれて、正体を明かしてくれて、武器を渡してくれて、その先を指し示してくれた人物。それがローランなのだ。

そんなローランが、何も知らない者達から罵られていると、どうも気に食わないが、それでも、彼らはローランを知らない事の証明になる。自分だけが、彼の一面を知っている。その事実が、堪らなく嬉しかった。

もつと早くロドスに来ていたのなら、ローランに会つて戦う事が出来たのかもしれない。だが、再びロドスはローランとぶつかる筈だ。ラップランドはその時を楽しみに待っていた。期待に胸を膨らませ、牙を研ぎながら。

窓の外で降り始めた雨を眺め、鼻歌を歌いながらそんな事を思い返す。ああ、早くローランと会つて、話し合つて、殺し合つてみたいな、と。

「♪……おや？テキサスにエクシアじゃないか。そんな暗い顔してどうしたんだい？」

「お前には関係の無い事だ。今はゆっくりしたい。」

「そつか。もしかして、このロドスを駆け巡ってるあるモノの所為だったりする？黒い、沈黙の話だとか。」

「……ッ！」

そういえば、テキサスやエクシアといったペンギン急便のメンバーは、龍門でローランとの面識があつたつけ。流石にあそこで殺り合うのは不味かつたから遠目に見ていたけど、あの演技にみーんな騙されてたんだよねえ。

「フツ、ローランの心情を理解もせずになんて、ローランにとっては鬱陶しい以外の何者でもなかっただろうね！」

「ラップランド！お前は、ローランを知っているのか!？」

「勿論。ローランの性格も、正体も知ってたよ。これでも、まあまあ付き合いが長かつたしね。……残念だけど、これはテキサスにも教えられないなあ。ボクだけの秘密なんだ。」

ラップランドはからからと笑って、テキサスとエクシアの前から去っていった。その呆然とした表情が、またラップランドの気持ちにくすぐった。

## 独り狼と銀狼

「……おい、そこのお前だよ。動くな。」

「……っ！」

今思えばさ、キミとの出会いは結構危なかつたね。もしキミがもうちよつと荒つぽい性格だったら、ボクはキミに顔を見せる前に殺されていたのかもしれないのだから。段々と近づいてくる足音に、初めて恐怖という感情を覚えたよ。

「あ？……なんだ、子供か。あー……その、悪かつたな。立てるか？」

ボクが子供で、しかも怖がらせちゃつたと理解した時、キミは手を差し伸べてくれたね。手袋越しに握つたその手の感触。今でも鮮明に思い出せるよ。アレは、ボクが初めて家族以外の人と接触した瞬間でもあつたからね。

「ゴメンよ。まさか、こんな森の奥にキミみたいな娘がいるとは思わなかつたんだ。もしかしてだけど、迷子かい？」

頑張つて優しく話しかけてくれて、ボクは嬉しかつたよ。やつぱりキミは優しいんだね。どうしてフィクサーになろうと決意したかは分からないけど、きつと、それはキミにとつて最高で最悪の仕事だ。

「キミは……???つていいのか。俺か？俺は……オルランド。オルランドつて呼んでくれればいい。短い間かもしれないけど、よろしく。」

正体がバレる事を何よりも恐れるキミの事を考えれば分かるけど、世間知らずな、しかも子供相手に偽名を使うだなんて……フフツ、中々に酷いんだね？ボクはちゃんと名前を伝えたというのにさ。

「何でこんなところにいるのかつて？そうだな、中央の店でオーダーメイド品を注文してさ、完成するまで結構時間が掛かるみたいだから、こうしてシラクーザ中を旅してたんだ。息抜きにな？」

「……キミが、お気に入りの場所を案内してくれるのか？いや、でもな……流石に迷惑だと思うんだけど。じゃあ、俺が体験してきた外の事について話すよ。これでお相手だな？」

多分だけど、ボク以外の子供がキミと出会っていたら、あまりの怖さに泣き出していたんじゃないかな？全身を黒いスーツに包んで、顔

の前面を真っ黒な仮面で隠した長身の男が森の中を歩いてる……絵本にでも出てきそうな格好だね。こんな話が広まれば、子供達は不用意に森には近づけなくなりそうかな。

でも、あの時のボクは恐怖よりも好奇心が勝ったんだ。なんとなく優しそうだなどは感じてたし、キミと話していて、これがお父さんが言っていた友だちってモノなのかなあって感じたんだ。家族以外の誰かと、こんな近くで一緒にいるのは、初めての経験だったんだ。胸の中で何かがムクムクと膨れ上がって行って……その感情を曝け出したくて堪らなかったよ！

「おおう、随分と元気だな……じゃあ、目的地に着くまで、俺の話をするよか。シラクーザの外には色んな国があつてだな……。」

極東では百聞は一見にしかずっていう諺があるみたいだけど、その一見が出来なかったボクにとっては何よりも興味を惹かれたよ。薄々感じていたけど、キミには子守の才能でもあるのかもしれないね？

あの時のボクはやんちゃだったからね。初めての事態にとっても興奮してたんだ。キミの手を引つ張りながらどんどん先に進んでいたけど、キミは歩幅を合わせてくれた。面白い話もしてくれて、張り切り過ぎたボクの心配もしてくれたよね？それがさ……とつても、とつても嬉しかったんだ！

「ヒュウ、見た事が無い絶景だ。じゃあ、俺もこれに釣り合う様な話をしなくっちゃあな？」

子供だったから仕方の無い事なんだろうけど、キミのスーツの袖を引つ張って話を催促してたんだよね、あの時のボクは。今となつては、ちよつと恥ずかしいな。

「んで、そこで俺が見たのは……なあ、もう夕方になつてるけど、キミは家に帰らなくていいのかい？」

キミの話を聞きながら案内する事にすっかり夢中になつて、時間が過ぎるのがあつという間に感じたよ。正に至福の時間というヤツさ。「もうすぐ暗くなるだろうし……よつと、送っていくよ。方向を教えちゃいけないか？」



子供のボクにとって、その背中はとても大きくて、温かったんだ。人の体温に触れ合うと眠つちやいそうだったけど、キミの行き先を指し示すという使命があったからね。ボクなりに頑張らせてもらったよ。でもさ、整備もされていけない自然の道を、ほぼ無振動で移動するって、凄い事だよな？ほんの少しの揺れがさ、丁度眠りを誘う気持ちよさだったんだ。

「よし、アレがキミの家、と言うより屋敷かい？まさか、良いところのお嬢様で、俺は無礼を働いたとして首を落とされたりしないよな？」

ボクはこれでも、あのシラクーザを支配していた一族の出身だからね。確かに無礼を働いた事になるかもしれないけど、あくまでそれは一族に認められた者だけ。ボクのお父さんが一族の出身だったけど、認められなくてあんな辺境に追いやられたんだ。

引き攣った笑みを浮かべるキミも面白かったけど、そんな事はないよって伝えて安心したキミも面白かったよ。思わず笑つちやうぐらいには。

「家で一緒に夕飯を食べてかないかって？……はは、遠慮しておくよ。それと、キミのご両親にも言っておいてくれないか？俺はオルランド、フィクサーをやってるってさ。」

また一緒に遊ぼうって約束をした後に、キミは暗闇に姿を消した。お父さんからフィクサーの意味を教えてもらってから理解したけど、あの時、キミはボクとの関係を終わらせようとしていたんだね。

フィクサーは、傭兵と似ている様で違う。依頼を受けて報酬を受け取るのは共通しているけど、フィクサーはスカーモールに登録した傭兵で、傭兵と比べると総じて強い。報酬さえ貰えれば本当にどんな依頼でも引き受ける。過去に一つの移動都市がフィクサーの手によって壊滅した事もあるみたいだし、本当に危険な存在だって、お父さんが言っていた。

ボクが食卓でキミの話をした時、お父さんとお母さんはボクが何かされていないかとても心配していたっけ。でも、キミと過ごした事を語っていく内に、二人とも微笑ましい目でボクを見てきたよ。今まで見た事が無いぐらい、良い笑顔だったんだってさ。

お父さんからフィクサーについて説明を受けた後、また会えたら家に連れて来ても良いって許可を貰えた。

……お父さんが一族から認められなかった理由はコレだったんだ。お父さんは強かったんだけど、それと同じくらい優しかった。人を殺す事がどうしても出来なかったんだってさ。ボクの一族は相当後ろめたい事をやっているみたいだから、そんな善人はいらなかったみたいだね。

それから何ヶ月か経って、ボクは少し遠くに遊びに行っただ。したら、またキミに会えたんだよんだ！思わず後ろから飛び付いたけど、キミはびっくりしながらも受け止めてくれたよね。

キミは申し訳なさそうな態度でボクにお菓子の箱を渡して来たけど、アレってさ、迷惑をかけたからって意味だったんだよね？

最初はよく分からなかったけど、何故か嫌だったんだ。だから無理矢理キミを家まで連れて行ったんだよ。慌てた様にボクに対して怖くないのかって聞いてきたけど、ボクは友だちを怖いとは思わないって言ったんだ。その表情は仮面に隠れて分からなかったけど、きつとぽかんとしたと思うんだ。

「……俺の本当の名前はローランだ。オルランドじゃない。騙して、ゴメンな。」

一緒に歩いていると、ぽつぽつとローランは自分の事を語り始めたんだ。こうして初めて、ローランという名前を知ったよ。

にしても、ローランかあ……確かカジミエーシュ辺りの名前だった気がするなあ。でも、ローランはシラクアザの出身だって言ってたんだ。それじゃあ、もしかしてって思ったけど……ローランはやっぱりループスだった。ボクと同じだ。それに、独り狼の気配がしたけど、当時のボクは聞く勇気がなかったんだ。

そうこうしている内に、屋敷の前に立っていた。ボクがローランの袖を掴んで、ローランは意を決した様にノックした。

お父さんとお母さんが出てきて、暖かい空気を出迎えてくれた。ローランは照れ臭そうにお菓子の箱を渡してから、お父さんとお母さんと何か話し合っていた。二人と握手をしてから、ローランと二人で

屋敷に入った。

一族から追放されても、少しだけなら資金面の援助はしてくれるらしい。ローランはお父さんとお母さんに案内されて、リビングのソファに座った。ボクもその隣に腰掛けた。

お父さんは???の面倒を見てくれてありがとうと言って、お母さんも同じ様な事を言っていた。ローランは少し迷ってから仮面に手を掛けたけど、結局外す事はなかったんだ。

それからはとても楽しかった。ローランを含めた四人でトランプをしたり、ローランからいつか役に立つかもしれないと戦い方を習った。……ツハハ、ローランは本当に、優しいよねツ？

それからいつもよりちよつと豪華な夕食を食べた後(この時もローランは仮面を外さなかった。気づいたらローランの皿から料理が消えていて、どうやったのと質問攻めにしたっけ。)ローランはボクの頭を撫でてから帰っていった。

それから、偶にローランはボクの元に顔を出しにきたんだ。新しい話をしてくれたり、ボクと軽い組み手をしてくれたり。ああ……ずつと、あんな暮らしを送りたかったかな……？

ローランと出会ってから、一年とちよつとが過ぎた。

お父さんの書齋で本を読みながら、次にローランが来た時に何をしようかと考えていた時だった。乱暴に玄関の扉が開く音が出て、お母さんと慌てて向かうと、そこには若干息切れしているお父さんがいた。

傷だらけのローランを抱えながら。スーツの至るところが赤黒く染まっていて、微かに胸が上下していた。誰がどう見ても重症だ。お父さんが言うには、散歩の途中で木に寄り掛かっているとところを見つけたらしい。

お父さんは急いで、かつ優しくローランをソファに寝かせた。お母さんは救急箱を取りに、ボクは、お母さんに頼まれて森に薬草を取

りにいった。日が沈んでいたけど、ループスの目は闇夜でも良く見えた。

なるべく早く、効きそうな薬草を片っ端から塗り取ってはポケットに詰めた。何度も転んだが気にも留めなかった。ローランを助けた。その一心で森の中を走り回った。

その日は一日中曇りで、当然月明かりも雲に遮られていた。なのに、ボクの影がハッキリと見えた。光の当たる方向はボクの真後ろ。屋敷がある方向だった。振り返るとオレンジ色の光が揺らめいていて、ボクの驚愕に満ちた顔を照らし出した。……この時に思い浮かべた最悪の光景は、未だにボクの人生においてナンバーワンの座に居座っている。

力の限り光の方向に向かって走った。そのオレンジ色の光が揺らめくのを見て、あれは大きな物が燃えている光だと理解した。涙が両目を濡らし始めたけど、構わずに走り続けた。

燃えていたのは屋敷だった。何かが、焦げた様な嫌な匂いがする。そこから少し離れた庭に知らないループスの男が三人、血の海の中に倒れていた。周囲には折れた剣や杖が転がっている。その中心には、血や何かの肉片で汚れた長剣を握ったローランが立っていて、ぴくりとも動かずに空を見上げていた。

ボクの足音に気付いたのか、ゆっくりとローランはボクを見た。真っ黒の仮面は血を被っている。怒りと後悔が混じった掠れた声で、ローランは喋り出した。

「……………、よく聞いてくれ。」  
???????

「ああ、うあああああああああッ!!」

「…………許される事じゃないってのは分かっているけど、本当に、ゴメン。」  
「黙れッ!!返せよ…………ボクのお父さんとお母さんをッ!!返せよッ!!」

土で汚れた手で、ローランの顔面を殴り続ける。ローランはびくともしなくて、仮面には罅一つ入らなかった。鈍い痛みが走って、仮面

に新しい血がついていくけどやめなかった。

「何でだよ……お願いだよ、返してよっ……!」

「……。」

ローランはボクの屋敷に向かっていている途中で、ループスの集団に襲われたと言った。恐らく、仕事に困って追い剥ぎになった傭兵崩れらしい。

既に周囲を囲まれていて、装備こそボロボロだけど、その雰囲気は歴戦の猛者。肌突き刺さる殺気を感じ取ったローランは、大人数相手に奮闘した。

残り三人といったところまで戦ったが、限界を感じて逃走する事を選んだ。全速力で逃げ続けたけど、相手は付かず離れずの距離で追跡してきていた。飛び掛かる炎のアーツを避けながら、ローランは必死に逃げていた。

そして、暗闇に隠れた木の根に足を取られた。急斜面だった事もあって長い距離を勢いよく転げ落ち、木の根元に激突した。気力を振り絞って立ち上がったけど、全身を容赦なく襲う痛みで気を失った。……そこを、偶々通りかかったお父さんが発見したらしい。

気がつくと屋敷のソファアに横たわっていて、体を見ると、ある程度の治療を受けていた。顔を横に向けると、お父さんとお母さんが倒れていて、杖を持った男の一人が屋敷に火を放っていた。目の前に立った男が勢いよくマチェエテを振り上げて……ローランは、本気でキレた、と言っていた。

「全部、全部俺の所為なんだ。キミには、俺に好きな事をする権利がある。」

「うるさいんだよ……こんなの、訳分かんないって言うのに、それでも、それでももツ!!」

ローランを殴る勢いが、ボクの意味に反して衰えていった。

「ローランはッ、悪くない。悪くないじゃないかッ……うつ、うつ

……

「……?」

ローランはボクの顔をスーツの汚れていない部分で拭って、優しく

抱きしめてくれた。直ぐに涙や鼻水でぐちゃぐちゃになったけど、ローランはボクの背中を撫でるだけだった。

本当の幸せは、予想外の事で呆気なく崩れ去る。この先、絶対に忘れる事が無い大き過ぎる教訓だ。

眩しさを感じて目を覚ますと、木々の影から柔らかい光が差し込んでいた。少し首を動かすと、すっかり見慣れた仮面を着けたローランが腕を組んでいた。ボクはローランの膝の上で一夜を過ごしたらしい。

目を擦っていると、ローランの方もボクが起きた事に気付いたらしい。ローランはおはようと声を発した。ボクもおはようと返す。ボクはローランの事を憎めなかった。多分、憎んでいたら、憎悪に任せて罵倒すれば、ボクの気持ちはもつと楽だった筈だ。でも、出来なかった。あんなに優しくかったローランをボクは知っているから。

ローランに連れられて歩き、森を出た。そこには屋敷だったモノが散乱していた。全てが黒焦げになっていて、完全に焼け落ちている。それは三人の男の死体も同じだ。あの後、ローランが燃え盛る屋敷に放り込んだと言っていた。

かつてリビングだったところまで来ていた。ローランが瓦礫をどかしている間に周囲を眺めるけど、思い出の品と呼べる物は何一つとして残っていないかった。

ローランが声を掛けたから視線を向けると、二人分の焼死体が横たわっていた。……お父さんと、お母さんだ。

ボクは、大声で泣き散らした。殺してやりたいぐらい、澄み渡った青空だった。

あれから二年程、ボクはローランと行動を共にした。強くなる為に必死で剣を振るって、沢山の人を殺した。ローランが例の傭兵崩れが所属している組織を特定して、そこに襲撃を仕掛けたりもした。血濡れても尚笑いが止まらなかったボクを、ローランは悲しそうな声で慰めてくれた。

ローランがいない時に殺戮を繰り返していると、一族から召集された。ボクを、正式に一族のループスとして認めてくれると言っていた。……本当にどうでもよかった。今更、何なんだよ。

一族の屋敷から出て、気まぐれで突っ掛かって来た男達を惨殺して、拠点にしていた廃墟に帰ってくると、ローランがそれなりに大きな包みを二つ抱えて待っていた。

包みを開けると、そこにあつたのは奇妙な……時計みたいな刃物がついた双剣だった。ローランが言うには、一族が経営している工房で作ってもらったらしい。とても扱い易かった。

お別れだと、ローランは言った。何度も謝罪の言葉を口にして、いつでも俺を殺しに来て良いと宣って、ボクに背を向けて出ていった。「フィクサーには、絶対になるなよ。……俺みたいな、惨めでクソつたれな負け犬になるからな。」

……もしかしてだけど、ボクがそれで……キミに復讐しようって思うと考えているのかい？確かに殺し合いたいって思う気持ちはあるけど……本当に殺したい訳じゃないし、それを言うならボクだって負け犬だし、キミと同じだ。

直ぐに走って追いかけた。ローランは足音に反応して此方に向いた。何かを言いたいの、言葉が出ないボクを見て、ローランは立膝を付いて視線を合わせた。

「ごめんな。……さようなら、俺は、もうキミと一緒にいてはいけな  
んだ。」

ローランは初めて仮面を外した。街ですれ違えば、十秒で忘れてしまそうな普通の顔だ。……目に涙を溜めて、悲痛に顔を歪めていなければ。

こうしてボクとローランは別れた。……でもさ、キミがどう思っているのかは知らないけど、ボクはまたキミと会いたいんだよ？一緒に話して、散歩して、さ。

一番傷付いているのはローランじゃないか。奈落の底に墮ちようよ。最底辺で傷を舐め合おうよ。

ボク達独り狼も、二人いれば独りじゃないだろう？

## 青の便利屋

背中から感じる圧力で、自身が今横たわっている事が分かる。コンクリートの様な硬い地面ではなく、何かしらの柔らかいモノの上らしい。

目を開けられる様になるまで、もう少しだけ時間がかかる。一体何処の何の上にいるのだろうか？草原？安っぽいホテルのベッド？それとも死体の山？……鼻につく悪臭は感じられないから、流石に死体はないだろう。

じゃあ、本当に何処なんだろうか。記憶を辿ってみよう。Wとチェルノボーグに向かい、そこでロドスとの戦闘に巻き込まれ、スカジと対峙し、そこに横槍が入って……。

そこから完全に記憶が途切れている。まさか、気絶したところをロドスに回収された？だとしたら最悪としか言いようがない。彼処のオペレーターは何人も殺して来たんだし、何かしらの痛い目に遭うのは火を見るよりも明らかだ。

ひよつとして、自分は拷問台にでも縛り付けられているんだろうか。だが、手足を拘束する様な物は付けられていない。本当に、此処は何処なんだ？さっさと目を開けよう。そうすれば、取り敢えずは何か分かる。

もう少しの間こうしていたいと訴える意思に勝利し、ゆっくりと目を開ける。見えた光景は灰色で、そこから現在地が室内だと判明し――

「……づあぁッ!？」

急に景色が回転し、恐らく床である場所に体を打ち付けられる。僅かに揺れる脳に鞭を打ち、より意識を覚醒させる。

「……Wかよ。なあ、何も蹴り起こす事ないだろ？」

「此処は私の拠点なのよ？いつまでソファアを占領しているつもりなのかしら。」

先程まで寝ていたであろうソファアの、背もたれから顔だけを覗かせているWがいた。



乱れていると予測出来る頭髪を整えようと、左右の腕を動かすが、左の前腕に痛みが走る。裂かれたスーツの下に巻かれた中央が赤く染まった包帯を見て、ローランは若干申し訳なさそうな顔でWを見た。

「……もしかしてなんだけど。俺、またお前に迷惑掛けたのか？」

「ふーん、分かってるじゃないの。」

ジト目のWから送られる視線は実に痛かった。

「——で、そこで私が閃光弾を投げ入れたワケ。あのままじゃ、どうせロドスの連中を怒り任せに殺し尽くしてたでしょ？それは私にとっても困る事だし、そろそろローランも冷静になるスキルを習得したらどうかしら。」

「あー、マジか。……ヤバいな俺。控えめに言っつて、お前の足引っ張ってるだけじゃねえか？どうすりや良いんだよ……？」

Wから事の顛末を聞かされ、ローランは自己嫌悪していた。誰だつて相手の迷惑になる様な事ばかりしていたらそうなるだろう。しかも、ローランの場合はその相方がW。……一応、女性だ。サルカズと言えど、気絶した男一人を結構な距離運ばせるなんてクズ野郎もいところである。

負傷した腕を気にしながら、ローランはWから受け取ったミネラルウォーターのペットボトルに口をつけていた。コンクリートの床にカーペットが敷かれた上でローランは胡座をかき、Wはソファアで寛ぎながら爪を磨いていた。こうしてみると、意外と女性らしいところが発見出来るものである。何故かWと目があったので、ローランは即座に目を逸らした。

ローランが運ばれて来たのは、Wが時折潜伏する為に使う拠点の一つらしい。どうもリターニアが保有する移動都市、ウォルモンドにある一軒家を買収したらしく、ローランとWはその地下室にいるらしい。チエルノボーグから脱出した後、偶然近くを通りかかった天災トランスポーターが運転するトラックに乗せて貰ったとの事だ。

ローランは焦りを覚えた。幾ら何でも迷惑を掛け過ぎている。そろそろ爆弾ベストを着させられて突撃しろと言われてもおかしくない。で、フロストノヴァはどうなったんだ？ロドスはどうした？」

「フロストノヴァはまだチエルノボーグにいるわ。ロドスと近衛局が私の横槍を切欠に撤退してつたみたい。……アンタ、爆弾って作れるかしら？」

「は？爆弾？……まあ、そこまで複雑じゃなければ作れるけど。タイマーから作れとか言われたら無理だけだな？でも、一応爆薬の調合とかなら出来るぜ。……おい、何驚いてんだよ。」

「フィクサーって何でも出来なきゃやってけないのかしら。……ま、別にいいわ。だったらそれを飲み終わったらテーブルに着いて。アンタの為にトラップとか色々使っちゃったのよ。」

ソファアの脇から工具箱を持ち上げたWが嘆いてから、親指で背後のテーブルを指さした。裸電球で照らされたテーブル上には、火薬やカラフルなコード、その他諸々の危険物が置かれている。一瞬、ローランは遠回しに自爆しろと言われていたのかと疑ったが、Wの様子から違うと判断すると、残った水を飲み干して急いでWの後を追った。

「はい。説明書渡せば分かるでしょ？私はコレを作るから、少しでも揺らしたら……パアン！かもね？」

「お前、悪ふざけはマジでやめろよ？いや、流石にお前がやるとは思わないけど……俺さ、ほぼ独学でやってきたんだ。作業台ごと吹き飛ばすのはもう御免だぞ……。」

過去の事故を思い出し、背筋に冷や汗が伝うのを感じたローランは、説明書を穴が空く程睨んでから作業を始めた。プラスチック爆弾の形を整え、既に完成済みの信管やコード、タイマーを取り付けていく。

こういうタイプの爆弾はまず暴発しないと理解しているが、怖い物は怖い。目を細めて慎重に指を動かしていく。取り敢えず一つを完成させ、次に取り掛かろうとしたが、Wの方が気になったのでチラッと見てみた。

(……え？アレ暴発したら全部俺に来るよな。ヤバくね？)

Wは対人地雷の作成途中だった。殆ど作り終えているらしく、現在はセンサーを取り付ける為にコードを繋いでいる様だった。……しかし、そのセンサーの照射先と地雷の爆発する方向が完全にローランを向いているのである。仮に起爆する様な事があれば、何百という鉄球がローランの肉体を破壊するだろう。

見るも無残な肉塊となった未来の自身に戦慄していると、またしてもWと目があった。……本当にやめてほしい。頼むからわざとらしくセンサーを俺に向けないでくれ。

火薬のボトルに手を伸ばしながら、ローランは唾を飲み込んで祈ることしか出来なかった。

「ふう、こんなモノかしら。……何身構えちやってんのよ。もう終わっていいわよ?」

「……急に立ち上がんなよ。軽く鳥肌立ったぞ?」

「ふふつ、可愛らしく怯えちやって。……調合の様子を見てたけど、中々良かったと言っておこうかしら。今度源石爆弾の作り方でも教えてあげようかしら。」

「源石爆弾……あー、うん。その時はよろしく頼むぜ。」

完成品や工具を二人で片付けて、Wが解凍した冷凍ピザを食べ始めた。壁に掛かっている時計の短針はすでに五時を回っており、少し早めの夕食である。

「ローラン。暫くしたらあなたは龍門の郊外に向かいなさい。そこでクラウンスレイヤーが率いる部隊に合流して。」

「おいおい、また龍門相手にちよっかい掛けんのかよ?二回目ともなると、鼠王が黙ってなさそうなんだけどなあ……で、Wはどう動くんだ?」

「私は一旦チエルノボーグに戻るわ。ちよつと野暮用が出来たの。」

「え、俺一人かよ……まあ、いいか。そうと決まれば早速、武器の手入れなり何なりをしなくちゃな?」

「それ・と。ローランはまーだ救急キットの一つも携帯してないの?」

彼処に置いてあるウエストポーチあげるから、一応持つときなさい。」  
「……あ、そう言えば俺、基本的に武器以外何も携帯してなかったな。となると、やっぱりこの包帯もWのか。……ありがとう。」

おずおずと黒の下地に赤のラインが入ったウエストポーチを持ってきて中身を確認するローラン。中には包帯や消毒液、鎮痛剤等の一般的な物から、長めのピンセットに衣服を断ち切る為の鋏、医療用ホチキスから針と縫合用の糸まで入っていた。ローランはWには足を向けて寝ないと決意した。

そこからピザを食べ終え、ローランは武器の点検を、Wは再び爆弾の生産に取り掛かっていた。二人とも声を発さず、ただ黙々と各々の作業を続けていく。

一時間が経過したあたりで、それは鳴った。

「……W。お前、何かトランスポーターに運搬を依頼したのか？呼び鈴が鳴ったぞ。」

「いえ、何も頼んでいないし、頼まれる様な奴もいないわ。……どうやって此処を突き止めたのかしら。」

「居留守を使うか？」

「中に引き摺り込んで、情報を搾り取れるだけ搾り取る……駄目ね。仲間がいる可能性を考慮して、目に付いた奴だけ殺して逃げるしかない、か。」

武装を終えたWが玄関の直ぐ側に陣取り、先程作り終えたばかりの対人地雷を仕掛ける。ローランは何時でも外に強襲を仕掛けられるように、外から見られないように気を付けながら窓の近くに待機している。

もう一度呼び鈴が鳴った。

「……はあい。一体何の用かしら？手紙ならポストに入れておいて欲しいのだけけど。」

『ん？いや、別に僕は郵便の配達員じゃないよ。人探ししてるんだ……ローランはいるかい？』

扉越しに聞こえた声に反応して、Wがローランを怪訝そうな目で見ると、ローランも自身が名指しで呼ばれた事に困惑しており、Wに対し

て首を横に振っている。

誰がローランを尋ねに来たのか。意を決したローランは、ゆっくりと窓から来訪者の姿を確認して――

「……W、設置したトラップを解除してくれ。俺の知り合いだ。」

ローランに気付いた玄関前に立つ男が、気さくな笑みを浮かべながらローランに手を振っていた。

設置した地雷の回収を終えたWが玄関の扉を開けると、そこにいたのはローランと同じくらいの身長の子供だった。

ローランと似たような黒いスーツを着てその上からロングコートを羽織っており、どちらにも金の装飾があらわれている。胸元から伸びる金鎖は、懐中時計を繋ぐ物だろうか。スーツと同じく金の装飾が入った黒い中折れ帽を目深に被り、片手には近未来的なトランクを携えている。何処か怪しげな茶髪の男だ。

「久しぶりだね、ローラン。みんなを代表して、君の様子を見に来たよ。」

「おう、カズデル以来か？お前も元気そうで何よりだ。」

人の良い笑顔で男を出迎えるローランとは対照的に、Wの表情は若干の驚愕に染まっていた。

「ねえローラン。あなた、青の便利屋と知り合いなの？」

「青の便利屋？……あ、あー！確かそんな名前だったよなお前。ゴメン、ちよつと忘れかけてた。」

「それはちよつと酷くないかい？でも、そうだね。青の便利屋だと一々呼びづらいだろうし、取り敢えずペイルと呼んでよ。」

地下室に移動しながらそんな事を話すローランとペイル。Wはローランが特色フィクサーであるが故にペイルと知り合いなのは納得しているが、どうやって拠点を特定したのかが不思議でならなかった。細心の注意を払って地下のインフラ整備用通路を通ったというのに、本当にフィクサーは滅茶苦茶な連中ばかりである。

「お前もそろそろ、スカーモールが特色に昇進させてくれるんじゃない

いか？便利屋内じゃトップだったよな。」

「今は紺色がいるし、何よりも青い残響が居座ってるじゃないか。それにだね、僕達便利屋は基本的に道具頼りなんだ。身体能力に物を言わせられるようにならないと、特色に上がるのは無理だね。」

そう言つてペイルはトランクをぶらぶらさせる。ローランは顔を顰めたが、それも一瞬だけだった。何事も無かったかのように三人でテーブルに着く。

「それで、青の便利屋様は何故こんなところにいらっしやったのかしら？」

「だからペイルって呼んでくれればいいし、ちよつと嫌味つたらしいぞ君……。最初に言つた通りさ。ローランの様子を見に来ただけ。君もローランと行動を共にしているのなら、僕の言っている意味が分かるだろ？」

Wは、ローランとペイルがそれなりに深い関係である事を察した。ローランの様子を見に来たと言うのは、要するにローランの精神が不安定な状態に陥つていないかどうかの確認に来たのだろう。それと、ペイルの代表で来たという言葉にも引つ掛かる。まさか、ローランは何人もの便利屋と関係があるのだろうか。

「……その様子を見る限りじゃ、今は大丈夫そうだね。取り敢えず一安心と言つたところかな。それじゃあローラン。また例のヤツが送られて来てるから、一緒に見ようか。」

「またかよ……。俺は義体にするつもりは無いつて、何回言つたら分かるんだアイツは。」

ペイルがテーブルに置いたトランクを開け、中から取り出した数枚の書類をローランに見せる。Wも見るか？とローランに誘われたので、一緒に書類に目を通した。

「まずはコレ。ローランの部分的な義体化案だよ。」

テーブルに置かれた書類。最初に目に付くのは、なんとと言っても丁寧にスケッチされた……。恐らく、部分的に義体化したローランだろう。

義体はテラでは然程珍しい物ではない。最近では本来の肉体より

も高性能な義体が登場しており、四肢のいずれかを欠損した傭兵が義体を装着し、以前よりも強くなったという話をローランもWも耳に挟んだ事がある

それでも、完成図に描かれている部分的に義体化したローランは、この場の全員が頭上に？を掲げる程見慣れないモノだった。

「うーん、顔の部分どうなってるんだらうね？」

「これ、注射器か？一体どんなヤベー薬物を俺に注入するつもりなんだよ……。」

「もはや面影がスーツぐらいしかないわね……。」

最初に目に映り込むのが右腕である。肩部から指先にかけて全て義体に換装されており、指が存在した部分には四本の鋭い爪が装着されている。所々露出しているコードがいかにも雰囲気醸し出し、正に義体といった風だ。続いて頭部も義体に換装されているのだが、完全に人の顔ではなくなっている。丁度錆び始めた鉄の様な色合いをしており、至る所に僅かな隙間が空いている。以外と仮面だったりするのかもしれない。だが、そんな淡い期待は直ぐに打ち砕かれた。注射器だ。それなりの大きさを誇る注射器が、右上腕中央と右肩の側面辺りに一つずつ、そして後頭部にもう一つの計三つの注射器が刺さっている。中に封入された液体は橙、青、黄緑とどれも蛍光色に輝いている。

注射器が後頭部に刺さっているところから、どうやら頭部も義体に換装されるらしい。

「マジで中身何なんだよコレ……てか、頭部が異様すぎるわ！」

「こんな形で都市でも出歩いたら、まず間違い無く捕まるだらうね。そもそも、頭部の義体化っていうのはまだ不可能なんだよ……まあ、アイツと一部の工房なら可能なんだけど。」

「私からしたら、あなたの腑抜けた面を拝まなくてよくなるからやってみたら？」

相変わらずWの言葉にはキレがある。自身の顔を両手で触って確認するローランを哀れに思いつつ、ペイルは一旦先程の書類をしまい、違う書類をトランクから取り出した。

「はい、今回はコレで最後だね。全身を義体化した案みたいだよ……僕も初めて見るけど、何と言うか、こう……度し難いよね。」

ペイルの発言に、ローランとWの二人が釣られた様にズイと顔を近づける。

スケッチされていたのは、全身を黒い装備で固めた男だった。黒いコートを身に付けている。一見、脚部や腕部にそれほど義体らしさは見られない。強いて言うならば、左右の前腕に角張った手甲の様な物が装着されているぐらいだろう。

だが、頭部は他とは異なつた。耳の部分が集音性に優れていそうな形になっていたり、額よりも少し上の部分に取っ手の様な物が付いている。何処と無くヘルメットに見えるソレは、顔面の中央部から圧倒的な存在感を放っていた。

恐らく、ソレはヘルメットというならばシールドに相当するのだろうが、普通だつたら横向きに付いているところを、何故か縦に一本、一直線に付いていた。しかも、怪しげに紫色の光を放っている。

スケッチされている人物が取っている、左右に手を広げるポーズは実に堂に入っており、今にでも「おやおや」と言い出しそうな――

「……その、なんだろうな。さっきのに比べればマシな筈なんだけど、何処か外道染みてるんだよな。」

「こつちの尊厳なんか無視してきそうな見た目ね。」

「凄いやわれようだね。まあ、僕も上に同じくだけど。……無線機持ってるんだ。感想くれって言ってたし、繋ぐよ。」

書類をトランクに仕舞ったペイルが、代わりに無線機を取り出した。

「ローランは、誰がコレのスケッチをしたか知ってるの？っていうか、何気に流してたけど頭部の義体化って言ってた!?!」

「うん？ああ……Wは、赤の便利屋って知ってるか？」

「……名前だけね。恐ろしく強いとか。まさか、赤の便利屋が描いて送ってきたの？」

「うん。でだ、ビツクリするなよ……ソイツ、脳とかの重要な器官以外、全部義体なんだ。」



「はあ？」

ありえないと言いたげな顔をするW。それでも、ローランが嘘を言っている様には見えない。至って真面目な目だ。そんな二人の間に無線機を握った手が突っ込まれる。

「どうやら繋がったみたいだな？……あー、もしもし？」

『ローランカ！俺ガ考エタ義体案ハドウダツタ？才前モキツト気ニ入ツテクレタダロウ！』

「それだけどな……ゴメン、無理。」

『アアーツ!?一体何が駄目ダト言ウンダ!?コノフォルム!コノ色合イ!コノ実用性!ドレヲ取ツテモ完璧トシカ言エナイダロ!!』

無線機越しに聞こえてきたのは、到底人間が出せる声では無かった。AIが発する様な機械的な合成音だ。しかし、無線機で捲し立てる人物はボイスチェンジャーを使っている訳では無い。正真正銘、そのまま出している声である。

「あのな、両方とも見た目が怪し過ぎるんだよ。日常に紛れ込んでられるか、こんな物騒なヤツ。」

『ム。イヤ、ソウカ……コノ体デイル事ニ慣レテイルカラナ。ソツチノ面ヲアマリ考エテナカツタゾ。クソ、マタ失敗カ……アリガトウローラン。ソレト、元氣ガ無クナツタラ何時デモ訪ネテクルトイイ。即座ニ義体ニ換装シテヤロウ!』

義体の事になるとハッスルし始める同業者の顔を思い浮かべて、ローランは頬を緩ませる。今頃、その赤いモノアイを暴れに暴れさせているだろう。

「……コレが赤の便利屋って、ロボットって言われた方がまだ信じられるわ。本当に元人間なの？」

「ああ、工房の連中と結託して自分の肉体を魔改造したんだとき。」

ローランが紙に描いた赤の便利屋の姿を見て、Wはまたしても驚愕していた。そんなやり取りを続けていると、何時の間にかマグカップ

でコーヒーを飲んでいたペイルが話し掛けてきた。

「ローランは、レユニオンの……幹部だっけ？次は何をするんだい？」  
「コレって言っているのかW？……あ、いいのか？じゃあ、言うぜ。なんでも、あの龍門に結構な規模で襲撃をかけるらしい。勿論俺も参加する……ああ、そろそろ向かわなくちやな？」

椅子から立ち上がるローランを尻目に、ペイルは少しの間考える素振りを取ると、あろうことか中身の残っているマグカップをトランクに入れて立ち上がった。

「その襲撃、僕も参加出来るかな？ちよつと近衛局に用があるんだ。丁度、関係のある依頼を受けたところでね。」

「出来ない事も無いんじゃない？傭兵とかも紛れ込んでるし、クラウンスレイヤーなら青の便利屋も知ってるでしょうしね。多分、実力的に十分OKが出ると思うわ。」

Wのその言葉を聞くや否や、ペイルはトランクにアーツを詰め始めた。

「ローラン、送っていいこうか？どうせなら一緒に行こう。」

「お、ありがとよ。」

準備を終えたローランがペイルの側に立つ。アーツを詰め始めたペイルを見て、Wはこれから何が起るのか予測する事が出来なかった。

天井に当たらないように、ペイルがトランクを頭上に放り投げる。開いた状態で投げられたトランクは、重力に従って落下……しなかった。

開いた面を下に向けたまま、空中で静止したのである。その様子をローランは興味深気に眺め、ペイルは帽子の縁に手を当てている。トランクはブルブルと震え始め、それと比例する様に大きくなっていく。

ある程度の大きさになった途端、トランクは一気に降下して二人を飲み込んだ。地面に着く直前にパタンと蓋が閉じ、今度は急速に縮んでいった。それこそ、肉眼では完全に見えなくなるぐらいに小さく。いや、既に存在していないのかもしれない。

そして残されたのは、呆氣に取られたWだけである。Wは考えを改めた。特色の次に来る実力者なのだ。便利屋だつて十分に化け物なのだ、と。

コーヒーって飲みまくと、歯が黄色くなるらしいぞ？

あつという間にトランクの中に飲み込まれたペイルとローラン。そこで待ち受けているのは、数々の奇妙な光景だった。

真つ暗闇の中だったり、水色の触手が蠢く薄気味悪い空間だったり、宇宙空間に似た何処かだったりを高速で移動、もとい落下していく。

現在二人は、ペイルがトランクに施したアーツや名状し難いやばいモノの効果により、次元の狭間を移動していた。初めてコレを利用したローランは暫くの間放心状態にあったりしたが、今ではもう慣れっこである。ローランは年甲斐も無く飛ぶ様に移り変わる景色に目を見張り、ペイルはコート裾を風にはためかせ、中折れ帽が飛んでいかないように手で押さええている。正に空間移動者に案内される旅行者と言った感じだ。

……完全に余談だが、この間、二人はがっしり手を握り合っていたりする。もしもこの空間で離れ離れになればそれはもう大変な事になるので、当然と言えば当然なのだが、アラサーの青年二人が手を絡めているとなると、なんともアレな光景である。ローランの顔は見る角度によってはそこそこのイケメンだし、ペイルは帽子を目深に被っているのでも正確には分からないが、それでも覗く口元や顎の形を見るに普通にイケメンだろう。なまじか絵になるのが本当に困る。

一分程経つと二人はさらに加速し、周囲も白い光に覆われていく。完全に真つ白になると、正面にぼつりと浮かぶトランクが現れ、此方に向かって蓋を開けた。二人は減速する事なく、そのまま突っ込んでいく。

次の瞬間にはバカンという音と共に、トランクの蓋が勢い良く開く音が鳴り、二人は空中に投げ出される。ペイルは慣れた様子で開いたトランクをキャッチして着地、ローランもペイルに続いて着地したが、若干足首があらぬ向きに曲がってしまい、暫くの間悶絶する。

少し血の気の引いた表情で、足首を回しながら立ち上がるローラン。それをくすりと笑って見届けたペイルは辺りを見渡す。曇り空の下、人気の無い寂れた裏路地。遠目に見える高層ビル群から、無事に龍門に到着する事が出来たようだ。ペイルはズボンのポケットからメモ帳を取り出し、今回引き受けた依頼の内容を再確認して、同時に取り出したペンで何かを書き込んでいく。ローランは左右の掌を開閉して、手袋の着け心地を確かめていた。ぎゅっぎゅと皮製品特有の音が聞こえる。

「……うん、龍門の第十三区っぽいぞ。近くにスラム街があつて、よく近衛局が巡回に来るんだよな。」

数年間龍門で生活してきたローランは、移動都市内の地理を誰よりもよく把握していた。それらを把握していれば、自然とそこに絡んでくる組織についてもよく分かる。かつてのフィクサー稼業では、観光客向けに都市内のガイドもやっていたぐらいだ。この店が美味いだとか、あそこの道は通らない方がいいだとか、未知の土地にやって来た人々に懇切丁寧に龍門の地理を教えていると、観光客もローランに対して色々な情報を教えてくれるのである。ローランのコミュニケーション能力は卓越していた。

「そっか、じゃあさっさと移動しよう。僕達は何処に向かえばいいのかな？」

「ああ、ちよつと待ってろ。今、クラウンスレイヤー……今回の任務で一緒になるヤツだ。ソイツに無線を繋いでるから。」

ローランはベルトに器具で取り付けていた無線機を取り外し、ボタンやつまみやらを動かしてクラウンスレイヤーに無線を繋いだ。

『ローランか。既に龍門の郊外に着いたのか？』

「ああ。今は都市内の第十三区にいる。何処で落ち合えばいい？」

『……龍門に侵入しているのか？』

「そうだ。コレに関しては、俺の方から協力者を雇ってな。ソイツの能力を使った。青の便利屋って言えば分かるか？まあ、雇ったつて言うよりは利害関係の一致だな。それでも、裏切りとかはまず無いから安心してくれ。今回の作戦に同行させても大丈夫か？」



敵時の対応を考えていると、側に置いてある無線機から技術偵察兵からの通信が入った。ローランともう一人、恐らく青の便利屋と思われる者の姿を確認したらしい。偵察を交代してすぐさま此処に連れて来るように伝え、無線機を切る。

青の便利屋。裏の界限では有名なフィクサーで、フィクサーの中でも上から二番目の序列である便利屋の一人として数えられ、その中で最強の呼び声が高い存在である。強敵の各個撃破を得意とし、ジャイアントキリング大物喰らいとして様々な所から依頼が飛んでくる殺しのプロフェツシヨナル。使用する獲物は主にダガーと拳銃。しかし、遺体によつてはダガーよりも大きく鋭利な何かに貫かれた様な跡があったり、どんなに嚴重な警戒網をも軽々と突破しては直ぐに姿を晦ますフットワークの軽さなど、得体の知れないというフィクサーの特徴が顕著に現れている便利屋でもある。

フィクサーは一級ならまだ人としての範疇に収まるが、便利屋からは化け物しか存在しないとされている。あの赤い霧が良い例だろう。既に死亡したと言われているが、彼女を知っている者達からすれば何処かで生きてそうと言われるくらいには化け物だ。彼女の最後はカズデルの内戦にて、とあるサルカズ傭兵団の大隊相手に一人で奮戦し、殲滅した後に十人程の一級フィクサーに襲われるも、これを返り討ちに。さらに襲い掛かってきた便利屋三人と相打ち……したらしい。

実は何とか生き延びている、と大半の傭兵やフィクサーは考えているが、実際のところは上記の戦闘を経て死亡している。赤い霧の死体を確認した極少数の者の内、その一人はローランだったりするが、未だにローランはその事が信じられなかった。今頃棺桶を突き破って蘇っているんじゃないかと割と本気で思ってるくらいである。現実をよく見ているローランがそう思う程、赤い霧は強かった。

クラウンスレイヤーはかつて猛威を振るった、一種の英雄と言っても過言では無い赤い霧に想いを馳せていると、自身に近づいてくる二つの気配を感じ取った。立て続けに、廃材で偽装した入口からノックする音が響く。

部下に扉を開けさせると、まず最初に入ってきたのは、居心地悪そうに早足で入ってきた偵察兵。少し怯えているらしく、クラウンスレイヤーに軽く挨拶をして直ぐに持ち場に戻っていた。

続いて姿を表したのはローランだった。相変わらぬ黒いスーツ姿だが、左の袖が一部裂けており、その下から赤く染まった包帯が見え隠れしている。恐らく、少し前のチェルノボグでのロドストの衝突で何かしらの理由で居合わせた時に負った傷だと推測した。ローランはクラウンスレイヤーの存在を認識すると、小さく手を挙げておつすと挨拶をしてきた。まるで緊張感を感じさせないフランクな態度が、クラウンスレイヤーは少し羨ましいと感じた。

ローランが横にはけ、黒いコートに中折れ帽を被った男が入ってくる。それを確認した部下が入口を塞いだところを見ると、この男が青の便利屋なのだろう。手に持った機械的なトランク以外に、これと言った装備品は見取れない。

「僕がローランの紹介でこの作戦に参加する青の便利屋だよ。僕の目的は、近衛局からあるファイル——詳細は言えないけど——を盗み出すこと。よって僕は近衛局に寄る時以外は君達と行動を共にするし、勿論君達の敵は僕の敵にもなる。万が一僕が死んでもそれは自己責任。君達から情報を搾り取るつもりも無ければ、何かにこじつけてお金を要求するつもりも無い……これでいいかな？一応、それなりの実力は持ち合わせてると自負してるよ。」

会うや否や自身が同行する理由とメリット、自身の扱い等を流れる様に喋り出した青の便利屋。余計な事は言わない辺り、実にフィクサーらしいフィクサーと言えるだろう。一見武器らしい物を持ち合わせていなかったり、コートの下にスーツを着ていたり、ローランとの共通点もそれなりに発見出来た。多分あのトランクの中に収納されているのだろうが、一体何がどれ程詰まっているのか想像すら出来なかった。

なんなら契約書でも書こうか、と提案してくる青の便利屋。流石にそこまで持ち込まれると、後で碌でもない事になりそうだったので遠慮した。



「噂にはよく聞いている。認めるのも何だが、私よりも格段に強いのだろう？ 一時的とは言えど、頼もしく思っている。今回の作戦、宜しく頼むぞ。」

「ごちらこそ、よろしく。さて、それじゃあ早速、この作戦の概要は、そして僕達はどうか動けばいいのか教えてくれないかい？」

「よし、お前達もこっちに來い。お前は部屋の外の奴等も呼んでくるんだ。……………集まったな？ では、再確認の意も込めてもう一度説明するぞ。」

煤けたコンクリートの壁には龍門について詳細に描かれた地図が貼り付けており、現在地には赤いペンで丸が描かれている。クラウドスレイヤーはその側にまで歩いていき、ローランと青の便利屋。そして集合をかけられた部下全員を一通り眺めた。

「私達に課せられた任務は、主に敵部隊の暗殺と攪乱。同時刻に動き始めるメフィストの部隊の援護が目的だ。メフィストとファウストが対処出来ない敵を始末、妨害し、そこをフロストノヴァのスノーデビル小隊が一気に叩く。味方部隊の配置は、メフィストとファウストがここ。フロストノヴァが私達に近いここだ。スノーデビルの連中はそれまで感染者の救助をするらしい。」

そう言いながら、クラウドスレイヤーはウエストポーチから取り出したペンで丸をつけ始めた。

「本来ならスリーマンセルで動きたいところだが、相手が近衛局、そしてロドスも介入してくる事を考え、部隊全員で動く事になった。決して無理はしなくていい。敵の数を減らす事よりも士気を削ぐ事に念頭を置け。もし危険だと感じたら、私がアーツで濃霧を発生させ、それに乗じて撤退する。」

そこまで言い終えたクラウドスレイヤーが、ふと、何かに気付いたようにローランと青の便利屋に首を向けた。

「私の部隊は、全員が私が発生させた霧の中で動けるよう訓練しているが、お前達はどうか？」

あらゆる状況を想定して、クラウドスレイヤーは自身の部隊共々過酷な訓練をしていたが、ローラン達が霧の中で動けるといふ保証が何

処にも無いと言う事を失念していた。

「あー、大丈夫だと思うぞ。俺は劣悪な環境で動くのには慣れてるし、視界不良なんて今更だ。」

「僕もローランに同じく。多少アレだけど、移動も戦闘も特には問題無いかな。」

彼等のハイスペックさを痛感させられるだけに終わった。心配した自分が恥ずかしい、愚かだ。クラウンスレイヤーは視界一杯に灰色の天井を映した。

「……今回は幹部のローランと便利屋が一人付いている。この二人を頼る事が多くなると思うが、油断はするなよ。私達は主にこのルートを巡回するようにして動く。状況に応じて適当に動きを変えるから、ちゃんと着いてくるように。ここも巡回ルートまでの道筋は、こうだ。」

気を取り直したクラウンスレイヤーは、何事も無かったかのように地図に線を描き込み始めた。部下のクラウンスレイヤーに対する親近感が上がった気がした。

「ん……何か質問がある奴はいるか？何も無いのなら、最後の準備に取り掛かれ。十分後にこの廃墟を出るぞ。」

その言葉と共に、隊員達は各々の準備を始める。予めほぼ全ての準備は終わらせているが、もしもの事が無きにしても非ずな為、誰もが念入りに装備をチェックしていく。一方、ローランと青の便利屋——ペイルは、ペイルがトランクから取り出したステンレスボトルで呑気にコーヒーを飲んでいた。

「おい、お前も飲まないか？集中力が上がるらしいぞ。まあ、気休め程度だけだな。」

いつの間にか取り出したカップにペイルがコーヒーを注ぎ、それをローランがクラウンスレイヤーの元に持っていく。

これといって断る理由も無かったので、クラウンスレイヤーは素直に受け取る事にした。渡されたカップは温かく、フィンガーレスグロブ越しに温度がじんわりと伝わってくる。口に含めばコーヒー特有の香りが鼻を突き抜け、口内に苦味が広がる。舌を動かして液体

を味わい、飲み込んでまた一口。そしてほうと一息。

「……にが。」

「そりゃブラックだからな。」

「結構良い豆使ってるんだよ?」

隊員達は突如和み始めた空気に動揺を隠せなかった。

## 締め付けられる真綿

最後の準備を終え、無線機から作戦開始の合図が伝えられ、遂に動き出したクラウンスレイヤー率いる精鋭部隊。常人では到底追い付けない速度で移動し、複雑に入り組む路地を駆け抜ける。遠くから響き渡る爆音に、緊張感が高まり、使命感が燃え上がる。クラウンスレイヤーとその部下はさらに身を引き締め、ローランとペイルは感覚を研ぎ澄ませる。

目標の地点に到達し、目にも止まらぬ速さで半分に分れて潜伏する。近衛局ビルから近くも遠くもない絶妙な距離をとる此処は、近衛局の動きを見て予測するには絶好のポイントだ。

部隊の半分はクラウンスレイヤーとローランが付き、もう半分はペイルが付いている。相手の規模に合わせて部隊の合流、細分化をする権限を持っているのはクラウンスレイヤーだけだが、部隊を率いるのは慣れていると宣言したペイルに、もう半分の部隊を率いる役割を与えた。

基本的にフィクサー、それも便利屋になってくると偵察、襲撃、撤退の戦闘に於けるほぼ全てが一人で完結しており、故に単独行動が当たり前だ。その為、味方との連携を苦手としている者も少なくない。

しかしペイル本人は大丈夫だと言っていたし、ローラン曰く、ペイルは便利屋以下のフィクサーを纏めて重要な作戦を遂行する……：：：言ってしまうえば引率的な役目をスカーモールから与えられる事が多いらしい。部隊を率いる素質は十二分にあり、何かしらのアクションが発生してもアイツなら対処可能だとの事なので、同じ幹部、それも数多の激戦を突破してきた黒い沈黙の言葉を聞き入れた。

早速動き出したペイル達を見届けて、クラウンスレイヤーは深呼吸をする。渡しておいた無線機から連絡も来ないし、恐らく伝えるまでもない小規模な部隊に目を付けたのだろう。便利屋なら大丈夫だという、漠然とした信用を感じていると、周囲を偵察していたローランが帰ってきており、それと同時に新しい無線機を渡された。

「俺は以前も龍門にレユニオン幹部として来たことがあるんだけど、

そこで近衛局の無線の傍受に成功してな？ちよつとその時のチャンネルなり何なりを考えてただけだよ。」

ローランは無線機の電源を入れる。聞き覚えの無い、何処かの部隊に指示を出す声流れてきた。

「やつぱり法則みたいなのがあつたんだよな。で、今回も傍受に成功した。コレやるから、適時指示を出してくれ。」

黒い沈黙は情報戦が得意だと小耳に挟んだ覚えがある。その証拠の様な物を目の前で見せつけられたクラウンスレイヤーは、ほんの僅かな無力感と、大きな感心を抱いた。こうも片手間に重要な情報源を獲得するとは、流石としか言いようがない。

信頼できる部下に頼れる同僚、全能感すら覚えてしまいそうな情報に、強力なジョーカー。熟運に恵まれているなどマスクの下で笑みを浮かべるクラウンスレイヤーを、ローランは頬を掻きながら眺めていた。やがてクラウンスレイヤーが無線機に耳を当て、鋭い視線を近衛局ビルの方に向ける。

「……近衛局は今、私達の予定通り侵入して襲撃を仕掛けてきた他部隊の対処に手間取っているらしい。大方、メフィストが操る寄生兵が効いているんだろう。それと、私達の存在がバレているという事はなさそうだな。」

「じゃあ、そろそろ俺達も動くのか？」

「ああ。ローランは、青の便利屋の方にも近衛局の無線の傍受方法を伝えてくれないか。青の便利屋の実力ならば、部隊ごと独立させて動かす事も問題無い筈だ。」

「了解だ。まあ、確かに、アイツなら近衛局ぐらいどうって事なさそうだしなあ。」

事前に渡されていた方の無線機を取り出すローラン。ペイルならば、近衛局の一般兵士程度で梃子摺る事はまず無いだろう。強いて言えば、隊長のチェン辺りとぶつかれば苦戦は免れないだろうが、流石に負けるとはちよつと想像出来ない。ペイルの操るアーツ、もとい武器は非常に強力だ。掠るだけで致命傷となりうるアレは、近衛局にとって大きな脅威となるだろう。もつとも、近衛局はまだペイル、ひ

いてはクラウンスレイヤーの部隊の存在を認識していない様だが。

「……うし、終わったぞ。でだ、クラウンスレイヤー。お前は動くつもりだ？」

「作戦にそこまでの変更は無い。そして、奴らの動きはこうして筒抜けだ。若干孤立気味の部隊を狙っていいこう。」

クラウンスレイヤーが手にナイフを握り直し、視線を近衛局ビルの方角に向けた。周辺のビルよりも一回り大きなビルだ。その一帯の所々から黒煙が立ち昇っており、人工的な摩天楼に薄暗い空も相まって不気味な雰囲気醸し出している。丁度メフィストとファウストが、現在内部を制圧して占領中だ。会話の流れから察するに、最初の血液をぶち撒ける哀れな犠牲者達はあの辺りにいるらしい。

先程までの親しみやすい表情を打ち消したローランを皮切りに、他の部隊員達もブーツの靴紐を結び直す、関節の骨を鳴らす等の、ルーティンの様な行動を始める。如何なる事態においても、自身の精神を統一させる手段は必須だ。その大切さは、主に戦闘行為などで十分に実感出来る。

隠密行動や暗殺、ゲリラ戦に長けたクラウンス<sup>王冠</sup>スレイヤー<sup>狩り</sup>に、無慈悲に立ち塞がるモノ全てを塵殺してきた<sup>黒い沈黙</sup>ローラン。そしてレユニオンにとってもイレギュラーな、弱者も強者も平等に刈り取る<sup>P A L E</sup>青の便利屋。近衛局は、彼等の真の恐ろしさをまだ知らなかった。

「クソっ、あいつらは一体何なんだ？」

近衛局の数ある重装部隊の内の一つ、その部隊は想定外の損害を出していた為、撤退を余儀なくされていた。

突如として流れ込んできたレユニオンの兵士達。しかし、そのどれもが正気を失っており、B級映画のゾンビの様に倒しても倒しても立ち上がってくる。故に数を減らす事が出来ず、十分な戦闘配備が完了するまで前線を維持していたこの部隊は多くの負傷者を出しており、

小数の他部隊員を護衛として同伴させながら一旦戦線を離脱していた。

数々の攻撃を防ぎ、捌いてきた代償にズキズキと痛む左腕に歯を食いしばりながら、その隊の隊長は考える。勿論、先程相手をしてきたレユニオンの兵士達についてだ。

体の至るところから源石結晶を露出させ、恐怖が存在していないかの様に突撃を繰り返し、痛みに怯む素振りすら見せずに攻撃する。はつきり言つて異常だ。人間としての大切な機能が悉く欠如したアレらは、立派な人外と言えるだろう。

薄暗い路地裏から突然湧いて出たかのように出現し、奇怪な雄叫びを上げながら向かってきたアレらを思い出すだけで身震いがする。不安定に体を左右に揺らし、僅かに光る虚な目から尾を引く様に見える光の群。まだ幼い子供が見ればトラウマになつてもおかしくない光景だった。実際、戦闘経験に乏しい新人の何人かは、顔面から血の気が失せていた。

あんな悪夢の様な戦闘を終えた身ならば、愚痴を吐いても許されるだろう。それ程、先程まで彼らが戦っていた相手は恐ろしかった。もはや対人戦ですらなく、未知の凶暴な生物との邂逅と言つた方がしつくりくると言える。

部隊員達の消耗具合を考えれば、少なくとも今日一日は再出動する事も無いだろう。あの化け物共については、既に無線で味方に伝えてある。後はきつと上手くやつてくれる筈だ。そう考えると同時にどつと疲れが押し寄せ、此処が前線からは離れているが、それでも戦場であるにも関わらずに座り込んでしまいそうになる。

その甘つたるい心構えは、パアンという聞き慣れない乾いた音が響いた直後、すぐ近くを歩いていた槍を装備した護衛の頭が弾け飛んだと同時に消し飛んだ。

その音を合図に、四方八方から同じ様な格好をした者達が躍り出る。付けている腕章から、それがレユニオンの別働隊である事は即座に理解出来た。それぞれの武器を構え、地を這う様にして接近してくる相手に対し、此方は疲れ切っている事もあり、陣形を組む暇もなく

乱戦に持ち込まれる。

誰が見ても分かる程統率されたその動きは、この襲撃者達が訓練された精銳であり、元々コレが目的で潜伏していたという事を連想させる。まさか、前線から離れた、それも本部を失った味方が一時的に待機している方向に敵がいるとは誰も思わなかったのだ。

隊員の奮戦虚しく、次々と味方が倒れていく。逆に此方が攻撃を加えれば、少し掠った程度で直ぐに撤退していく。その圧倒的に非効率な行動が繰り返され、襲撃者達が全員去った後には、残っていた部隊員の半数以上が物言わぬ屍となっていた。

別行動をとっている敵の存在をいち早く上に連絡しようと隊長は無線機を取り出すが、その無線機は再び響いた乾いた音によって破壊された。吹き飛ばされた無線機はパーツをばら撒きながら通りの傍へと消えていく。

反射的に音が聞こえた方向に目を向ければ、そこには黒い中折れ帽にコートを着た男が立っていた。片手にトランクを持っており、もう片方の手を此方に向けている。その手には見慣れない武器——ラテラーノ銃の中でも拳銃と呼ばれる物が握られており、立ち昇る硝煙から、音の発生源がそこだと判明する。

しかし、隊長は今、自分が撃たれたとか、隊員達の安全だとかは、どうでも良くなっていた。いや、目の前の事が衝撃的過ぎて、その他の事など一時的に忘却の彼方に飛んで行った。本来、第一に考えるべきである隊員達の事が些細な事だと認識してしまう程、姿を現した男は有名だった。それも最悪な意味で。

何でお前が此処にいる。そんな言葉が喉元から出掛かった時、目の前に立つ男は口を開いた。

「ん？どうして僕がこんな所にいるか理解出来ないって顔だね。答えてあげよう。受けた依頼を遂行する為だよ。僕達フィクサーがこうして姿を現す時なんて、それ以外にないからね。」

依頼を遂行する為。たったそれだけの言葉で、この場にいる近衛局の兵士の全員が絶望のどん底に叩き落とされる。だって、目の前にいる男はフィクサーの中でも上位の便利屋で、それもかなり有名で、そ



んなヤツが受ける依頼なんて……。

「僕も有名になったものだね？ いやあ、まだ駆け出しだった時には夢にすら見なかったね。こうして姿も知れ渡ってきた事だし、そろそろイメチェンでもしようかな？」

「ああ、勿論、君達を一人残らず抹殺してからだけどね？ どんな服が似合うのか、それは後でたっぷり考えよう。」

そう言った瞬間に、目の前に立つ男——青の便利屋は、片手に持っていたトランクを此方に向けた。突如行われた、見方によっては防衛行動とも取れるその行為に、近衛局の兵士達は動けなかった。その一瞬が、彼らの生命を絶つに繋がる。

トランクが開き、中から溢れ出てきたのは、蛍光色に光る水色の触手だった。それらがずるりと這い出て、先端を蛇の舌の様にちろちろと動く。

触手が出てきただけ。しかし、その触手が問題だった。見る者の精神を削り取り、狂気に陥れる名状しがたい異形。触手達の先端が一斉に此方向き……ありえない勢いで向かって来た。

触手の一本一本が隊員達の胴体を貫き、持ち上げる。両足が地を離れ、全員が青の便利屋を見下ろす体勢となった。貫かれた箇所からは止め処なく血が溢れ、反対からは内臓が零れ落ちる。生命力を等しく奪い、死を齎す。

「僕のとっておきさ。最期に珍しいモノが見れて良かっただろう？」

元々疲弊していた彼らにとって、この攻撃は残された生命力を根こそぎ削り取られる死神の大鎌となった。ヘルメットのバイザーから覗く顔は、先程まで生きていたとは到底思えない様な表情を浮かべていて、頬はこけ、目は窪み、肌から艶は失われている。

今の戦闘で生じたかも怪しい帽子のズレを直し、トランクの蓋の部分を人差し指でトントンと二回叩く。それに反応したかの様に触手がずるずるとトランクに戻っていき、貫いた近衛局の兵士ごとトランクの中に消えていった。

結局その場に残ったのは、青の便利屋と、その目の前に広がる血と臓物の海だった。

青の便利屋、ペイルが先程の触手を展開したのは、勿論見せびらかしたいという浅はかな理由では無い。困ったことに、この触手の持ち主は定期的に食べ物、言ってしまうえば供物を要求してくる。ペイルはその条件を飲んでこの触手の持ち主と契約を交わしたのだ。そしてその時に、供物は生物、特に人間が好ましいと言われたのだ。ペイルがこのレユニオンの作戦に参加した理由は、近衛局が関係してくる依頼を遂行する為というのもあるが、同時に供物となる人間を探すという目的もあった。極東の諺で言うのなら、一石二鳥というヤツである。

クラウンスレイヤーの部下を撤退させたのにも理由がある。ペイルやローランは平気だが、大抵の人間はあの触手を見ると精神を削り取られ、正気を保っていらなくなるからだ。ペイルは一時的なモノと言えど、仲間の精神を破壊する様な極悪人では無い。故に部下達を全員撤退させたのだ。

ペイルは無線機で部下達に呼びかけ、再び集合する事にした。

「それじゃあ、この無線機は君に預けるよ。そのうちクラウンスレイヤーから何かしらの指示が来る筈だから、君が部隊を導いてくれ。僕はこれからあのビルに用があるから、そっちに行かなくちやいけない。一緒にその事も伝えておいてくれると助かるよ。」

手を振りながら去っていくペイル。クラウンスレイヤーの部下達は、血の海に浮かぶ肉の塊を見ながら思った。

もう、全部あいつ一人でいいんじゃないかな、と。彼ら彼女らの心が一つになった記念すべき瞬間である。

「隊長！チェン隊長！大変です！」

大通りに溢れかえったレユニオンの兵士達を斬り伏せ、周囲の安全の確保に奔走するチェンの元に、慌てた様子で駆け寄ってくる一人の近衛局の兵士がいた。

「何があった。手短に伝えろ。」

「はっ！最初にレユニオンと会敵して戦闘、その後に撤退した部隊から連絡が取れません！それも一つや二つじゃありません！ほぼ全ての撤退した部隊が消息不明になっています！」

「……何？それは本当か？」

「はい！護衛に同伴させた者からも連絡が取れず、誰一人として後方部隊の元に到着していません！」

撤退した仲間が消えていた。つまりはそういう事なのだろう。この異常事態に対してチエンが判断を下すのは早かった。

「全員、最低でも三部隊で行動をし、撤退の際には一分おきに連絡を入れる。ホシグマはこの部隊を連れて後方へ向かえ！恐らく、レユニオンの別働隊が入り込んでいる！」

「了解しました。……しかし、あの様な芸当が可能なレユニオンに所属する者、となると……。」

「ロドスから報告があったクラウンスレイヤー……そして、黒い沈黙だろうな。あの男、ローランと戦って分かったが、あれは本物だ。追って後方に控えている部隊からも応援を向かわせる。危険だと判断したら直ぐに撤退しろ。」

直ぐに近くの部隊を連れて去っていくホシグマの後ろ姿を見送りながら、チエンは考える。何とも言えない漠然とした感覚、つまりは勘なのだが、クラウンスレイヤーと黒い沈黙以外に、まだ恐ろしい存在がいると考えるしまうのだ。しかし、それを確かめる術は無い。

今出来る事は前線を維持、もしくは押し返して、向かっていった部下であり、大切なパートナーとなった彼女の無事を祈る事だけだ。

何処の都市にも黒いモノが渦巻いてるらしいぞ？

「……クラウンスレイヤー、これでもう三部隊目だ。そろそろ俺達を排除する為の部隊が来てもおかしくない。」

「そうだな。では、頃合いを見て撤退するでしょう。場は十分に掻き乱せた。」

無線機で部下に集合をかけるクラウンスレイヤーを尻目に、ローランはスーツの袖口に付着した血液を拭う。まだ乾き切っていないからか、血液はさらに染み込んで血痕になり、手袋で擦った跡に沿って広がっていく。

この血痕はローランのモノではない。先程始末した若い近衛局の兵士のモノだ。目の前で他の部隊員達があつという間に殺害され、それを黙って見る事しか出来なかった臆病者。

長剣から血を滴らせながら歩み寄るローランを見て、ただ顔から体液を垂れ流すのに精一杯な意気地無し。それをほんの少し哀れに思ったローランは、目を合わせる様に前屈みになり、一気にその男の胸を貫いた。

目を大きく見開いて、口から真っ赤な泡と呻き声を上げ、ローランの剣を持つ方の手に継り付く様に腕を伸ばす男。そこから伝わる力は押し戻したいのか、はたまた押し込みたいのか判別不可能な程弱かった。

男からはつきりと見て取れる絶望の感情。それを目に焼き付けたローランは、ゆつくりと突き刺していた剣を引き抜く。どぷりと溢れた血液が僅かに糸を引き、それが切れると同時に崩れ落ちる男。今までに幾度となく繰り返してきた生命を刈り取る行為。

スーツの袖口の血液はその時に付着したらしい。徐々に黒ずむそれは、ローランの暴力性や残虐性を象徴している様にも見えた。

何処からともなく吹いてきた風に靡く前髪を弄り、今までの自分を顧みる。最初から何も無かったローランが今まで生きてきて、作り上げてきた己自身。それはどうしようもない人でなしだった。

目を閉じれば先程の光景が鮮明に浮かび上がる。どうやらあの光

景はローランの脳裏に焼き付き、精神を蝕み続ける過去の記憶の仲間入りを果たしたようだ。一度こびりつけば、二度と離れる事は無い。そんな呪いにも似た記憶が今日も脳に蓄えられる。

自分はこうする事でしか生き残れなかったのだろうか。もつとい道は他になかったのだろうか。これからもこの道を、死ぬまで辿っていくしかないのだろうか。そんな考えは肩に置かれた手によって打ち切られる。

顔を向ければ、どうしたと言わんばかりの顔をしたクラウンスレイヤーが佇んでいた。呼び掛けの声も聞こえないぐらいに考え事に没頭していたらしい。何でもないと言葉と一緒に返答し、気付かない内に集合していたクラウンスレイヤーの部下に、お疲れ様だなど声を掛ける。

フィクサーになって初めて引き受けた高額の依頼情報抹消の虐殺。あの日から、時間が経つに連れて自責の念に駆られる頻度が高まり続けている。これに関してWはさつきと断ち切って忘れろと、スカジはそこまで深く受け止めないでいいと、■■■■……ラップランドはどうしてそこまで気にするのかと言った。

……人を殺せば殺すだけ、背負い込むモノが増えていく。もうとつに理解してただろう？結局、俺にとつての最善は――

今度の思考は誰かの手ではなく、ウエストポーチに付けておいた無線機から聞こえるノイズ音で打ち切られた。恐らくペイルが通信を入れてきたのだろう。一瞬びくりと肩が跳ねたのを誰にも見られていない事を確認しつつ、無線機を手取る。

『あー、あー………これで聞こえるかな？ローラン。』  
『ぼつちり聞こえるぜ。で、どうした？お前の依頼は達成出来たのか？』

『うん。勿論そつちの方はツと、完璧さ。ただちよつと、厄介な相手に出会してね。』

ペイルの声に紛れ込む音や断末魔から察するに、どうやら戦闘中に通信を入れてきたらしい。心の中でホントよくやるよなコイツ、と思いつつ、話しの続きを促す。

『サーバールームから情報を入手したのは良かったんだけど、いざ脱出つてところで近衛局にビルを囲まれちゃってね。うおっ、テレポーターするにもさつき使ったばかりだったし、え、ちよっ……』

暫くの間音声が乱れるが、後ろで聞いているらしいクラウンスレイヤーが心配になってきたタイムミングで回復する。

『……ふう、それで最上階に上がって、メフィストっていう子にローラの仲間だよって協力を求めたんだ。で、今戦闘中な訳だけど……そこから龍門アップタウンの近衛局ビルは見えるかい？』

ペイルの言葉に釣られ、この場にいる全員が集合場所にしたマンションの非常階段を駆け上がり、屋上に出る。

至る所から火の手が上がり、黒煙が濛濛と空に登っていく様は、無数の黒い柱を彷彿とさせた。それらの奥に見えるビルの上空に、見慣れないヘリのような機体がホバリングしていた。誰かが何だあれ、と言葉を漏らしている中、ローラだけはそのずば抜けた視力で機体にペイントされたマークを視認していた。

「……ロドスが介入してくるとは思ってたけど、たった今、それも上空から来たのか？」

『その通り。はあ、落下して来たかと思ったら、いきなり展望デッキの半分を破壊してさあ……製薬会社は何でこんな戦力抱え込んでるんだろうね？それとも、最近の企業ではこれが常識だったりするのかい？』

「いや、それはないだろ。……俺も加勢した方がいいのか？」

『ん……ま、大丈夫だよ。ああ、本当に言いたい事はコレじゃないんだ。君以外のお仲間さん達がその場にいるのなら、音量を上げてよく聞いて欲しい。』

『結論から言うと、この作戦は失敗だ。各地に展開していた小隊がほとんど音信不通になっていつてる。龍門の警察と近衛局だけじゃあこんな事にはならない筈なんだけどね。』

その言葉と共に、一部のクラウンスレイヤーの部下達に動揺が走る。しかしそれも直ぐに落ち着いて、各々で事態の確認を行った。

「……隊長、俺達以外の巡回部隊が軒並みやられてる。最後の通信か

ら十分も経ってないのに、だ。」

「外周に待機していた支援部隊もだ！拠点も半分以上が潰されてるぞ！？」

「慌てるな、落ち着け。暫くすれば、龍門にレユニオンの二十個小隊と二個本隊が到着する筈だ。予定通りなら私達は既に撤退しているが、近衛局を圧倒するには十分……それに、フロストノヴァもいる。」

「……らしいぞ？ペイル。正直、俺は嫌な予感がしてしようがないんだけどな。あまり長居すると取り返しをつかない事になりそうだ。」

『同感だね。君達はッ、直ぐにでも撤退した方がいい。……あ、最後に一つ。僕達も知らない謎の部隊が裏で飛び回ってる。レユニオンが追い込まれてる原因だと思うけど、ローランは心当たりあるかい？』  
「そればかりは実際に確かめないと何とも言えないな。ペンギン急便でもなければシシリアンでもないし……まあ、可能性があるとしたら鼠王ってところか？」

『分かった。ありがとう。じゃあ、お互いに頑張ろうか。切るよ？』

その言葉を最後に通信が終了する。クラウンスレイヤーは全く感じていなかった不安が一気に押し寄せてくる様な気がして、一刻も早く正確な戦況を確認したかった。それでも隊長の立場の責任を感じて己を奮い立たせ、士気が低下し始めている部下を元氣付ける。

それでも、彼女が投げ掛けた激励は、反射で長剣を鞘から引き抜いたローランと、それと同時に屋上から階段に繋がる扉から出現した黒装束の集団に遮られた。

「……さて、と。待たせちゃったかな？」

つい話しが長引いてしまったとでも言いたげに微笑み、耳に当てていた無線機をトランクに収納するペイル。

「……ッ！」

その隙を狙ったかのように放たれた神速の斬撃。普段なら彼女が

隙と判断し、そして攻撃したのなら致命傷は免れなかった。それも赤霄による一撃ともなれば、確実にあの世へと葬り去るだろう。

「もしかして怒ってる？まあ、確かに僕も悪かったね。敵との戦いの最中に通信だなんて、無視されてると取られてもしょうがないし。」

ちよつと腕が痺れちやつたよ、と戯けたように肩を竦め、防御に使用したトランクの表面を撫でる。その手には先程まで握っていた無線機の代わりに近未来的な装飾が施された大振りのナイフが握られ、ぶらぶらとその剣身を揺らしている。

「にしても、凄い業物？だねその剣。斬撃を直接飛ばす剣だなんて、僕達フィクサーでもそうそう持ってないよ。オークションにでも出せば高く売れそうだ。」

相手を舐めているとも取れるその態度。しかし、目深に被った中折れ帽から覗く瞳は、あの斬撃を放った相手の動作を一つも見落していなかったかのように鋭かった。

(……クソ。便利屋ともなると、ここまで強いものなのか?)

全力の一撃が軽々と防がれた事実に関を僅かに歪め、次の行動を考える。その手には、予想外な事にあっさりと抜刀できた赤霄があった。

龍門のトップであるウェイ・イエンウーから渡されたソレを、チエンはまともに扱えた事は殆ど無かった。数少ない使いこなせた経験は、余程の危機に直面した時のみであった。

そんなチエンにとって不安定な切り札に等しいこの剣は、展望デッキで待ち構えていたこの男の前であっさりとチエンに身を委ねた。そして目の前に立つ男を見て、漸く男が青の便利屋であると認識した。

チエンは己の心臓がかつて無い程に早鐘を打っているのを感じた。赤霄が脅威と認める程の力量を保持したフィクサー。それがどれ程強大な存在なのかは、想像するに難しくない。相手がフィクサーの中でもビッグネームともなれば尚更だ。

邂逅から、ほんの十秒ばかりの接近戦で脳が警鐘を鳴らし始める。攻撃は全てトランクで防がれ、ナイフで流され、体術で躲された。



逆に攻撃される側になると、此方が勝っている筈の武器のリーチの差が一瞬で無くなる。負けてたまるかと反撃に出ようにも、本能が擦り傷さえ命取りになると訴えて止まない。この間にもメフィストが操る駒と化した兵士が味方を消耗させ、デツキから最上階へと続く階段に押し戻されつつある。ロボットの様にビルの周辺を徘徊していたレユニオンの兵士も展望デツキを指して集結しつつあり、戦況は極めて劣勢だった。

そんな中、青の便利屋はあろうことか戦闘中であるにも関わらず、トランクから無線機を取り出して喋り始めたのだ。ペイルにとつては、たつた今メフィストが漏らしたレユニオン側の損害について伝えておかなければと行動に移しただけなのだが、結果的にその行為がチエンに対する挑発としてのクリティカルヒットとなった。

怒涛の連撃を繰り出すも、その悉くを回避される。途中、急なロドスの増援によりデツキが半壊し、その張本人であるロドスのエリートオペレーター、ブレイズが青の便利屋との戦闘に参加するも、彼が無線機を手放す事は、彼が通信を終えるまで終ぞ無かった。

「それじゃあ、改めて戦おうか？途中で野蛮な子も降って来たけど、僕の役割は君達を此処で食い止める事だ。二人で攻めてもらって構わない。」

「そつ。じゃ、精々後悔しない様に動くことねッ!!」

地を這う様に接近したブレイズのチェーンソーが唸りを上げ、床材の破片と共にペイルを襲う。ペイルはコレをトランクで難なく受け止め、盾で身を堅める騎士の様に堅実に対応していく。チエンがタイミングを見計らって挟み撃ちにしようとすするも、すかさずメフィストが兵士を操りルートを封鎖する。解放された赤霄で薙ぎ払うが、いかにせん数が多い上に倒しても倒しても立ち上がってくる。

ならば確実に始末しようとチエンが意識を集中させている時、ペイルとインファイトを繰り広げるブレイズにも変化があった。

突如相手の手元に出現した拳銃を見てからの行動は迅速だった。ブレードの腹を盾にしながらだでさえ開いていない距離をさらに詰め、狙いを付けさせまいとタックルをかます。その行動に若干の驚

きを見せたペイルは直ぐ様拳銃からナイフに持ち替え牽制しようとするも、咄嗟に構えたトランク越しに、二段回の強い衝撃に襲われる。当たった直後にさらに押し込まれたらしい。

チエンが放った赤霄の斬撃よりも弱く、そして中身の詰まった衝撃に体勢が崩れ掛け、狙いを定めて振るったナイフはブレイズの二の腕を浅く斬りつけるに終わった。

「線が細いって思ってたけど、その分じゃ全然鍛えてないのかな？」  
「いやあ、僕もよく言われたり言われなかったりするよ。でもね、今は狙いをつけさせないという意味では最善かもしれないけど、僕のアーツの前には悪手だよ？」

その意味を理解する前に、ブレイズは体内からエネルギー……何となく生命力と呼ばれそうなソレがごっそりと抜け落ちるのを感じた。額からじわりと冷や汗が滲み始め、身体の末端が冷えていく。

「うっ、な、何コレえ？温度を奪うアーツ、だったのかな？」

「残念だけどハズレだ。因みにソレは毒でもないし、僕はこのアーツについて説明するつもりもない。」

（毒じゃない？じゃあ、コレは何だって言うの？何か奪われたってこののは分かるんだけど……うう、一気にくるなあ。）

形勢があつという間に押し込まれ、絶対絶命の崖っぷちに立たされるブレイズ。後方から医療オペレーターがアーツで回復を掛けてくれたが、身体の不調が治る気配は皆無。温度を奪うアーツがハズレだと言ったのも実はブラフで、試しに周囲に血を撒いて温度を上げるも、効果なし。

油断してたつもりは無いんだけどなあ、と心の中で喝を入れるも末端の冷えがどうしても気になり、更にそれすらもペイルがトランクから出したモノに目が釘付けになり、それ以外の思考が塗り潰されそうになる。

「今、僕の周りにいる彼等に正気といったものはないらしいんだよね。メフィストも、その周囲にいる正気の人達にもコレについては言っている。だからこそ、君が初っ端から大技を披露した様に、僕もコレを振り回す事が出来るってものさ。」

「……何なの、ソレ。何でそんなモノ持つてるの!？」

トランクの蓋の隙間から這いずり出した幾つもの水色の触手。それらはペイルを取り囲む様に伸びていき、次第にその範囲を広げていく。思わず当たりを見渡せば、チエンは赤霄を構えている手が僅かに震えており、後方で戦っているオペレーター達も必死にこの触手を見ないように立ち回っている。心なしか、ペイルの周辺にいる兵士達も怯えている様に見えた。

「こういう狂気を振り撒く異形と対峙する経験はお有りかな？ じゃあ、今日が君達の記念すべき真の狂気に触れる日であり、もしかしたら命日にもなってしまうかもしれない奇妙な日だ。」

「足掻け。飲み込まれて、自分自身を見失わないようにさ。」

蛍光色でありながら何処か濁っている様にも見えるその触手と同じ様に、ペイルの水色の瞳も濁っていた。

これつてもう作戦失敗だよな？

「襲え。」

その声を合図に水色の触手が先端の照準を一齐に近衛局とロドスに合わせ、凄まじい速度で射出される。突如として出現した死の激流に、数人の近衛局の兵士が成す術も無く飲み込まれた。

「い、嫌だアツ！俺は死にたくない、俺は死にたくない！」

「チエン隊長！助けてくださいよお！チエン隊長！」

「何で俺がこんな目に遭わなきゃいけないんだよ……やめろって、離せ、纏わり付くなよお……。」

哀れにも身体を拘束された兵士達は掲げられるかのように持ち上げられ、どんなに悲惨な結果が待っていようと、誰もが顔を背ける事をしなかった。否、釘付けにされた様に背けられなかった。

己の隊員から助けを求められたチエンやブレイズ、一部のオペレーター達はそれでも触手を破壊しようと火力を集中させるが、触手の表面に傷一つすら付けられない。所々角張った結晶の集合体にも見えるそれは、打撃に斬撃、アーツを弾き、逸らし、散らしてしまう。

並大抵の攻撃では歯が立たない。ならば並大抵ではない攻撃を。しかし、全員の頭上を漂う様に蠢く触手に拘束された者達に被害が及びかねなかった。ましてや、一人ずつ肉の盾にされかねないこの状況で、精密性に欠ける高火力な攻撃は避けなければいけない。ではどうすればいいのか。全員の表情に明確な焦りと恐怖が浮かび始める。本体を叩こうにも距離が開き過ぎているし、かと言って遠距離から攻撃しても易々と躲される。この瞬間にもメフィストの家畜達は操り人形の様になごちなく歩を進め、ファウストは無慈悲にクロスボウの引き金を引く。それは周囲に散らばって潜伏したファウストの部下、迷彩狙撃兵達も同じだ。

ドクターとアーミヤもこの展開、と言うよりも青の便利屋がレユニオン側に付いてるとは完全に想定外であり、アーミヤが会敵した直後に次の援軍を要請したが、到着にはまだ時間が掛かる。そうこうしている内に、拘束された兵士達の顔が絶望に染まり切り、抵抗していた

者もだらりと手足を脱力させた。あの世へのカウントダウンが、ゼロになった事だけは本能的に察知したらしい。

ある者は更に強くなった締め付けによりパンと小気味良い音と共に破裂し、またある者は頭部だけを触手によって綺麗に刎ね飛ばされた。辺り一面に勢いよく赤い液体と肉片を撒き散らし、それらの一部は犠牲者の最も近くにいたチエンとブレイズにも降り掛かった。

「……やってくれるじゃん。こんな事してさあ、タダで済むと思ってるのかな。」

迫り来るメフィストの家畜に、ブレイズがチエンソーを振り回しながら低い声で惨劇の下手人、ペイルを威圧するが、その声は震えており、頭から頬に垂れた真つ赤な返り血と対照的に、顔は青褪めていた。

一方、チエンは飛来する矢の中でも一際威力の強い矢を弾き、次に飛んで来る方向を逸早く察知しようと集中したところ、隊員達が捕らえられているであろう方向から音がして、何の音か確かめようと視線を向けたとき、目の前の地面にぼちやりと音を立てて落下した物体と目を合わせてしまった。

「……。」

掌に容易に収まりそうなサイズのそれは、無機質にチエンを見つめ続ける。よく見ればピンク色の尾の様な物を付けており、それが神経であること、そして、見つめてくる物体が眼球であること——恐らく、破裂した隊員のモノだろう——を漸く理解した。逃避気味の思考を現実に戻そうとすればする程、眼球が無念を、恨みを訴えているような気がしてならない。

「……ツ~~~~~！」

隊員を守れなかった己への叱責と嫌悪、未知の生物とそれを操る青の便利屋への恐怖で押し潰されそうな心に必死に喝を入れ、ガチガチと噛み合わない歯の根を手を使って強引に止める。足を狙った狙撃を躲して赤霄を構え直すも、その剣身は僅かに震えていた。そう、自身の事にすら気を配れない程、チエンは、近衛局は、ロドスは追い詰められていた。

「うんうん、威力は絶大つてところかな。じゃあ、二発目いつところか。」

返り血を浴びてぬらぬらと輝く触手が反応し、うじゆりと攻撃体勢に入る。これだけでも絶望的だと言うのに、更に十数本の触手がペイルのトランクから這い出して同じように先端を近衛局とロドスに向けた。

ペイルは手に拳銃を握りながら言う。

「僕本人でもコレを何本まで操れるのか？最大威力は？射程は？まあ、ゼーんぶ確かめた事が無いんだよね。」

展望デッキの半分を水色の線が埋め尽くす。

盾を構えた者は盾ごと貫かれた。

恐怖に圧倒されていた者はデッキから奈落へと叩き落とされた。

他者を庇おうとした者はその四肢を腕がれた。

庇われた者は別の触手によって貫かれ、飛んでいく自身の内臓を脳裏に焼き付けた。

これにより展望デッキにいた近衛局はチェンと数人の兵士を除いて全滅、ロドスも数名のオペレーターを失う結果となった。そして触手が狙わなかった故に、メフィストの家畜達は損傷箇所を再生を終え、ファウストは自動バリスタの同期を完了させていた。

「ブレイズさん！貴方はもう限界の筈です！無茶はやめて下さい……これ以上貴方達を失いたくありません！」

「大、丈夫だってウサギちゃん……まったく、フィクサーってホンント滅茶苦茶！それに、ここでコイツをどうにかしないと、それこそ龍門が本場に奪われるかもしれないんだか、ツらあ!!」

ブレイズのチェーンソーが唸りを上げ、武器を振り上げたメフィストの家畜を一気に三人切断する。それと同時に指先から滴る自身の血液を振り撒き、アーツを発動させた。宙を舞う血液が燃え始め、強烈な熱波を発生させる。

「もう居場所は分かってたけど、中々させてくれないんだから……っ、う、あくクラクラするう。」

熱波の直撃を受けた展望デッキの一部、此処とは別の近衛局東ブ

ロックや南ブロックの数カ所の空間が突如として歪み始め、カーキ色の服を纏ったレユニオンの狙撃兵や配置された自動バリスタが姿を現した。

「……ファウスト。迷彩が破られた。」

「可能ならばバリスタを回収してから撤退しろ。此方はもう直ぐで決着が付くだろうからな。」

此方の居場所がバレたと理解した狙撃兵達は建物の奥の暗闇に引込み、稼働中の自動バリスタもスイッチを切られ、固定器具を外してから二人がかりで運ばれていった。

これでブレイズはある程度戦闘に集中出来ると敵を見据えるが、それも長くは続かない。異物の入り込んだ右肩を気にしながら、背後にいるアーミヤに声を掛ける。

「ドクターは無事だよな？他のみんなは……はあ、覚悟はいつもしてたつもりだけど。」

先程の触手を回避に専念する事で凌いだブレイズは、追い打ちだと言わんばかりにペイルが撃ち込んだ拳銃弾の内一発を右肩に受けてしまった。またしても襲ってくる力がごっそりと抜け落ちる感覚と、血液をそれなりの量使用した為酸素の巡りが悪くなり、表面は取り繕っているが内心では立っている事すら辛い程だ。しかし、それと引き換えに敵の狙撃兵の位置を炙り出すという成果を上げ、何となくだがペイルのアーツの正体にも見当が付いていた。

「ウサギちゃん、ドクター、よく聞いて。アイツの攻撃はどんなに些細なヤツでも絶対に避けなきゃダメ。触手は言わずもがな、だけど……多分、アイツのアーツは生命力的なモノを削り取るって感じだと思う。どんな攻撃でも数回擦れば死ぬくらいに、強力な。」

色々と抜けている部分もあるが、それでもある程度自身のアーツを看破した事に、ペイルは心の中でブレイズに惜しみ無い称賛を送る。もつとも、だからといってアーツの全容を教えるつもりは無いし、勿論生かして帰すつもりも無い。対象が生物であるのなら平等に殺せるとというのがペイルの自慢だが、それなりにアーツの出力を強めて攻撃したにも関わらず、衰弱死するどころかその両足で立って話をする

人間はペイルにとって初めてであり、同時に自分のプライドに傷が付いた気がしてならなかった。

確かに純粹な『殺し合い』ではなく『遊び』のつもりで戦っていたが、だからといって相手がまだ生きてるのはペイル自身の怠慢としか言いようがない。なんとなく蟻を踏み潰そうとして、その蟻が何度も履いている靴の溝で死を免れ、結局ムキになって残虐の限りを尽くしてしまう。ペイルは今、正にこの状況に差し掛かろうとしているのだ。

今更相手の底力にビビったように本気を出すのはカッコ悪いが、その相手を取り逃すのはもっとカッコ悪い。ペイルは精神の一部がまだ大人になりきれていないのは自覚しているが、ローランを筆頭とした同類がいるので矯正してこなかった。

革靴の爪先で地面をコツコツと叩いてからトランクをその場に放棄し、右手に拳銃を、左手にナイフを装備して走り出す。遠距離を攻撃する手段を持つ者に弾丸をばら撒きながら接近するが、走っているうえに相手が回避に専念している事もあり直撃には至らない。

弾を撃ち尽くすと回避から一転して一斉に矢やアーツを放つてくるが、ペイルは気にせずジャンプする。すると丁度着地する位置の地面を突き破って触手が現れ、ペイルを乗せて弧を描くようにしてドクターに向かって伸び始めた。これにより遠距離攻撃を全て躲し、拳銃のマガジンを入れ替えながら標準をドクターが被る真つ黒なバイザーに合わせる。同じタイミングでそれぞれのオペレーター達が立っている地面から触手が出現し、一人に付き三本が相手をするようにうねり出した。

発砲音が鳴り響くが、放たれた弾丸は若干の正気を取り戻したチェンの抜刀により弾かれ、そこを透かさずアーミヤがアーツで迎撃に出る。

ペイルは不規則に伸びてくる複数の黒い線を触手を操って無効化する。防ぎきれなかった分はナイフで弾き、触手を蹴ってチェンの前に飛び降りた。

拳銃を発砲しながら沈み込むように踏み込み、ナイフの間合いに



入った瞬間に下から斬り上げ、それと同時にチエンの腹部に向けて弾丸を発射した。

全ての弾丸を弾いたチエンは迫り来るペイルの凶弾と凶刃に、弾丸の方がより危険として射線上に赤霄を挟み込み、ナイフを咄嗟に手に取った鞘で防ごうと試みる。これにより弾丸は防げたものの、ナイフは鞘をすり抜けたかと思間違う程曲がりくねった軌道を描いてチエンの肩口を掠めて衣服を切り裂き、その下の皮膚に傷を付ける事に成功した。

瞬間、凄まじい寒気と脱力感がチエンを襲うが、思わず赤霄を取り落としそうになるのを必死に抑え、吐息が当たりそうなくらい接近していたペイルに鋭く振り翳す。ペイルはこれを軽業師のようにチエンの左肩を飛び越えて回避し、そのまま勢いを利用して体を捻り、チエンの側頭部を叩き斬らんと斬撃を繰り出す。チエンはペイルを碌に見もせず自身の本能に従い、ナイフの刃が耳に滑り込むか否かのタイミングで鞘を使ってペイルの腕を跳ね上げ、身体の柔らかさを十分に活かした回し蹴りを無防備な顔面に叩き込んだ。

「うぶっ。」

空気の抜けるような音と情け無い声が聞こえ、それでも構わずに足を振り抜けば、ペイルの被っていた中折れ帽が宙を舞った。チラリと帽子が舞ってきた方向を見ると、無造作に伸ばした栗色の髪の間から水色の瞳を覗かせている男、ペイルと目が合う。若干猫背になった状態で立ち、拳銃を構えた右腕を左の頬の前にかけているところから、ギリギリで防御が間に合った事が伺える。一瞬此方を見据えた後、視線は先程飛ばされた帽子に泳いでいき、また戻る。どうやらそれなりに気に入っていたらしい。

「……うん、こんな状況じゃなきや手放しに褒めちぎりたい体術だ。

僕のアーツが発動——

突如としてペイルの真後ろから三本の触手が飛び出し、直後に風圧と連続した鈍い音が響く。

——した後なのだね。その精神力には目を見張るものがあるよ。君もそう思うだろ？」

触手の隙間を通して、ペイルは自身に黒い稲妻のようなものが走る腕を向けるアーミヤに問い掛ける。

現在、展望テツキの下の階層では数多の触手が蠢いており、それぞれが状況に応じてペイルの意思に関係無く動いていた。ペイルのトランクを起点に触手がフィールドを支配しているのは誰でも分かる事だが、いかんせんトランクをどうにかしようものなら、触手が凄まじい速度で迎撃に回る為不可能に近く、ならば必然的に術者であると思われるペイルを叩く事になる。だが……

「君には僕を相手する余裕なんて無いのにさ、それでもよく頑張るよ……わあ、今のよく避けれたね？そのドクターとやらも感謝しなきゃダメだよ。」

正面から攻撃を仕掛ければ、全てペイルに捌かれ、ならばと死角から攻めても触手が勝手にペイルを守るように動く。今、ペイルがドクターを必死に誘導するアーミヤを見ながら喋っているが、この間にもペイルへの攻撃は行われていた。しかし、その悉くが無効化され、その間にも触手は全員を消耗させていく。

打撃も銃撃も斬撃も、炎に氷に雷すらも、果てはどんな超常現象ですら、この状態にあるペイルを傷付ける事は出来ない。それが出来るのは、ペイルの邪魔にならないようにと触手が手を出さないペイル本人と対峙している者と、とある理由からペイルを狙う集団だけである。

「さて、仕切り直しとしようか。もつとも、君の様子を見る限りじゃあそこまで長くは持ちそうにないけど、精々援軍でも期待しながら頑張ってみたらどうだい？」

いつの間にか触手が回収してきた帽子を手にとって被りながら、ペイルは触手が木々のように生えた林のような場所の中で、どうしようもなく冷える体と蝕む恐怖に耐えるチェンに拳銃を構えた。

「口、ローラン！アイツらは何なんだ!?一瞬で半分がやられたぞ！」

「残念だけど、俺はその質問に対する答えを持ち合わせてないんだなあ!!」

奇襲を仕掛けてきた謎の黒装束の集団により、クラウンスレイヤーの部隊は半壊状態。クラウンスレイヤー本人はこの唐突な事態に軽くパニックになっており、ローランは辛うじて一人を斬り捨てたが、このまま敵部隊を壊滅させるよりも、クラウンスレイヤーが殺される方が早いと判断したので全力撤退を選択し、現在それを実行している最中である。

また一つ部隊員の悲鳴が上がり、それを聞いたクラウンスレイヤーが更にパニックに陥るのを尻目に、ローランは走りながらも考える。今もローラン達を付かず離れずの距離で追跡してきている黒装束の集団についてだ。

ぱっと見た感じでは近衛局の別働隊という可能性は低い。幾ら別部隊といえど一般兵士との実力差が開き過ぎている。アレが近衛局の所属なら他の兵士ももう少しマシな筈だ。

次に鼠王の信頼する部下という可能性だが、これもどうかと言われると悩む。

かつてローランが保険のつもりで鼠王の組織について調べたところ、鼠王は信頼の置ける部下や幹部には直々に特殊なアーツを伝授するらしい。あの集団はそういったアーツを使う素振りもなければ、装備もローランが知っている鼠王の組織の物とは何一つ違う……勿論、組織内で全てが統一されてるとは思っていないが。介入してきた動機としては龍門の危機という十分な物があるので、今のところは一番可能性が高いとローランは踏んでいた。

最後に元々龍門にはいない組織の可能性だが、あの集団が龍門を助けるという目的で動いているのであれば炎国から送られてきた者かもしれない。しかし、これも服装から見てまず無いだろう。炎国は使節団や何やらが兎に角赤いからだ。

ならば龍門に敵対的な組織なのかというと、それこそ訳が分からなかった。龍門の障害となるレユニオンを排除している点もそうだが、何より候補に上がる組織が多過ぎる。実際問題龍門の歴史を紐解い

ていくと、様々な組織との駆け引きや潰し合いなどのエゲツない事がグチャグチャに絡まったイヤホンコードのようになっていている事が分かる。というか多方面に喧嘩を売り過ぎでは無いだろうか、この移動都市。調べている最中にウルサス帝国の名がチラついて冷や汗をかいたのは全然良くない思い出である。

結局のところ脳をフル回転させても無駄だと判断して、目の前の問題にどう対応すべきかに思考をシフトさせる。

さつきから延々と走ってはいるが、振り切れる気がまるでない。相手に有利な場所に誘導されるのも時間の問題である。クラウンスレイヤーの言う援軍が到着するまで耐えるという選択肢もあったが、一向に来る気配がないときた。つまり――

(え、これってさ、俺ら見捨てられてね?)

何故切り捨てられたのかについては全く分からない。レユニオンの内部についてももう少しWに聞くべきだったと後悔したくなるが、そんなものは後だと背後を確認しながら弱音を振り払う。

この状況に於いて自分がすべき事……クラウンスレイヤーのあまりの慌てぶりに此方まで思考を乱していたが、よくよく考えればコレしかないだろう。

「クラウンスレイヤー、俺が殿をやるよ。お前は構わずに生き残った隊員と先に行け。」

「い、いや、そうは言ってもだな、それではお前がやられてしまうぞ?! 仮に成功したとして何処で合流するんだ!」

「おう、それに関しては特に気にしなくていいよ。追跡は得意だしな。まあ、大丈夫だろ。生きて帰ってこれるさ……多分。」

「不安でしかないんだが! あ、おい! ローラン!」

キツイ戦いを強いられる覚悟をし、キュツと音を立てながら切り返して再び走りだす。途中で何人かと目が合っても気にせず突っ走り、警戒するようにローランを取り囲もうとする黒装束の集団に全神経を集中させた。

それに呼応するように黒装束達も懐から湾曲した短刀を取り出して構え始める。そのただでさえ熟練した構えを見て、ローランは憂鬱

そうに顔を歪めた。  
ああ、逃げ出したい。

やり直したいコトってあるよな？

自身を完璧に殺す為の布陣を整えた黒装束の集団を冷めた目で見渡し、ローランは無表情を貼り付ける。それでも、心の中では罪の意識を遠ざける為に必死になっていた。

大丈夫だ。今なら、仲間を逃す為だっていう、立派な大義名分があるんだから。だから、俺が正しくて、アイツらが間違ってる。それに、アイツらは明らかに殺しに手慣れてたんだ。俺と同類なんだ。だから、殺しても殺されても、誰も何も言わないんだ。

何度もこの世の残酷さを叩きつけられ、それでも空虚に成り切れなかった己の心は脆弱なのか、将又強靱なのか。それが分からない故にこうして逃避を続け、現実から極力目を逸らそうとしてきた。

勿論、限界が訪れた。それも何回も。その度に正気を取り戻す為に善行を積んでみたり、いつそ狂い切った方がマシかもしれないと狂人の真似事をしたりもした。それでも結局はそれは偽善だ、これは辛いだけだと何とか正気を取り戻し、また同じ道を歩み始める。後戻りも、道を外れる事も許される訳がないと進み続ける。

様々な理由で振るってきた暴力は、かつてはただ生き抜く為に闇雲に鍛え上げ、年が経つにつれて殺す為に磨き上げられるようになったモノだ。これを利用する事に苦悩した覚えはあれど、どうして憎むなぞ出来ようか？

一人ずつ来るのなら一人ずつ叩き潰す。全員でくるのならそれを逆手に取って立ち回る。武器を振るう事に戸惑いなんて必要ない。

今の俺は、正しいんだ。少なくとも、間違っては無い筈だ。

三方向から急接近する黒装束の集団と、それと呼応するように流れる銀の一閃が静寂を切り裂いた。

一対多においては、攻撃の第一波を乗り越える事が大事だ。後は付かず離れずの距離を保って戦えば、同士討ちを恐れる敵なら一安心、恐れないならばそのまま殺していけば良い。黒装束の集団は前者のようだった。それでも一瞬の隙を突くように飛んでくる数多の斬撃からは、長年の修練が見て取れる。

一定の距離を取られれば、今度は数人が固まって襲いかかってくる。一人を殺してその死体を有効活用する事がベストだが、それが出来る程敵は甘く無いらしい。タイミングを見極めて丁寧な相手をしていくしか無さそうだ。

戦斧とメイスを取り出して急所への攻撃を防ぎ切る。両手に武器を持つ、所謂二刀流と呼ばれるスタイルは攻撃よりも防御に寄ったモノであり、利き手では無い方に持った武器は、主に防御かもう片方の武器の補助に使う事が多い。左右で同じ、又は違う武器を持ち、尚且つその状態で別々に動かしたりするのは至難の技であり、卓越した技量や筋力、体幹等が求められる。これで一方的に攻撃を繰り出せる者は極めて少数だ。

ローランはその少数に数えられる人間だった。二つの武器がまるで意思を持ったかのように澁みなく動き、全く別の動きを体全体を使う事によって難無く繰り出していく。威力の乗った鋭い一撃も危なげなく受け止め、ここぞという時にだけ、片方がもう片方に追従するように動く。

黒装束の一人が迫ってきた戦斧を短刀で防げば、戦斧の峰をメイスで強打して短刀ごと使い手を叩き斬る。顔面の中央から顎まで深く切り裂かれ、その過程で傷付いた中枢神経が機能を停止した。

手答えを感じたローランは、直様別の敵に武器を振るう事は厳しいと判断し、崩れ落ちるようにして頸動脈を噛み切るように放たれた左右からの斬撃を避け、斜め右後ろに向かって戦斧を振り抜く。

短刀を持つ腕を狙われた黒装束は半身になってこれを回避。ローランの体勢が整わない内に仕留めようと刺突を繰り出そうとするも、不安定な姿勢から放たれた蹴りが太腿に命中して体幹を崩し、遅れて振われたメイスの頭部直撃により、仮面に覆われた狭い空間内に二つの目玉が飛び出す。そのまま先程蹴りを放った足を軸に回転し、残った一人が突き出した短刀を持った腕を半ばから斬り飛ばした。

腕を落とされた黒装束は即座に跳躍して大きく距離を取り、入れ替わる様にして新たな四人の黒装束達が襲い掛かる。一人は直刀を握っているようだ。敵の人数と装備している武器、それぞれの配置を

冷静に確認し、この状況に於いて最適解となる武器を取り出す。ローランはコレを繰り返すだけで殆どの戦闘を制してきた。

リーチの短い武器相手に態々同じリーチで挑む必要は無い。長剣で適当に遇らいながら、僅かに晒した隙にランスを突き刺す。引き抜く時に飛び散る鮮血が煩わしい。

振われた刀身を必ず刀身で受け止めなければならぬというルールは存在しない。即座に手甲を手袋に重ねる様に取り出して、指先から伸びる左右五本の刃で挟み込む様にして封じる。後は相手が直刀を手放す前に引つ掻けば完璧だ。

取られた防御に見合う攻撃をするなんて思考はありえない。機械仕掛けの大剣を振り下ろし、そして薙ぎ払えば上半身が宙を舞う。辺りにビチャビチャと瑞々しい臓器が落ちる。

距離を取られたからといって無理に詰める事はない。拳銃を取り出し、すっかり軽くなった引き金を数回引けばそれで良い。衝撃を受けびくりとした黒装束は倒れ込んだ。

今度は十人近い人数の黒装束達が襲い掛かってきた。スーツに着いた肉片を払う暇すら与えてくれないらしい。それにそこまで広く無い場所で、しかもそこそこ密集した状態で戦うのだ。クリーニングが大変な事になるかもな、と無意味に考える。

長剣で斬り払う。

ナイフで突き刺す。

メイスと戦斧で舞う。

鉤爪で撫でる。

双剣で駆け抜ける。

ハンマーで叩き潰す。

拳銃の撃鉄を下ろす。

ショットガンで吹き飛ばす。

太刀で一閃する。

ランスで圧倒する。

大剣で真つ二つにする。

大体の場合はコレらの中から選んで動く。偶にちよつと違う動き



をする。相手に合わせた動きを試してみる。緩急をつけてみる。攻撃を誘ってみる。防御に徹してみる。そして相手の隙が見えたら、斬つて、殴つて、叩いて、貫いて、引き裂いて、蹴つて刺して撃つて回つて振り下ろしてへし折つて飛んで跳ねて地を這つて。

いつの間にか、ローランは血溜まりの中で、生き残つた一人の首根っこを掴みながら、その眼前に長剣の切先を突き付けていた。あれだけいた黒装束は地に伏せ、残りは既に撤退していた。熱を取り戻す思考と、何かのし掛かるのを感じながら、目の前の黒装束に問いたです。

「お前達は誰の下で動いている？もしお前がこの質問に嘘偽り無く答えれば、命の保証は必ずする。」

「……………」

手を少しだけ前に出せば、長剣の先端が眼球に接触した。ほんの少しの抵抗を無視して更に前に出せば、苦痛を押し殺した呻き声と水音、荒い息遣い。

「……………殺せば良い。お前は強かった、それだけだ。言う事は、何も無い。」

引き抜いた長剣をもう一度突き出す。首を掴んでいた手から力を抜けば、どさりという音。

これだけ殺せば、もうあの黒装束達が追ってくる事は無いだろう。何人かがクラウンスレイヤーの方に先行しているかもしれないが、連絡を受け取って追跡を中止する筈だ。今からそこにローランが向かうのだから。

柄まで垂れてきた血液を振り落とし、鞆に納めてから手袋に仕舞う。全力で行けば間に合うだろうか。幸い残香やら何やらで追跡は可能だが、少し面倒くさい。

少し前まで向かっていた方向に体を向け、走り出す———そうしようとしたが、背後から聞こえる物音に気付いて大きく溜め息を吐き、

少しの間辺りに視線を彷徨わせてから跳躍する。

物音は大きくなると共に数を増やしていき、暫くすると緑の長髪を靡かせながら一人の女のオニが姿を現し、それに続いて近衛局の隊服を纏った兵士達がガチャガチャと装備を擦り合わせながら現れる。

建物の影に隠れながら盗み見をする。

三角形の大盾を携えたオニには見覚えがあつた。確か、時々近衛局の隊長であるチェンと一緒にパトロールをしていた筈だ。まだ龍門を追い出される前の事で、店で食事を取っている時にガラス越しに一度だけ見た程度だが、その長身と額から伸びた一本の角は強く印象に残っている。

奇襲ならば兎も角、一度正確に捉えられれば面倒な事になるのは間違いないだろう。それに、これ以上長居するのはデメリットにしかない。ローランは素直にクラウンスレイヤーと合流する事にした。

もし黒装束達が襲撃を仕掛けて来る前にかち合つてたらどうなつてたんだろうな。そもそも、此処に来てるって事はバレてたつて訳だし、いや、あくまで目的は攪乱だったから、良かったのか？

たればは無意味で、反省は今じゃないと区切りをつけ、足音を立てないようにゆっくりと走り始める……が。

風に乗って、随分と懐かしい香りが漂って来るのを、ローランの嗅覚が認識した。最後に嗅いだのは何時だったろうか。そう、何年も前。そしてこの香りは、あの子の――

「――いづつ!？」

右頬が何の前触れも無く熱を帯び始め、思わず声が漏れてしまう。それと同時に、ローランの鼓膜は何かの物体が風を切る音を拾った。

反応が遅れながらも背後へ回避行動を取れば、今度は目の前の地面に、二つの何かしらのアーツを纏った円形が着弾する。直ぐ近くに存在する近衛局の一部隊にも構わず、姿を見せながらも大幅に距離を取り、新たな襲撃者へと視線を向けた。ズキズキと偏頭痛がする。思考が乱れる。ローランは、今の攻撃を知っている。それは即ち、その襲撃者を知っている事に他ならない。

「ああ、やっと逢えたね、ローラン。この瞬間をどれだけ切望したの

か、置いて行つたキミにも少しは理解してほしいよ。」

曇り空を背に立つのは一人の少女。たったそれだけだと言うのに、直視する事を躊躇いながらもローランは見上げる。

「キミに少しでも追いつく為に、一杯頑張つたんだよ。キミは攻撃してきたボクを殺すのかな？それとも、あの時みたいに頭を撫でてくれるのかい？」

乱れ具合から手入れが行き届いていないと分かる銀髪はそれでも綺麗で、浮かべられた狂った様な笑みと良く似合っている。細められた目からは並々ならぬごつた混ぜの感情が放たれ、両手に持った奇妙な部品が付いた剣にもその感情が宿っているかの様だ。

「あの後、膨大な時間を掛けて考えたんだ。でもね、考えれば考える程、全てを奪つたキミが憎くて、新しいボクを見せてくれたキミが愛おしくて……………最つつっ高だね!!」

己の罪の象徴でもあり、成し遂げ切れなかった贖罪の象徴でもあるその少女は、ローランがどうしても自身を責めずにはいられない呪いであった。それすらも、少女にとつては堪らなく嬉しいというのに。

「……………何で、此処に来てるんだよ。????——」

「おっと、今はラップランドって呼んで欲しいなあ。それはどうでもいい奴に覚えて欲しく無いんだよ。ボクと二人きりの時以外で呼ばないで。」

語尾を強めて拗ねた様な表情を取るその様は、まさに年頃の少女に相応しい。その身から漂う溢れんばかりの血の匂いを除けば。

——全部、俺の所為だ。

## 死にかけメンタル

「ぐ、ひゅっ……う、はぁ、はぁ。」

ボロボロと崩壊を始めようとする精神に喝を入れ、何とか原型を留めさせようとするも、その原因は油の様にローランの奥深くに染み付いていた。徐々に侵食されていく感覚に思わず吐き気がして、震えそうな手で口元を押さえて堪えようとする。それでも口の中いっぱいに胃液の酸っぱい味が広がったが、えづきながらも飲み込んで、地面に向かってぶち撒ける事だけは防いだ。

過去の思い出したくもない、それでも忘れてはいけない記憶を無理矢理引っ張り出され、それを映画のフィルムのように特定のシーンだけを一つずつ見せられるのは酷く苦痛だった。袖で口の端を拭いながら、何かしらの配管の束の上に立つラップランド、突然の展開にいまいちついていけない様子の近衛局の順で睨み付ける。

今にでも逃げ出したかったが、ループスの、彼女の嗅覚を甘く見れば痛い目に合うのは確かだった。現に嘔吐しそうになったローランを追跡するなど、ラップランドにとっては朝飯前だろう。人はキツイ匂いや悪臭の方が発生源を辿りやすい。

「……何でここにいるんだよ。」

「今のボクがロドスにいるからだよ。近衛局とロドスがある程度繋がってるのは知ってるよね？そんな関係にある二つの片方がレユニオンに襲撃されれば、もう片方は一応助けなきやいけない。それでボクは龍門にやってきて……ここに来たのは、まあ、勘かな。」

深呼吸をして小刻みに震える筋肉を静止させ、自身が取るべき最適解を考える。気が付けば頬を冷や汗が伝っていたが、それっきりで意識の外に放り出した。

「待って下さい。確か、ラップランドと言いましたね。貴方がロドスに所属しているというのなら、少なくとも何かしらの隊を組んでいると思うのですが。それとも、単独行動の許可が出ているのですか？」  
「うるさいなあ……キミ達は引っ込んでなよ？ボクが思うに、キミ以外は全員足手纏いだよ。肉壁にすらならないね。」

隊を率いていたホシグマが疑問を呈した事に対し、ローランと対面してからずつと続けていたニタニタとした笑みを引っ込め、冷酷さを滲ませた無表情になるラップランド。心底つまらなそうな目で近衛局の面々を流し見るが、それにも飽きたのか、口を三日月の様に歪めて再びローランへと向き直った。

「さて、夢にまでみた殺し合いも、これじゃあ邪魔が入りそうだね。それじゃあ、久しぶりに鬼ごっこでもしようよ！勿論、ボクが鬼だ……ハハハッ!!」

その瞬間、ローランは迷い無く逃走を選択する。ラップランドの戦いを間近で見てきたローランは彼女のアーツを誰よりも理解しており、故に一度喰らえば暫くはまともに武器を構える事すら出来ないとは知っていた。それに、彼女にはローラン自身の殺人術の一部——主に二刀流に関する技術だが、それを彼女が復讐に燃えていた時期に教えていた事がある。

二刀流は防御寄りのスタイルな為、多少扱いが難しくとも、それでも彼女の身を案じるが為に教えていた……筈だったのだが、ラップランドは常に堅実に立ち回る防御重視の二刀流よりも、ローランが普段使用する攻撃に特化した二刀流に強い興味を示していた。

戦闘に関しては天賦の才能を有していたラップランドは、ローランから貪欲に技術を盗み続け、実戦で無駄を削ぎ落としていき、遂には彼女だけの二刀流を完成させた。その完成度は凄まじく、実際のところローランも二刀流で戦ったらかなり接戦になるのでは、と密かに考えていた。

そんなラップランドと現在の状態で正面からやり合えばどうなるかは、火を見るよりも明らかだった。だからこそ、今は少しでもこの精神を蝕むアーツの効力が弱まるのを期待して時間を稼ぐしかない。ラップランドと殺し合いたく無いという気持ちも強かった。純粹無垢な彼女を悲劇へと突き落とした己が、その両手を更に血で染めてしまえば、もう二度と正気を保てないのでは。そんな気がしてやまなかった。

壁を蹴り上がり、不安定な狭い足場を疾走し、段差を飛び越え、ほ

んの一秒さえも惜しいと最適化された移動法で逃避する。かつて龍門に住んでいた身として殆どの地形は把握していたので、次は何処に行けばいいのかと迷う事は無かった。

「……まで興奮するのはキミが初めてだよ！ローラン!!一切のミスが許されない、そんな追跡は!!」

ラップランドの上気した声が耳元で聞こえた様な気がして、思わず背後を確認するローラン。

真後ろにピツタリとくっついてきていた訳では無いが、それでもローランが踏んだ場所とほぼ同じ場所を足で踏むラップランド。時折配管や建物の影で見え隠れする引き裂いた様な笑みが、よりローランの精神破壊を進行させた。幾ら逃げてても、そこが夜であるなら何処までも追ってくる月の様な、そんな恐怖。

少しでも気を紛らわせようと追ってくる存在に対してローランは拳銃の引き金を数回引くが、碌に狙いも定められていない弾丸はあらゆる方向に飛んでいったように見えた。

(フツ、ボクのアーツが確実にローランを蝕んでる。その証拠に、今のだつて牽制にすらならない程ツ、!?)

ラップランドの耳は弾丸が何処かに着弾するのと同時に、頭上から何かが落下してくる音を拾った。大雑把な感覚を頼りに飛び跳ねれば、本来ラップランドが通ろうとしていた場所を目掛けて室外機が二つ落ちてきていた。体を掠める程正確に落とされたそれらは、大きな音を立てながら地面と激突した。幸いにも喰らう事は無かったが、意識を回避に割かれていた一瞬でローランはかなりの距離を稼ぐ事に成功しており、先程と比べてその背は確実に小さくなっていた。

(……やっぱりローランは凄いなあ。憧れる、尊敬する、感服する。) 一時的に腰に差していた双剣を引き抜いて、アーツを伝わらせる。

(けどあの時の事を思い出すと、嫌悪するし、唾棄するし、憎悪する。ああ、矛盾ばつかだよ、ボクの心は。)

(でも、それでも……だからこそ!!本当はどっちなのかこの目で、肌で、舌で鼻で耳で全てで!確かめたいんだよローラン!!)

二本の剣閃から白銀の光が迸り、勢いよく放たれた。二つ光は風を

切りながらその形を徐々に円形へと変化させ、唸りを上げながらローランを追尾しているかの様に飛翔する。銀に光る軌跡は途中の障害物を挟んで半円を描き、まるで物体をすり抜けていると錯覚する程絶妙な射線で放たれた光はローランの右足と左肩を掠めて着弾した。

ローランはこれに対し、せめて着弾の際に発生する衝撃波だけでも回避行動を取ったが、いかんせん反応が遅れた為、直撃こそ免れたもののラップランドのアーツを喰らってしまった。先程体を掠めたアーツの飛翔体や今の衝撃波もスーツがある程度防御するとはいえ、それでも完全では無い。脳に悪意が直接差し込まれる様な感覚を覚えるが、顔を青くしながらも集中を切らさなかった。

これを皮切りにラップランドは遠距離攻撃を開始し、容赦無くローランにアーツを放っていく。ローランもアーツで周囲を無音にしてラップランドの混乱を招こうとするも、アーツの仕組みは既にお互い割れている為、直ぐに姿を捕捉されてしまう。ならばと切り返して反撃に出れる機会を窺おうとしても、ラップランドのアーツが思考の半分を埋め尽くしてしまい、戦略が碌に練れない。

多少肩をぶつけながら角を左に曲がり、絡まりかける足を力任せに動かしてただひたすらに走る。背後が気になってチラリと見れば、そこには双剣を振りかぶるラップランドの姿。しつかりと目で確認したアーツの飛翔体を今度は半身になって躲し、攻撃後の隙を狙って発砲する。手の震えが治らず、一丁の拳銃を両手で構えて撃ったが、僅かな標準のブレをラップランドは瞬時に認識して回避する。その光景を見るや否やローランは直ぐに逃げ出し、ラップランドとの決死の鬼ごっこは続いていく。

しかし、それも永遠ではない。

「随分と遠くまで逃げるね？そんなにボクがイヤなのかな、それともボクという存在自体はどうでもよくて、ただ罪から逃げたいだけなのかあ？」

ローランの精神はラップランドの狂気に犯され続け、遂にはまともな判断すら下せなくなっていた。

「はあっ、はあっ、はあっ、逃げて、たまるかあッ！」

手袋から真つ黒な鞘に収められた長剣を取り出し、柄を握って銀の剣身を引き抜いたローランは何かに取り憑かれた様な、必死の顔でラップランドに斬りかかる。

待っていましたと言わんばかりに目を輝かせたラップランドは、ローランの切り払いを余裕の態度でいなし、先程までの走っていた勢いを利用した蹴りをローランの腹に向けて放った。

攻撃を完璧に対処され、碌に防御姿勢も取れないローランはその蹴りをまともに喰らい、それでも長剣を離さずに下の裏路地へと落ちていった。ベキベキと何かが割れる耳障りな騒音を受け取り、ラップランドも下へと飛び降りていく。

そこで目にしたのは、重なったトタン板の上で苦痛に悶えるローランの姿。どうやら日除けにでも設置されていた粗末な屋根に落ちたらしく、骨折等のそれほど酷い怪我を負っている様でも無かった。

怯えた様子でなんとか立ち上がりとするローランに早歩きで詰め寄ったラップランドは、そのままローランの胸部を蹴飛ばして、再び倒れたローランの両の掌に双剣を突き刺した。

「ぶぁッ!!う、ら、ラップランド。」

「あまり暴れないでよ。骨とか腱とかを傷つけない様に刺してあげたんだからね!ローランだって、これから両手に障害抱えて生きていきたくはないよね?」

そう言いながら仰向けのローランに馬乗りになったラップランドは、握った双剣にゆっくりと力を込めていく。じんじんと痛む両手に連動して歪むローランの表情に愉悦を感じながら、紅潮しながらも狂った笑みを浮かべてラップランドはずいと顔を近付けた。

「ボクが何度も夢に見てきたシチュエーションだよ。夢は夢のままでも美しいけど、叶った瞬間の喜びは何事にも代え難い!」

「……お、俺を、殺すのか。」

「うん?良い質問だね。ボクはずっと迷ってるんだよ。キミを、生かすか殺すかで!今からそれを決めるのさ!」

双剣から手を離れたラップランドはローランの頬にぴとりと指を這わせ、自身の目と合う様に顔を移動させた。既にこれでもかとア



ツを流し込んでいる為、ローランは動けない。

「前提から確認しようか。まず、キミはボク等家族の幸せを永遠に引き裂いた許されざる大罪人であって、ボクに戦いのは何たるかを教えて本当のボクを見つけてくれた大恩人。」

「……キミにだったら、俺は殺されても、良いよ。俺が誰よりも知ってる空虚の辛さを、実感させたんだ。」

「……フフ、フハハッ！アツハハハハハハ!!」

鋭い八重歯を覗かせる口が言葉を紡ぎ始める。

「キミは今でもボクに負い目を感じてるんだね。ずーっと心配して、ずーっと苦悩して、ずーっと後悔して。だったら、何でボクを置いて行ったの。何で置いていったんだよ!!」

「キミが憎かった！生きていた事を後悔する程殺したいくらい憎かった!!その疲れ切った顔が、血の濃厚な香りが！薄汚れた手が!!ボクの頭を掻き混ぜてぐちゃぐちゃにしたんだよ!!ねえっ!？」

頬にそっと添えていただけの両手が不意に離れ、握り拳となってローランの両頬に戻ってきた。口の中が切れて、唾と一緒に血が飛び出るが、それでも殴打は止まらない。

「いつかその喉元に喰らい付いてやろうとずっと狙ってた！引きちぎって貪ってその血を啜ってやろうって！四六時中キミを濁った目で睨み続けてた!!」

「それなのに、キミはボクを捨てる事もせず、かと言って暴力も振らず、ただ只管に謝りながら面倒を見てくれた。最初はふぎけるなって思ったよ？でもさ、そんなに申し訳無さそうにいられたら、ボクだって多少の溜飲は下ったんだ。」

殴り疲れたのか、今度はその両手をローランの首に回すラップランド。

「家族以外の温かさを知るのは初めてだった。強くなりたいていうボクの我儘も聞いてくれて、それでいて優しく。そうなんだよ、分からなくなっちゃったんだよ。」

「怒り狂ってキミを殺したくて堪らないボクと、キミの温かさに甘えてしまっていたボク、どっちを優先すれば良いのか分からなくなっ

ちやった。」

指の一本一本にゆつくりと力を入れていく。

「多分、キミとボクの関係はずっと引き延ばされて、何処までも溶けながら続いていって、最後には混ざり合って消えちゃうんだって。結局どっちのボクもずつとは優先されれない、曖昧なボク自身が本体で、つて。」

ローランの喉から声にならない息が漏れ始め、ラップランドの両手に込められる力がさらに強くなる。

「なのに、キミは！ボクを！置いていった！！何がキミだけには幸せに暮らしてほしいだ！！何が俺みたいになっちゃいけないだ！！そんなの、絶対に無理って分からないのかよ！！裏切り者！！」

「キミという支えを失ったボクは直ぐに崩れた、そうだよ、全部キミのせいだ。ボクの家族が死んだのも、ボクが狂ったのも、ボクが幸せじゃなくなったのも、ゼーんぶ、紛う事無きキミのせいだ。」

嗚咽を漏らし始めたローラン。その両目からは涙が伝い、ラップランドの真つ白な手を仄かに濡らしていた。両手の力を抜いて、咳き込むローランの頭を地面に押し付けた。

「……分かってるのかな？キミはもう責任を取ったって思い込んでいたようだけど、足りないよ。全然足りないよ？だからさ、ボクはたった今決めたんだ。キミをどうするかを。」

今までの戦闘行為で若干乱れていたローランの髪を鷲掴みにし、再び眼前へと持ち上げる。恐怖や罪悪感でぐちゃぐちゃになったローランの顔をじつくりと見つめてから、ラップランドは口を開いた。

ローランの首筋に異物が食い込み、熱せられた金属を押し当てられたと錯覚する様な熱さが脳を貫く。得体の知れない痛みにくぐもつた声を上げながら見れば、ラップランドが目を瞑って己の首筋に口を付けていた。

それは甘噛みなんて可愛らしいモノではなく、獣が獲物を貪り食うのに酷似した荒々しいモノ。鋭い歯が皮膚を突き破って肉の中に潜り込み、強引に抉り取る。その過程で傷付いた数多の毛細血管から血が噴き出るが、ラップランドはそれをチュウチュウと音を立てて啜っ

ていく。その姿は幼児が読む絵本に描かれているブラッドブルドを連想させた。

「ぷはっ……これでいいかな。」

ラップランドの未知への恐怖と困惑で完全に動けなくなつてしまつたローランに、口周りを血で紅く染めたラップランドが微笑んだ。

「キミはその傷を感じる度にボクを思い出すんだ。それはキミとボクとのアルバムであつて、一生消えることの無い罪の証。ボクの事を何年もほつたらかしにする意地悪なローランには丁度良いよね！」

そう言いながら、ラップランドはもにゅもにゅと口を動かし始めた。先程抉り取つたばかりのローランの肉を咀嚼しているらしく、悍ましい水音がローランの崩れかけた精神をさらに揺さぶる。暫くの間そうして肉を堪能したラップランドは首元を血で汚したローランに向き直り、手を差し出した。

「さあ、ボクの手を取つて。ああ、これはあくまでも比喩的な意味であつて、その手じゃ無理だつていうのは理解してるよ。でも言わせて欲しい。コレはキミへの罰でありボクへのご褒美だ。また昔みたいになんな場所に行つて、狂つた様に殺して、そして笑うんだ。キミも一緒だよ？ちよつと詰まらない言い回しだけど、一生ね。」

ここでキツパリと断れる程、ローランの心は強くなかつた。

## 深海からの手

ローランが窮地に追い詰められている一方、ペイルにも深海からの魔の手が迫りつつあった。

「ロドス・アイランドの君達は、確かにチームワークは中々のものだけれども……個々の実力が、ね。」

拳銃の照準をチェンの額に合わせながら嘯く。

「勿論これは近衛局にも言える事だけど、このままじゃ今回の教訓を活かす機会は未来永劫なさそうだね？」

「……既に勝った気か？その傲慢さが足元を——！」

チェンの挑発を遮るように鳴り響いた銃声は、その音と痛みで沈黙を齎す。

「チェンさん!!」

「ああ。いや、ごめんね。そんな安っぽい挑発について反応しちゃうのもそうだけど、これに関しては仕方がなくないかな？人間とは誰しもが常に他人の上に立ちたがるものさ。幾ら気を引き締めていても、自身の優位を確信できるのが心の中だけじゃなく現実でもできるのなら、誰だって傲慢になる。」

弾丸はチェンの右肩を大きく抉り、しかし止まる事なく直進して地面にめり込んだ。アーミヤが堪らずに叫ぶが、それには事態を好転させる力はない。

抉れた肩から飛び出したピンク色の筋繊維が血に染まっていく光景は見るからに痛々しく、チェンは傷口を確認して意識が飛びそうになった。どうも右腕が殆ど使い物にならなくなったショックよりも、ペイルのアーツが確実にチェンの心身を蝕んでいる結果の方が大きいようだ。

熱が失われていく四肢。理解してはいけない何か鮮明に浮かび上がりつつある脳内。惨たらしく殺されて物言わぬ有機物になるか、精神が崩壊して廃人になるか。その二つに一つしかないとチェンは思い始めてしまった。

ブレイズは朦朧とする意識の全てを触手への対処に割いている為

動けず、アーミヤや他の遠距離攻撃手段を持つオペレーターも触手に防がれて手が出せず、前衛を担当しているオペレーターと近衛局の隊員への被害は甚大。ドクターは身構えてはいるが、何かをしている素振りはない。

対照的にペイルは汗一つかいておらず、いかにも余裕といった風体だ。メフィストは自分の思うように戦況を動かせない事に不満気だが、ペイルとの実力差を認識しているファウストに釘を刺されているので大人しく家畜を操っている。

「苦しそうだね。心も体もスタボロだし、僕が楽にしてあげようか。」その声に反応して一本の触手が持ち上がる。鎌首をもたげる蛇にも見えるそれは、誰かが割って入る隙を作る事なくチェンに向かって伸びた。そして、その恐怖に震える瞳を貫く。

「ッ!？」

間一髪のところまで触手は止まり、冷や汗をどっとかくチェンを他所に空にその先端を向けた。見れば他の触手だけでなくペイルも空を見上げており、その口元は忌々しげに歪んでいる。

「……ファウスト、君達は逃げた方がいい。非常に癩ではあるけれど、僕じゃあれを抑えきれそうにない。」

そう言うや否や全ての触手を空に向かって射出した。生々しい見た目とは裏腹にジグザグと不規則に伸びる触手は、一定の距離まで伸びるとその標的——ロドス・アイランドのロゴが刻まれた飛行機に向かって一直線に殺到する。

触手の豪雨がコックピットを直撃する、すんでのところで全ての触手が切り払われた。ペイルは勿論、その様を観察していたファウストも少なからず衝撃を受けた。あの物理もアーツもなんら効果を示さない丈夫さを備えたあの触手達が、毒々しい水色の蛍光色の液体を撒き散らしながら切断されたのだ。予想外の出来事にメフィストは硬直したが、それはロドスも近衛局も同じだった。

「ああ、本当にどうなってるのかな? いったも良いところで邪魔してきてさあ……来るぞ!!」

「つメフィスト、兵士を再展開しろ! 狙撃部隊はあの飛行機に火力を

集中させるんだ！」

着陸態勢にも入っていない飛行機から飛び降りるのは二つの影。普通ならば良くて下半身がミンチになる事間違いないの高度からの落下だが、二つの影は空中にいてもお構い無しだと言わんばかりに身体を捻って蠢く触手達を薙ぎ払い、矢を弾き、大きなヒビを作りながら無傷で着地した。戦場に響く大きな衝撃に場が静まり返る中、ドクターだけが満足気に頷いていた。サムズアップしながらナイスタイミングとでも言いたげだ。

「急いで呼ばれて来た訳だけど、貴方の判断は賢明だったわ、ドクター。私達の専門分野ね。」

「深海から遠く離れた地であってもこの有様……忌々しくて堪りません！貴方ごと葬り去って差し上げますわ!!」

「……大人しく誰にも感謝されない戦いを続けてろよ。親玉を倒しただとかどうだとか、浮かれちゃってさあ。」

落下の際の空気抵抗で飛びそうになったテンガロンハットを手で直すスカジと、怨敵を操る術者を前に歪んだ笑みを浮かべるスペクター。そして苛立ちを隠そうともせず、罵倒を吐き付けるペイル。

爛々と目を赤く光らせる二人と、ミチミチとトランクから不快な音を響かせながら水色の目で睨み付ける一人。それぞれの眼光が交差するのは一瞬だった。

突き刺すのではなく鞭のように触手をしならせて叩き付ける攻撃を難無く避けられ、肉薄されるも触手で自身を押し上げて距離を取るペイル。不安定な姿勢でも冷静に照準を合わせて発砲するが、銃弾はスカジが武器を引き摺ってから振り上げた事により発生した石礫に防がれた。一連の激しい攻防が皮切りになったのか、触手の猛攻から解放されていたロドスの面々が勢いを盛り返し始め、メフィストとファウストも慌てて迎撃に出る。

着地して舌打ちしたペイルは、なんとしてでも二人に近づかれない為、触手を大量に展開して数で押し潰そうとするが、相手はアビサルハンター。その使命故に大型の生物を駆逐する事に特化した深海の狩人だ。自身の身の丈程の長さがある大剣を軽々と振り回すス

カジと、ギユインギユインと音を立てて回転する丸鋸を振り翳し、触手から飛び散る肉片や体液を浴びてもその笑みを崩さないどころか更に深めていくスペクター相手に有限である触手達だけで勝つ事は非常に難しい。覚悟を決め、触手が溢れ出るトランクを盾にしながらペイルは突撃した。スカジよりも前に出ていたスペクターが反応して丸鋸を押し付けてくるが、その先端をトランクの中に引き込む事に成功したペイルによって肝臓の辺りに鋭い一突きを喰らってしまう。アーツで体力と精神の両方を大きく削り取った上に、ダガーを刃の根元まで突き立ててから捻る様にして引き抜く。

噴き出る血液を見て急所への攻撃が成功した事を確信し、ほくそ笑むペイル。これでもうコイツは終わりだ、と。そうして心にできた余裕は次の瞬間にはペイルごと殴り飛ばされる事になる。

突如として回転する視界と腹部への謎の衝撃に混乱し、受け身も取れずに地面に叩き付けられたペイルが次に見た光景は、触手を捌き切り飛び上がったスカジが全力で大剣を振り被った瞬間だった。

突然の恐怖体験に思わず身が竦んだペイルは、回避は無理だと判断してあの状況でも手離さなかったトランクを盾に防御を試みた。同時に少しでも威力を軽減しようと飲み込んだままだったスペクターの丸鋸を触手で持ち上げて防御に転用する。そんな涙ぐましい努力をした仰向け状態のペイルに向かって、スカジは思い切り大剣を振り下ろす。

「おぶっ!?!」

剣身を防いでもその桁外れの威力までは当然防ぎ切れず、地面と板挟みにされる形で全身を衝撃が駆け巡った。悲鳴を上げる両腕に、肺から吐き出された息。両の眼球が飛び出した錯覚すら覚える。それでも即座に身体が動いたのは幸運だとしか言いようが無いだろう。まるで役に立たなかった丸鋸ごと触手を放出してスカジを強引に押しつけ、その隙に立ち上がる。

(畜生、ダメーシが……クソ、クソ、ふぎけんなクソが!ウルサスでもここまで力は強くなえんだよ!全身が痛い、くらくらしてきた、内臓もやられた……!)

今にも大の字になりたい欲求を抑えながら、ペイルは眼前に立つスカジ、ではなく離れた位置に佇むスペクターを睨み付け、率直な疑問を口内の血液ごと吐き出した。

「な、んでエ……生きてんだよ？ゴホツゴヒユ、お、おか、おかしいだろ……？」

確かに急所を刺した筈のスペクターはしつかりとその足で立っていた。普通なら死んでるか、よくて痙攣しながら倒れ伏してるかの攻撃を喰らってだ。刃の部分が完全に壊れた丸鋸を見ていた赤い目が、ペイルの姿を捉える。

「おかしいも何も、あの程度で死ぬ筈がありませんもの？勝手に貴方が勘違いしただけですわ。こうして痛みと引き換えに忌まわしい貴方を殴り飛ばせたのも、天使からの試練であり、祝福なのでしょいか……ウフフ、アハハハハハハ。」

鼓膜を揺さ振る狂氣的な笑い声に苦虫を噛み潰したような顔をするペイルは、周囲を見回して更にその表情を深める。

気付けばロドスはあつという間に陣形を組み直して体制を立て直しており、メフィストとファウストは逃げの姿勢に入っていた。敗戦した事は火を見るよりも明らかだ。便利屋としてのプライドを深く傷付けられたペイルは屈辱だと嘆く。それでもって、逃走の準備だけは済ませていた。と言つても、呼吸を整えて記憶の中の文章を読み上げるだけだ。

「——恐ろしき雲よ出でよ。」

おどろおどろしい気配と共に、煙幕と表現しても差し支えない程の濃霧がペイルを包み込む。ペイルが何をするのか気付いたスカジとスペクターは即座に濃霧の中に突っ込もうとするが、ペイルの姿が完全に見えなくなった途端に濃霧は爆発的に広がり、辺り一体を覆い尽くした。

(よし、一旦スカーモールに行つて治療を……)

傷だらけな、しかしそれでも原型を保っているトランクに入り込もうとするペイルのコートの際を、誰かが勢いよく掴んだ。

「この程度で逃げられるとでも？」



「あゝ あ!？」

濃霧の中でもはつきりと存在を主張する双眼と目が合い、ペイルは思わず声を上げる。アーツなどではない、全く別の技術を用いて生み出したこの特殊な霧は、術者を除いた中にいる者を惑わせる。故に、この霧の中で目的に辿り着く事など不可能な筈なのだ。視界は遮られ、湿っぽいカビた臭いしかなしい、不安を煽るぐらいに静寂で、何処から何処へと流れて行くかも分からない、この霧の中で。

だと言うのに、この女は。

(ああいいさ、やってやるよ!そんなに逃したくないって言うんなら、後を追うのが当たり前だよねえ!じゃあ追わせてやるよ!)

「甘いんだよ お!!」

(無理矢理ねえ!!)

襟を掴む腕をがちりと掴み、ペイルは賭けに出た。スカジが大剣で首を斬り飛ばそうとするや否や、瞬時にトランクから触手が飛び出し、ペイルとスカジを包み込んでから引き込んだ。

取り敢えずスカジを賭けのテーブルに強引に着かせる事には成功した。しかし、その肝心の賭けの内容が問題だ。

このままスカーモールに飛んだところで勝手に余所者を連れ込んで、剩えその場で殺し合い。仮に生き残ったとしても何かしらの処罰を受ける事は想像に難くない。触手の大元に飛んだとしても戦いに巻き込まれて自分は死ぬだろう。この化け物を確実に倒せる実力があって、尚且つ自分の失態を擦りつけても何とか許してもらえる人物。思い浮かぶ人間は一人しかいない。

普段は一瞬にしか感じられない転移の時間も随分と長く感じた。スカジはここでペイルを始末したら戻れなくなると本能的に感じたのか、大人しかったが。ペイルもここでスカジを振り落とす力も体力もないのでじっとしていた。

そして転移が終わり、目の前で開いたトランクの蓋から外に顔を出したペイルは叫ぶ。

「ローラン!悪いけど……え?」

人外としか思えない実力者が跳梁跋扈するフィクサー、その頂点に

立つ特色達。スカーモールから『黒』を与えられた男。面識があり、友人とまでは呼べないかもしれないが邪険に扱われる事もない存在。

ローランに助けを求めた。しかし、その言葉が最後まで紡がれる事はなかった。目の前の出来事があまりにも衝撃的だったのだ。

遅れて出てきたスカジがペイルを雑に蹴り飛ばし、胎児の様に丸くなる事しかできなくなった男を視界から外して正面を見据える。

そこには両手から血を流して項垂れている大切な友だちと、

「ローランに何をしたのかは説明しなくていいわ。早くこっちに渡して頂戴。」

「……はあ？いきなり登場して、妄言吐かれても困るんだけど。」

その友だちを愛おしそうに抱きしめていた銀狼がいた。

戻れない？

「キミは確か……厄星とか呼ばれてれるバウンティハンターだっけ？  
賞金に目が眩んだなら、覚まさせてあげようか？」

「？友だちにどうして賞金が関係するのかしら。」

スカジが発した友だちという単語を聞いたラップランドは、その意味を理解して爆笑した。

「友だちって、アハ、ローランを何も知らないで友だちって言ってるとか、クフツ、ダメだ面白すぎる！アハハハハツ!!」

ラップランドの馬鹿にしたような笑い声にスカジは若干眉を顰めるが、それはラップランドにとっては凶星を突かれているようにしか見えなかった。

目の前の愚鈍な女に笑いが止まらない。ローランの事を何も理解していないクセに友だちと宣うだなんて、下手なジョークよりも全然面白いじゃないか。どうせコイツは、ローランが黒い沈黙だと知って媚を売りに来たただけだ。

「ハア……何も知らないってのは幸せだね？ローランがどんな人間なのかも理解してないで友だちってさ。特色フィクサーの実力も知らない程の盲目なのかな？それとも媚びを売りに来ただけ？どっちにしろ、キミみたいな木っ端しなんかローランは興味がないんだよね。邪魔だからさ、さっさと消えてくれないかな。」

ローランの薄っぺらく、故に何ら違和感を覚えない飄々とした態度に勘違いしただけの哀れな女だ。何処で接点があったのかは知らないが、そんな事はどうでもいい。この無知な女に現実を分からせるのは、一体どれ程楽しいのだろうか。

「知らないでしょ？ローランはどうしようもない人殺しで、悪人で、自分で自分の首を絞める程愚かで、脆弱で、だれかが自分を殺してくれる事を救いだと捉えてる、ほんつとうに馬鹿な男だつて。ローランが手に掛けた人数を僕が知ってる範囲で教えてあげようか？破滅させた他人の幸せを語ってあげようか？ローランの空っぽを満たす事ができる存在はキミじゃないって、分からせてあげようか。」

「必要ないわ、全部知ってるもの。」

この女が見せたのは、期待していた醜く歪んでいく表情ではなく、目の前の執着の対象が時折見せていた飄々とした表情に何処か似ているものだった。

「これでも結構長いこと一緒にいたのよ？ 勿論知ってるわ、ローランが私に語ってくれたから。」

「はあ？ 何それ。現実が受け入れられなくて気でも狂った？ よかったじゃん。ローランと一緒にだよ。」

「貴方と一緒にされても困るのだけれど……ええ、今思い返してみればローランとは一緒に事も多かったわね。」

ラップランドは一瞬呆気にとられた顔をして、すぐに眉を顰めた。表情が完全に目の前の女と入れ替わっていた事には気付かなかつたが、それほどこの女が言っている事が衝撃的だったのだ。それこそ、女の頭のネジが何本も外れていると信じたくなる程に。

「他人と共有できるものがあるということは素晴らしい事だつてローランは言っていたけど、正にその通りだと思わうわ。深海の光を飲み込む暗さも、物悲しくなる冷たさももう感じない。過酷な運命に抗う強さ、正しくあろうと努力する姿、決して自分を見失わない理性、前の二つはローランが私に自覚させてくれたの。そして最後の一つは、私がローランに自覚させるべきこと。」

「全部知ったように喋るヤツつて大嫌いなんだよね。ボクがみんなに笑われるだけのピエロになった気がしてさ。」

「彼は何も知らない私に手を差し出してくれたのよ。でも、私が手を差し出す前に彼は行ってしまったの。可笑しいことよね？ 彼も私も、一人でいる事の本当の辛さを知っている筈なのに。」

視界が真っ赤に染まったように錯覚したかと思えば、ラップランドの両手にはローランの掌に突き刺している剣が握られていた。ローランの傷口を広げないように極めて理性的に剣を引き抜くと、目の前の女に右手の剣の切先を向ける。滴り落ちる血に高まる恍惚感を覚えるが、今はそれよりも怒りが勝っている。

「さつきから、何なのかな？」

「私はローランを返して欲しいのよ。傷口が膿んでしまうわ。」

「お前はローランの何なんだよ。べらべらと気色悪い妄想垂れ流して、気味が悪いんだよね。」

「私はローランの友だちよ。既に言ったと思うのだけど……まあ、貴方がローランの何だろうと私には関係ないわ。危害を加えている時点で高が知れているもの。」

「トモダチ。トモダチかあ……現実を直視したくない可哀想なおトモダチ。ローランもこんなのに付き纏われてるなんて大変だね?」

ラップランドから殺意が漏れ出したのを感じ取ったのか、スカジもベルトで肩に掛けていた大剣の柄を取り、軽々と片手で構えた。

その様子にラップランドは片眉を吊り上げる。如何にも気に食わないといった表情だ。

「ハッ、使う武器まで一緒にしなきゃ気が済まないとか本当に気色悪いね。今すぐロドスに戻って診てもらった方がいいんじゃないかなあ?」

「……今ので分かったわ。」

「遂に我慢の限界かい? ほら、みっともなく暴れてごらんよ。情けないキミの姿を見ればローランも完全に見限るだろうしき。」

「情けないのは、いえ、可哀想なのは……貴方のほうよ。」

ラップランドのすぐ近くで項垂れているローランを見れば、目の焦点が合っておらず、顔全体が青褪めている。首筋は一部抉れていて、溢れ出た血が黒いスーツと白いシャツを染め上げていた。そう言えば、ラップランドの口元にも血が付いている。

一度だけ、ローランが話していた。いつ襲い来るか分からない深海からの追手に警戒しながら二人で歩いていた時。地上の事を語るついでに、何となしげに語っていた事。

今まで数え切れない程の人間を不幸にしてきた。その中でも、とびっきりの絶望に叩き落としてしまった少女がいると。暫くの間、罪悪感から面倒を見ていたと。花の咲いた様な笑顔は狂った様に豹変して、復讐の為に生き続け、目的を失って本当に狂ってしまった、銀髪、ループス。

「貴方は本当のローランを見た事があるのかしら。」

「それってボクの質問じゃないのかな。寧ろ、ボク以外にいないと思うけど?」

「只管心を押し殺して、それでも葛藤の内に訳が分からなくなって、罪の意識だけを膨れ上がらせていくのが本当のローランだと思っっているの?だとしたら、それはとても悲しい事だわ。」

「まるで本当のローランを知っているかのような口振りだね。いい加減言ってる意味が分かんなくなってきたし付き合うのも面倒臭いからさ、早く来なよ。」

「人は必ず何かしらの欠点を一つは持っているわ。それはローランも例外じゃない。彼の唯一と言ってもいい欠点は、自分で自分をより良い存在にする事ができない、これだけよ。全部一人で抑え込んで、誰にも知られる事無く奈落に向かって落ちて行くの。誰かに手を伸ばして欲しい、その手を掴んで離したくない、そんな人なら誰しもが持つていて当たり前前の欲望すら抑え込んでしまうの。一人で生きていくのが、とても辛いよ。」

これ以上この女の話を知りたくない。

「誰かの命を奪い続ける事でしか生きてゆけないこの世界に、彼は耐える事ができなかった。ローランの根はとても優しいというのは、貴方も理解していた筈よ。」

そんな事はとうに知っている。だから、その優しさに付け入ろうとした。

「だから、ローランは貴方に対して途方も無い罪悪感を抱いていた。きつと、元の幸せを取り戻して欲しくて頑張っていたのね。けど、貴方の狂気は留まる事を知らなかった……知っているかしら?狂気は伝播するのよ。私の仲間もそうだったわ。それはローランも同じ。誰も手を繋いでいないと勝手に落ちていくのに、誰かと手を繋いでいてもその方向に引っ張られ続けるの。自分の意思なんてとうに死んでしまったかのように。」

ボクが狂っていけばいく程、ローランも狂って壊れていった。それが堪らなく嬉しかったんだ。それは、ボクだけをしっかりと見ていて

くれる事の証明だったから。

「精神が完全に壊れて廃人に成りかけると、一つの感情を盾にして最後の抵抗を試みるの。貴方は『狂気』で、私は『諦め』。ローランの場合は、『罪悪感』ね。それに縋っていないと、日々を生きるのが本当に苦しくて仕方がないの。もう、その感情を通さないと外の世界を見る事ができないの。聞く事も、感じる事もできないわ。」

狂気は一度吞まれてしまえば楽なのに、ローランは必死に足掻いた。口の中に流れ込んでくる水を吐き出して酸素を求めようにも、かくその姿は、見ているだけで楽しくて愛おしかった。

「……ローランは罪悪感を感じられずにはいられないの。それが唯一自分をこの世に留めてくれて、いつか自分を救ってくれると信じていたから。勿論、貴方にはとてつもない罪悪感を感じていたでしょうね。直視する事すら憚れる程の、濃密な罪悪感。果たしてそれは、貴方自身を見ていると言っているのかしら。」

ローランの生き方は歪でしかなかった。罪悪感なんて抱くだけ無駄でしかないのに、宝物みたいに大事に抱えるんだから。ただ重荷にしかならないそれに一体どんな価値を見出していたんだろう？

だから、そんなモノより。

「じゃあ、何だよ。ローランは、ボクを見てないって言いたいのかな……？」

「まあ、そういう事よ。貴方という存在はローランにとって罪そのものであり、許されざる己の所業を証明するモノ。只管に尽くして、後悔して、懺悔して……それでも許されなかったし、自分でも赦せなかった。そこに貴方という人間が入り込む余地は……ないわ。」

偶にでもよかったから。

「な、何出鱈目言ってるんだよ!? そもそも、お前にボクとローランの何が分かるんだよ!!」

冷たくてもよかったから。

「ローランが！ボクを！見ていないって！そんな訳ないだろ!! アイツが全部滅茶苦茶にしたんだよ!! 有り得たかもしれないボクの未来を!! そんなアイツが、ローランが!! ボクを見ていない筈がないだろ!!」

痛くてもよかったから。

「朝から晩まで、ずっと一緒だったんだぞ?! 光の届かない闇の中でだって、噎せ返る程の血溜まりの中でだって、ずっとずっとずつと………一緒に、いたのかなあ。いかなかったのかなあ? いたかったのかなあ?」

ボクだけを見て欲しかった。

「違う違う、違う!! 嘘だ、違う、そんなんじゃない! そんな事有り得ない!! 何でだよ!! 全部ボクが勝手に思い込んでただけだった!?! 違う!! ローランだって、ローランだって!! 嫌だ!! ボクはそんなじゃない!! ボクはそんなじゃないんだよ!! 嫌だ、思い出せない、助けて、誰か助けてよ、ローラン、嫌だ、ローラン。ああ、あああ。」

心の底でずっと仕舞い込んでいた真実。とつくに気付いていた筈だったんだ。ローランが見てるのは罪そのもので、向ける感情は罪悪感と憐憫と後悔ばかり。

ボクが見ていたローランは上っ面だけ。

狂えるローランを罪悪感で縛り付けて離したくなかった。

唯一過去のボクを知ってる人。

ボクは過去のローランを知らない人。

お互いにお互いを見てない吐き気のある関係。

壊れ続ける円環を巡り巡っただけの時間。

ボクはローランを赦したかった。

ローランはボクに許されたかった。

ボクが拒否すれば永遠に続くと思った。

ボクは捨てられた? 救われた?

答えを出したくなかった。

ローランは何処に行くの? そんな身体で何処に行けるの?

一緒にいようよ。キミは違うの?

お願いだよ。一生に一度のお願い。

何処かに行くなら連れて行ってよ。

何で自分一人で行っちゃうの?

普通の幸せなんかどうでもいいよ。



暗いよ。寂しいよ。灯りが消えちゃったから、道も何も見えないよ。笑ってなきや怖いんだよ。過去の罪なんか、全部水に流そうよ。前が見えないでしょ？ボクと一緒にいれば、寂しくないよ？本当だよ？

どうして？

『俺と一緒にいちや駄目なんだ。』

なんで？

『人でなしのろくでなし。キミには、俺みたいになつて欲しくない。』  
別にいいんだよ？

『まだやり直せるんだ。キミは光の元で、誰かと一緒に笑い合うのが一番だ。』

待って。

『キミは俺を殺してもいいし、殺さなくてもいい。それでキミが幸せになれるなら。でも、地獄への道を歩んじや駄目だ。もしかしたら俺が、殺してしまうかもしれない。』

嘘だったんだよ。一緒にいたかっただけなんだよ。

『体調には気を付けろよ。あと、髪の手入れは一人でできるか？ははっ………なんてな。』

ねえ。

『どうか、俺の事を赦さないでくれ。もし赦されたら、俺は。』

許すよ。許すから。

『……………ごめんな。』

あつ。

嫌だ。溶けていく。意識が闇に。消えてなくなっちゃう。

怖いよ。助けて。引っ張り上げて。

ローラン。

「ひぐ、いやだ、やだよう。う、ローラン。ねえ、ローラン。」  
「……………」

助けを求めても、その人の精神を壊したのはボクで。

「相当思い詰めていたのね。今までの行いを考えれば自業自得かもしれないけど、ローランはきつと許してくれるわ。けど、ごめんなさい。これだけは許せなかったの。」

「ローランはもう、壊れちゃったの。」

ボクは壊すことしか知らなかった。

前を向ける人と、できない人たち

スカジは考えていた。

一先ず腕の中にいる友だちの目をよく見てみた。いつも以上に濁った瞳は何も映さない。寧ろ澄んだようにも見えるのは、それ程ローランにとつて楽なのだろうか、今は。

首筋には痛々しい抉られた跡があり、そこから溢れた血がシャツの襟を紅く染めていた。剣で貫かれた両手の出血も酷い。スカジと出会った時には着けていなかった手袋にも穴が空いている。彼女にとつてのソードバックの様な機能を持っているであろうこの手袋は、まだ機能するのだろうか。

「……もう大丈夫よローラン。安心して。」

そう言つて怪我の応急処置を始めようとするが、普段から傷の治りが早い故に、特にこれといった治療道具を持ち歩いていないスカジ。少し困つてからローランが何か持っていないかと探し、腰に付けていたポーチから発見した治療道具を借りることにした。

「痛かったら言つて。」  
「……………」

手袋を脱がせて血をガーゼで拭い、消毒液をかけてもローランは無反応だった。呻き声の一つすら上げない様子にますます心配になるスカジ。ロドスの医療オペレーターから叩き込まれた知識を頼りに、針と糸で傷口を縫合していくが、やはりローランは何の反応も示さない。麻酔がなかったのもそのまま縫っている為、本来なら涙を滲ませるぐらいには痛い筈のだが、それでも表情すら動かさないローランを見て、スカジは悲しくなった。

「やっぱり、あなたには笑顔が一番似合うわ。」

ローランは陸に上がってきたスカジに色々な事を教えてくれた。それは、感情も含まれる。それらを教えてくれたローランが、過去の自分よりも無感情になってしまっているのが、スカジは堪らなく悲しかった。

一通りの処置を終え、ローランを路地の壁を背にもたれかかる様に

移動させてから、スカジは考え始めた。ローランをどうするかだ。

彼の状態を考えればロドスに連れて帰るのがベストなのだろう。しかし、ローランはロドスの人員を何人か殺している。ロドスで治療を受けさせてもあまり良い目で見られないのは想像に難くない。まあ、そうなればスカジが守ればいいだけの話なのだが。

ローランはどんな事も大して気にしていない様に見えて、その内は非常に繊細だ。仮に回復しても、ロドスでの冷たい視線には耐えられないかもしれない。

「……そうだわ。」

精神を病んだ人間には、静かな環境で生活する事が望ましいのを、スカジは海の中にいた頃から知っている。多くの仲間や、スカジ自身もそうして精神の安定を保っていたことがある。

ロドスで傷の治療を済ませたら、すぐに静かな場所に連れて行けばいいのだ。

例えば、スカジの故郷に連れて行くのが良いかもしれない。

そうだ、そうしよう。

いつかローランには自分の故郷を紹介したいと思っていた。彼には生まれ故郷のシラクーザと育ちのカジミエーシユに連れて行って貰った事があるが、私の故郷は言葉で語ったことがあるだけで、実際に見てもらった事はない。丁度良い機会だ。

……彼は海の中で自分が呼吸ができるのかと冗談めかして笑っていた。私達と同じ存在になれば、呼吸できるのだろうか？他に方法があるかも知れないが、その時はローランと一緒に考えればいいだろう。

取り敢えずローランへの故郷紹介プランを思考の隅に追いやり、この状況を片付ける事にしたスカジ。

まずは、目の前で蹲っているラツブランド。呼び掛けてみても嗚咽で返されるばかりだったので、持ち上げてローランの近くに放置する事にした。完全に自業自得なのだが、精神崩壊とはやはり恐ろしいものだ。かつては、自分もあなる環境にいたのだから。

そして次に、腹部を押さえながら後退りしているペイル。最早立つ

て逃げる事もできない様で、トドメを刺すのは簡単だ。

「いい加減、観念することね。散々逃げ回っていた様だけど、それもここで終わりよ。」

「ま、まって……はあ、と、取引、しないか？」

見苦しさを覚える抵抗に、スカジは大剣を頭上に掲げた。

「本当に！待ってほしい……ふーっ、君にとっても、悪くないって、いったあ……。」

スカジの様に白い顔を更に青白くさせて、脂汗をかきながら息も絶え絶えに話すペイル。先程腹部に受けたダメージがまだ相当残っているらしく、目元にはうっすらと涙まで滲んでいた。

「……その取引とやらの内容について簡潔に言いなさい。」

「は、はは、君さ、ローランがああなるのは、不本意なんだろう？僕だったら、治せない事も、ないかもよ？」

「過ぎた嘘は身を滅ぼすわよ？」

「嘘じゃないさ、まあ、絶対とは……言い切れないけど。」

「そう。じゃ、さつさと立てる様になりなさい。話も途切れ途切れでしにくいし。幾ら何でも回復するのが遅過ぎよ。」

勿論、逃げようとするなら殺す、という意志と一緒にペイルを睨み付ける。

「今のは、嫌味かな？それとも嫉妬？いやー悪い、悪い。生憎と僕は、ふう、入れられた血の量が少ないんだ。君とは違って、ね。」

「さつさとなさい。でなければ生まれてきた事を後悔させてあげるわ。」

目の前に突き付けられたスカジの大剣の切先に、ペイルは笑みを引き攣らせる。慌てて壁につきながら立ち上がるが、やはりまだ苦しいようだ。

「……で、貴方はどうやってローランを治すのかしら？」

「素晴らしい友情だよ全く、って、怒んない怒んない。ちゃんと説明するって、ほら、コレを使うんだよ。」

ペイルはスカジの反応におっかなびっくりしながらも、半開きにしたトランクの中から小さな筒の様な物を取り出した。片方にはボタ

ンのようなものがついている。筒の側面には縦に細い線が走っており、そこからは淡い水色の光が漏れていた。

「僕のお守りにして最後の生命線。即効性の精神回復剤だよ。あと、滅茶苦茶に高い。」

「最後はどうでもいいけど……どうしてこんなモノを?」

「おいおい、僕は君に比べたらまだ人間なのさ。万が一やらかして、このトランクの中身からちよつかいかけられるような事でもあれば、僕は身も心も簡単に押し潰されてしまう。それを少しでも回避する為の、それさ。」

だから効き目はバツチリだよ、と後押しするペイル。腹部の痛みもある程度引いてきたのか、段々と饒舌になってきている。

「分かった。今回は貴方を信じることにするわ。それで、副作用はあるの?」

「副作用? あー……副作用と言うよりかは主作用なんだけど、コイツはトラウマになった直近の記憶を消し飛ばすモノなんだ。多少は記憶の混濁が見られるだろうけど、別にいいだろう?」

「……本当に効くの?」

「逆に聞くけど、たかが人間如きが操るアーツが、僕らの知ってるアイツらが撒き散らす狂気に勝るとでも? この薬はアイツらを想定して作られてるんだよ?」

肩を竦め、そう嘯くペイルの呆れたとでも言わんばかりの視線に少しイラつときたスカジ。

ペイルから薬を渡して貰い、ローランへと小走りで近寄る。廃人故の相変わらぬ無反応にペイルは何故かニヤニヤしながら、スカジに指示を飛ばした。

「何処に打つてもいいからね。なるべく脳に近い方がいいけど。」

「じゃあ、頭ね。」

「確かに何処でもいいって言ったけど、普通そこいくかい?」

「……じゃあ、首ね。」

ペイルの馬鹿を見るような目に割とイラつときたスカジ。持ち前の理性でペイルに殴りかかりたいという欲求を抑えつつ、ローランの

首に慎重に狙いを定め、薬を打ち込んだ。

「ローラン、起きて。」

どうしようも無い絶望感が心を満たしていた。

まだ幼い彼女との記憶が溢れ返る。

関わりなくていい事に首を突っ込み、取る必要のない距離を取り続け、教えるべきで無い事を教え込んでいたあの頃。

俺は彼女の幸せを滅茶苦茶にしたくせに、本気で彼女の幸せを願っていた。

だから、この世界で生きて行く術を俺なりに教えていた。その術が血塗られたモノだという事から目を逸らし続けながら。

……俺が彼女にした事は、俺にとって全て裏目に出た。

必要以上の加虐性を身につけ、その瞳に狂気を宿している事に気付いた時には、彼女は既にラップランドになっていた。

俺が最も忌み嫌っていた、俺自身。彼女にそんな俺を教えていたのが間違いだった。

あの場で見捨てる事なんか到底出来なかったし、ましてや最後まで彼女に付き添う勇氣もなかった。今思えば、全てが中途半端だった。

俺が殺した。彼女の過去を、彼女の未来を、彼女の幸せを、彼女自身を。

直す事なんて俺には無理だ。壊す事しか知らない俺には。

次第に俺は彼女を視界に入れるのが苦痛になっていった。俺の罪が短剣となって喉元に突き付けられる感覚がしたんだ。それを受け入れろと叫ぶなけなしの善意と、それを弾き返せと叫ぶ空っぽの自尊心。

自分は悪く無い、自分が悪かった。それすら決められなかった。

葛藤だけが続いた。

本来彼女を導く筈だった人達を俺が殺し、いつの間にか彼女の無垢な手を俺が引いていた。赤黒い、暗闇に。

それすらも途中で放棄した。これ以上俺の様になってほしくなかったとあの時は思っていたが、今思えば、ただ彼女から逃げていただけなのかもしれない。

分からない。俺は何をしたかったんだ？彼女を幸せにしたかったのか？深淵に突き落とした分際で？

自己満足の偽善行為に勤しむこの俺を、彼女がどう見ていたのかは今だに知らない。それでも、あまり良い顔をしてなかったのは確かだろう。

全部一方的な押し付けだった。只管に身勝手な押し付け。

こんな俺を、彼女は到底許してくれない筈だ。

だけど、俺は今でも『もしも』を考えてしまう。有り得ない事の結末を。

いや、俺さえいなければ、彼女はその『もしも』の道を辿っていたのだろう。つくづく自分が嫌になる。

本当に嫌だ。屍の上に立つ資格も、自分が屍になる覚悟も無い。

いざ彼女が俺を殺そうとした時、俺は本当に黙って彼女の刃を受け入れる事ができるのだろうか。

ああ、分からない。みっともなく抵抗するかもしれない。

彼女を殺すかもしれない。

俺は何をしてあげられるんだ？

答えを出したくない。

俺は――



「……あ、あ?」

「ローラン、大丈夫なの? ローラン?」

「え、あ、……あれ?」

「こつちを睨まないでよスカジ。だから多少は記憶の混濁が見られるって言ったよ、僕は。」

ローランが目を覚ました。別に寝ていた訳ではないが、スカジからすれば永遠の眠りに就いていたも同然だ。

精神を取り戻した彼が状況を把握するのにたつぷり五分。

途端にローランは気まずそうな顔をして認識の擦り合わせを始めた。

「えーと、まずペイルは何でここにいるんだ?」

「……逃げてきたとしか、ね。逃げた先までとんでもない怪物が追ってきた訳だけど。」

「俺は何をしてたんだ?」

「そこで蹲ってる狂人のアーツを喰らってたのさ。あ、治したのは僕だからさ、貸し一つね。」

素直に感謝を述べたローランは、自身のすぐ側で膝に顔を埋めているラツプランドを見つめる。どう対応すれば良いのか迷ったが、先にもう一つの問題を解決する事にした。

「そっか、うん……あのー、スカジ?」

「ん、何かしら。」

「いや、ありがとう。割とヤバかった俺を助けてくれたって話だし、傷の手当てもしてくれたみたいだしさ。」

暫く乾いた笑いを続けていたローランだが、一呼吸置いてから弱々しく話し始めた。

「……何も俺に言わないのか? あんな酷い別れ方したんだぞ。君に一言一言言われた方が、俺としては楽だったりするんだけどなあ。」

「別に大して気にしてないわ。ちよつと痛かったけど、あの程度は慣れているし。それよりも、貴方が無事でよかった。」

「お、おう。ありがとう。おかしいな、俺が気にしすぎてただけだって言うのか……?」

あの女がおかしいだけだと心の中で毒づくペイル。

意識が明瞭になっていくにつれて、ローランは怪我をした部位を気にし始めた。

「手が……なんか首も痛いし、ペイル。俺のポーチから何か鎮痛剤とか渡してくれないか。」

「しようがないな全く。はい。」

「うん、ありがと……げ、エンケファリンか、これ?」

プラスチックの容器に封入された緑の蛍光色の液体。Wへの恨み言と共にローランは意を決して液体を啜り始めた。

「そのエンケファリンという液体は、何か危ない作用があるの?」

ロドスでのブリーフィングで出ていたWという傭兵を何となく思い出しながら、スカジが尋ねる。

「うつぶ、んぐ……ああ、麻薬みたいなモノさ。精神に負荷となるストレスの類を緩和するだのなんだのって話だ。当然飲み続けてたら廃人だな。」

本来の用途は別にあるらしいけど、と締め括る。心なしか、先程よりも表情が和らいでいた。

「Wのヤツ、嫌がらせにも程があると思うんだよな。」

「仲の良い証拠じゃないか。それ、結構な値段がするんだぞ?」

調子を取り戻しつつあるローランの肩をペイルは軽く叩いて、同時に小さく丁寧に折られた紙を手渡した。

「貸しは直ぐに返して貰う事にするさ。じゃ、その通りに頼むよ。」

そのままローランの脇を通り抜け、スカジと一瞬だけ視線を交わした後、ペイルは裏路地の奥へと消えていった。

その一方で、ローランは開いた紙を何やら真剣な目つきで見つめている。

「何が書いてあるの?」

「いや、何でもない。君には……まあ、関係あるかも。」

暫く視線を紙とスカジの間を彷徨わせていたローランは、掌の傷を

気遣いながら紙を折り畳んでスーツのポケットにしまった。どうやらスカジが相手でも言いづらい内容だったらしい。

「嫌な事があつたら言わなくちゃダメだって、以前言ってくれたのは貴方よ。」

「そんな事言ったかなあ?」

「私はしつかり覚えているわ。他にもね。貴方からしてみれば気にも止めない言葉だったかもしれないけど、私にとつては心に残る言葉だったの。そういう小さな積み重ねが今の私に繋がるの。」

「うーん、まあ人の価値観はそれぞれだし、君がいいなら何よりだけど……俺そんな事言ってたのか。」

「ええ。じゃあ、言ってみて。」

「君さ、知りたいだけだよね。」

「そんな事ないわ。ただ貴方が心配なだけ。」

何故か勝ち気な笑みを見せるスカジに、幾分か心が軽くなる感覚を覚えたローラン。それにつられて表情も明るくなるが、直後にため息をついて眉間に皺を作り始めた。

「……ごめん、やっぱり内容は言えないや。君がロドスに所属している以上、万が一を考えると、さ。」

「……そうよね。私も無遠慮だったわ。ごめんなさい。」

「あ、でもさ、君が俺を心配してくれてたつてだけでも凄く助かったよ!その点については本当に嬉しかったんだ。ありがとう。」

スカジはしゅんとした顔をした後、また直ぐににこやかな顔になった。

「どういたしまして。」

「うん。あと、一つだけ言っておくよ。そう遠くない内にチエルノボーグが大変な事になるって。」

「大変な事?」

「ああ、まあ、巻き込まれないように気をつけてってことだよ……俺から話せるのはこれだけだ。うん、少ないな。」

「分かった。心に留めておくわ。」

話に一区切りついたら判断したローランは、ラップランドの様子を

見る為に離れていった。

(また戦いに身を投じていくのでしょね)

ラップランドの肩を叩いて反応を確認しているローランを眺めながら考える。

話を聞く限り、ローランは人生の多くを戦いとも呼べない殺し合いに費やして来た。それはスカジも同じだ。多少の差異はあるかもしれないが、二人は生きる為に戦ってきた。ローランは自分に意味を見出す為、スカジはみんなを、テラを守る為に。

二人が最初に出会ったのはほんの数年前だ。出会った時の状況こそ衝撃的で殺伐としていたが、暫くの間を置いて再会した時にはそんな雰囲気は微塵もなかった。

それから、一年程ローランに依頼という形でテラの大地を共に回った。

あれほど穏やかな一年を過ごしたのは、もしかしたら二人共あれが初めてかもしれない。スカジとしては本当に楽しかったし、それはローランもきつと同じ筈だ。

あの一年を通して、スカジは自分が幸せになれる事を知った。ご飯が美味しいといった些細な幸せから、友だちと一緒に歩ける大きな幸せ。海にいた時では中々噛み締める事の出来なかったモノたちだ。

特に事あるごとに減っていく友だちとの幸せは、あんな喪失感を抱くくらいなら、二度と友だちを作ってはいけないと、他人を不幸に巻き込んではいけないとスカジに強く戒める程に悲しかった。

そんな戒めも、今はスカジの過去を構成するほんの一部に過ぎない。

スカジは前を向けた。本当の意味で、歩み始める事ができた。自分に自信を持てるようになった。

対して、ローランはどうだろうか。本当に前を向けているのだろうか。自分に自信を持てているのだろうか。幸せに、なれているのだろうか。

答えは、ノーだろう。ローランはスカジの過去に真摯に向き合い、未来を明るく照らす事が出来たが、スカジはローランにそういった事

をまだ出来ていない。

いつか必ず、ローランに感謝を、そして友だちとして当たり前の事をしてあげたい。これ以上、ローランが悲しまないようになしてあげたい。

確かにローランは人殺しなのだろう。本人がいつか喋っていたように、どうしようもないろくでなしなのかもしれない。

けど、スカジはそうは思わない。それだけの話だ。

そんな風に考えていると、スカジの目の前で異変が起きた。

ローランの様子が明らかにおかしい。意識を取り戻したと思われるラップランドに恐る恐ると話しかけては、元々白い顔を更に青白くさせている。

何故かラップランドがローランに抱き付くと、ローランの感情が表面に染み出し始めた。絶望しているような、後悔しているような感情。

スカジは自分のやらかしを何となく感じ取った。